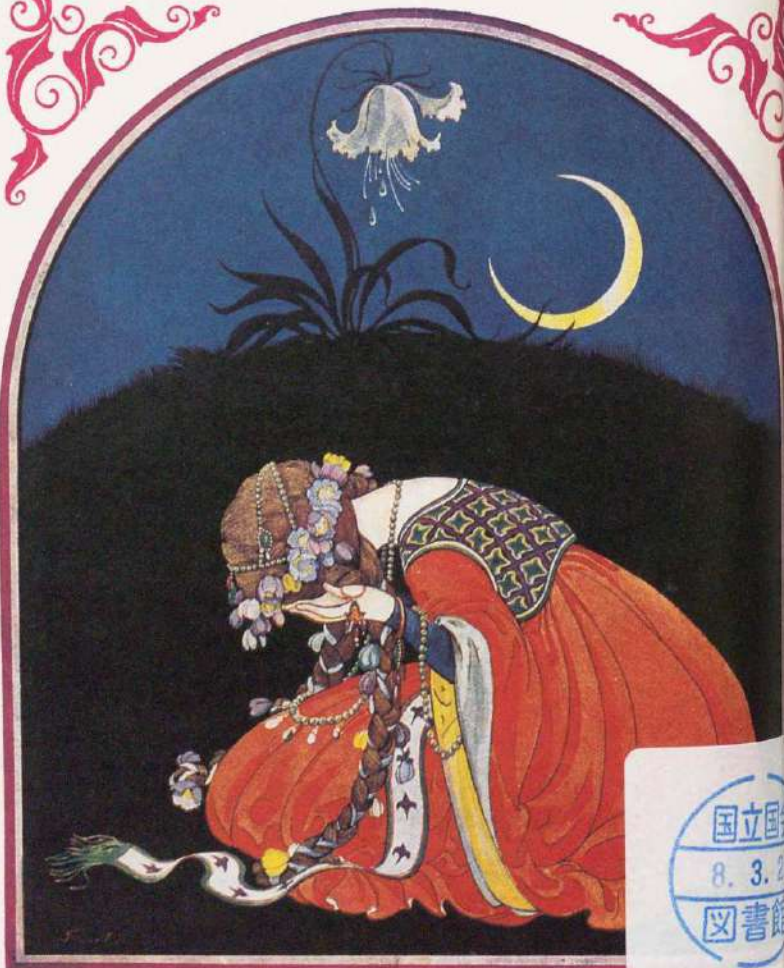


Z32-B88

金の星

第五卷 第九号

大正十二年四月四日發行

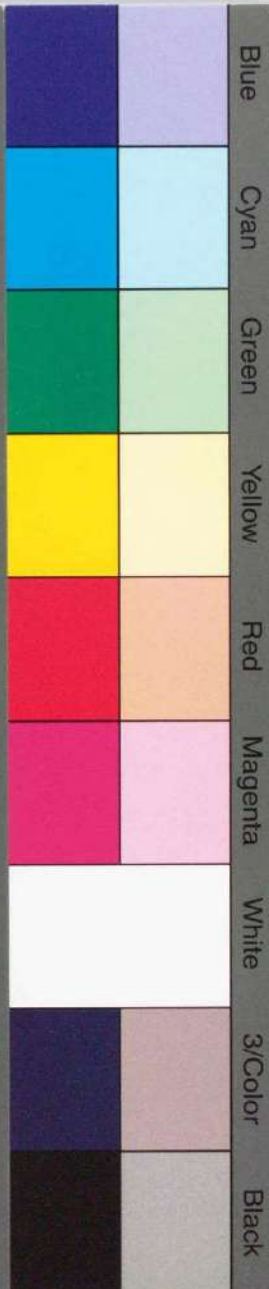


国立国会
8. 3. 2
図書館

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM, Kodak



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



でま空は價聲

鷺印レコード

たこくあがつた
ニッポノホンあがつた
みるまにあがつた
そらまであがつた

會商器音蓄本日 會社式



料飲強滋 いかいたあ

スピルカ

カルピスの成分

- 一、骨を丈夫にするカルシウム
- 二、腸をよめる薬
- 三、力を増すいろくろのじやうぶん
- 四、つかれた回復するいろくろのあまみ
- 五、心をさわやかにする味のオーケストラ



店番・店品料食・店酒・所費帳
製會式株一トツ 京東・元成製

目次

魔に呪れた姫 (表紙・原色版)	岡本 歸一
大當り (口繪・三色版)	野口 雨情
狐の裁判 (長篇童話)	小島政二郎
水滸傳 (史傳)	三宮島 資夫
泣虫毛虫 (童話)	三若山 牧水
西班牙の山賊 (長篇童話)	四西條 八十
曇り日 (童話)	三伊藤 夢子
香爐の行方 (長篇童話)	三森川 一朗
グリム兄弟の話 (傳記)	四中島 孤島
小鬼と靴屋 (兒童劇)	五楠山 正雄



若い巨人男 (童話)	西馬場 孤蝶
金持ちと貧乏人 (童話)	三西川 勉
命の水 (童話)	五齋藤 佐次郎
何でも知つてゐる學者 (童話)	六水谷 まさる
幸福なハンス (童話)	七鈴木 善太郎
お利口なカテリーヌ (童話劇)	八岡本 歸一
大儲け (童話)	三三 中島 孤島
三本の黄金の髪の毛を	
持った巨人 (童話)	三三 霜田 史光
白蛇 (童話)	三三 三宅 房子
猫 (童話)	三三 秋庭 俊彦
長篇物語	沖野 岩三郎
挿畫	岡本 歸一 水島 爾保



(附録)

鈍栗山 (第四回)

定九郎先生

岡本 歸一
水島 爾保



大當り百拾編 岡本歸一畫

百姓はひとりごとをいつてゐました。

『あの王様は自分で金をくれないで、おれにほ
しだけ持つて行けなんていつて、どんなわる
さをするのか知れたもんぢやアない。』

窓の外で、それを聞いたユダヤ人は、『しめ
た！』と手を打ちました。

（大もっけの一〇九頁を御覽下さい。）



童謡作法問答

頁百三約製上
圓壹金價實
錢十金料送

野口雨情先生著

新しい童謡の研究書・新しい童謡の作り方

内容

- 童謡の作り方と質問
- 童謡とはいつたい何にか
- 童謡は誰れでも作れるか
- 童謡と唱歌との相違
- 童謡と詩との相違
- 童謡と民謡との相違
- 童謡と小曲との相違
- 童謡と民衆詩の相違
- 童謡と聯想の童謡
- 童謡は長短何れが宜しいか
- 童謡は読べきか歌ふべきものか
- 童謡にはどんな言葉を使ふか
- 童謡を作る時の心得
- 童謡は調子(韻律)が第一
- 佳い童謡を作る方法
- 後世まで残る童謡
- 童謡と作曲及作曲家
- 童謡を書いてゐる人々

版行の
を益好
重々評
ね多愈
て讀加
賣者ふ

水谷まさ 著 少女詩の作り方

西條八十 著 新らしい詩の味ひ方

如何是非を
事御度一非
有に御度一
益有に御度
で讀御度一
あで讀御度
かるあで讀
さなみ讀御
すましめ薦
すましめ薦

中形版上製
定價八十錢
送料金十錢
四六版上製
送料金十錢
一三十一冊
美送料金十錢

東京市神田區仲猿樂町
振替口座東京四二〇七九

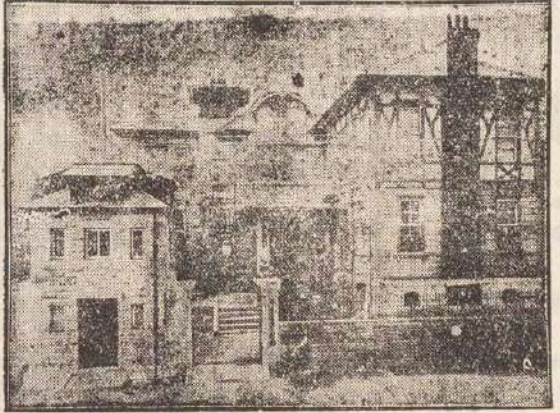
交 蘭 社

天下の青年は
何故に争ふて
大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が廉いから
- 指導が良いから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が儘だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤 謙吉
 新學博士 山内 繁雄
 顧問 井上 博士 三宅 博士
 神田 博士 野田 博士
 神田 博士 野田 博士



◎ 創立以二十一年 記念大特典提供
 目下新學期開講 入會の絶好機

講義録見本つき
 規則書無料進呈

一人前の男となるには
 どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同様の學問をする方法がチャンと出来てゐる。それは創立以來二十年の古い経験のある講義録で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。
 東京駿河臺(お茶の水電通)
 大日本國民中學會
 振替東京四二〇〇 電話 神田三〇〇〇二
 神田三〇〇〇三
 神田三〇〇〇四

良書を選び
 良書を読み
 良書は心と
 命の水である

- 第一編 眼 鏡 五版 島崎藤村先生著
- 第二編 小さな鳩 五版 田山花袋先生著
- 第三編 めぐりあひ 三版 徳田秋聲先生著
- 第四編 八つの夜 再版 與謝野晶子先生著

定 價 各 冊 壹 圓
 郵 稅 各 六 錢 四 六

愛子 叢書
 最新 第五編

人形の望

野上彌生子先生著

四六判紙裝
 函入裝釘優雅

皆さんは人形をお持ちでせう。たとひお持ちにならなくとも人形を知らない人はいないでせう。人形には色々と變つたものがありますが。どの人形も胸の中には一つの望を抱いてをります。望ではありません。もし望と思し召すなら此の本をお読み下さい。

定 價 壹 圓
 郵 稅 六 錢

東京 橋本 實業之日本社
 東京 橋本 實業之日本社

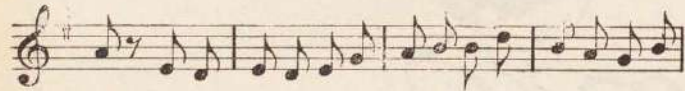


お乳飴

本居長世作曲



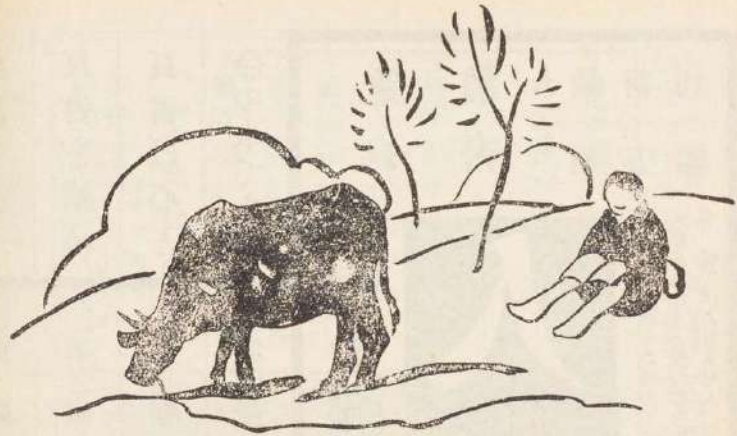
1 3 | 2 0 | 1 3 | 2 2 3 5 | 3 2 1 3 |
 お ち ち お ち ち なく この お っ か
 う ん の お ち ち あ め お っ か さ ん か な め



2 0 6 | 5 | 6 5 6 | 1 | 2 3 3 5 | 3 2 1 3 |
 さ ん う ん の い は や の お ち ち あ め な め
 た ち ち な し お っ か さ ん の お ち ち が 一 で



2 5 6 | 5 | 6 1 | 2 2 3 | 1 0 ||
 た と っ ろ っ っ さ ら さ ら
 た と っ ろ っ っ さ ら さ ら



音福の年少青闘奮

◇新學年開始 見本申込次第呈◇

自宅ジヤクで學校ガクへ通ふツトと同様に勉強ベンギョウできる

早稻田中學講義

早稻田商業講義

兩講義とも、早稻田大學入學、學資金

給與、メダル贈與などの大特典がある

◇校外生大會四月下旬盛大展後邸に開催新入諸君を歓迎す◇

東京 早稻田大學出版部



お乳飴

(名所めぐり童謡の四)

野口雨情

お乳 お乳と

泣く子のお母さん

鵜戸の窟の

お乳飴なめた

トドロ ドンドン

サーラ サラ



鵜戸のお乳飴

お母さんがなめた

乳なしお母さんの

乳が出た

トドロ ドンドン

サーラ サラ



日向國鵜戸の窟は、日本神話の名蹟であります。窟の天井裏に乙姫様の乳と傳ふる乳房型の岩が幾つも垂れ下つて来ります。それにもとづいて「お乳飴」と名づけた笹の葉につまんだ飴を賣つて来ります。この飴ななむれば乳のでない女も乳がでると云ひ傳へて来ります。

狐の裁判 (つゞき)

小島政二郎



「だまれ。ライネツケ。なぜ朕が来いと申したのに今まで出て来らなかつたか。そればかりか、朕のつかひを、よくもよく二人までひどい目にあはしをつたな」

ライネツケが穴熊のグリーンバートにつれられてやつて来て、大王の前に身をふせてお世辭たらくの挨拶をするのを聞くと、ノベル大王は、たてがみを怒らし牙をならして叱りつけました。すると、ライネツケは

「大王さまのお言葉ではございますが、熊や猫が怪我をしたり、ひどい目にあつたりしたのは、私のせいでございませぬ。みんな二人がくひしん坊で、人のものを盗まうとする悪い心を持つてゐたからでございます」と、シャア／＼として答へました。それを聞くと、ほかの大勢の獸がだまつてはるませんでした。

「申しあげます」
「大王さまに申しあげます」と、口々に云ひながら、狐のまはりをとるかこんで、めいめいライネツケの悪事を、いち／＼證據をあげて訴へました。これには流石のライネツケも、云ひぬけることが出来ませんでした。たうとう罪がきまつて、



「ライネツケ。右のものは、これまでに数かぎりない悪事を行ひ、大王の命令にしたがはなかつた罪によつて、死刑にすることにきまつた」と、裁判官の象が大きな聲で讀みあげました。それを聞くと、皆のものは大喜びで、

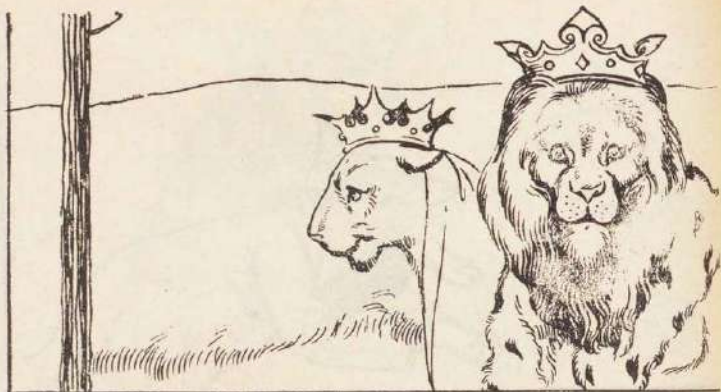
「わアあ……」と叫びながら、大勢でライネツケを縛りあげて「わッしよい、わッしよい」と、どん／＼死刑を行ふ場所へひツかついで行きました。

ライネツケはなんとかして云ひのがれようと思つて、こすい智慧のありつたけをしほつて、いろ／＼考へましたが、あいにく、ふだんは雲のわくやうに出て来る悪賢い智慧が、この時にかぎつて一向うかんで来ませんでした。さあ、見てゐて、甥のグリーンバートの心配と云つたらありませんでした。ライネツケも流石に今殺されるときまると、顔の色が眞蒼にかはりました。しかし、なあに、いよ／＼といふ時になつたら、またいゝ智慧も浮かぶかも知れないと思ひなほして引かれて行きました。

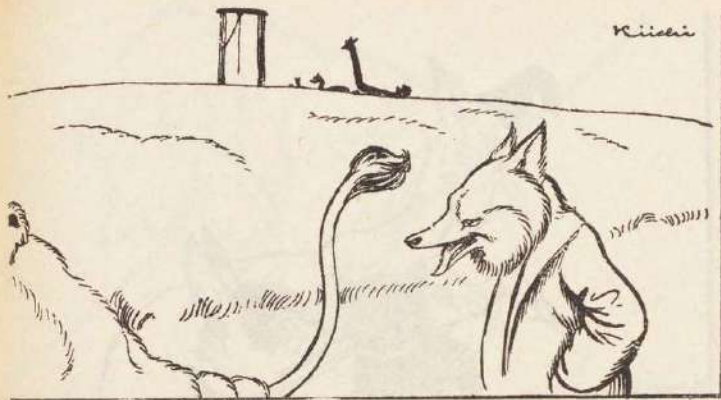
いよ／＼高い丸太の上へひツぱりあけられて、上からさがつてゐる縄で首を締められて、あとはもう足の下の梯子さへ引かれれば、それなり體ごとブラリとさがつて、命がなくなつてしまふといふ段になつて、ライネツケは、ふいに

「大王さま、今はの際にたつた一つのお願ひがございます。どうか私にこれまでの懺悔をさせて下さい」と、哀れな聲を出して願ひました。

懺悔と聞いて、ノベル大王は、ライネツケの奴どんなことを云ふだらうと思つて



「なんだ、その金貨と云ふのは……」
 ライネツケは早くも、金貨と聞いて、大王の心が動いたのを見てとりました。
 「いえ、金貨や銅貨を入れた袋がいくつもあるのです。とても、一臺の車では運び切れないくらゐ隠して持つてゐるのです。」
 「そんなに金貨を、一たいお前はどこから探し出して來たのだ。さうして今、どこに隠してあるのか」
 「それをお話するには、もつと昔のことからお話しをしなければお分りになりますまい。大王さま、王妃さま、私は今死んで行くものです。死に際に、今まで隠してゐた大事件を申しあげませう。私は今大王さまのお憎しみを受けてをります。しかし、この大事件を申しあげれば、私が忠義なものだといふことが分つていたゞけるだらうと思ひます。もし私が大王さまに忠義な心を持つてゐなかつたら、大王さま、王妃さま、あなた方お二方とも、命をお落しになつてゐたかも知れないのです。——實は……」
 思はせぶりに、ライネツケはこゝで言葉を切りました。
 死んでゐたかも知れないと聞いて、まづ驚いたのは、王妃でした。思はず身ぶるひをして
 「ねえ、あなた、とにかく恐ろしい話です。ライネツケを首斬臺からおろして、私達二人だけで詳しく聞かうではございませんか」と、女だけに必配さうにノベル大王に相談をかけました。



「よし、聞いてやらう。しかし、長くはならんぞ。ミニオン、少し繩をゆるめてやれ。」と云ひました。
 丸太のテツペンにのほつて、繩をひく役目を受け持つてゐたミニオンは、命令の通りに、繩を少しゆるめてやりました。
 すると、ライネツケは喉をさすりながら、自分の赤ん坊の時のことから喋りはじめました。實は、ライネツケは懺悔をする氣などは少しもないのでした。たゞ何か喋つてゐる間には、ノベル大王をこまかして命拾ひをするやうないゝ智慧か浮かんで來るだらうぐらゐに考へて、わざとゆつくり／＼喋り出したのでした。
 「そんな譯で、私は何も根からの悪人ではございません。たゞ少し大きくなつてから狼のイセグリムと知り合ひになつたのが、私が悪いことを覺えるやうになつた始末です。イセグリムは悪智慧のすぐれた奴で、何かと云つては私を悪い道へさそひ込みにさせて、とつて來たものはみんな自分とつて食べてしまふのでした。もし私が澤山の金貨をかくして持つてゐなかつたら、私は幾度飢えて死んだかも知れません。私がかうして生きてゐられたのも、みんな金貨のおかげです。少しづつ持ち出してパンを買つてたべてゐたのです。あゝ私はどんなにその金貨にお禮を云はなければならぬでせう。」
 澤山の金貨と聞いた時、ノベル大王の耳がピクツと動きました。

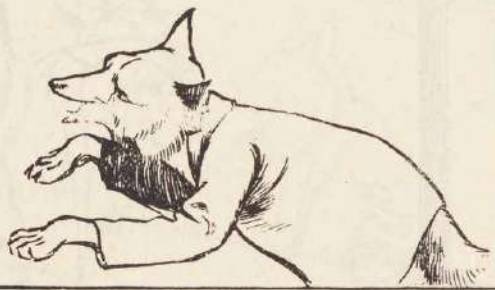


はへながら、土に自分の足跡を残さないやうに、尻尾で消し消しやつて来る父を見た時、私は賢いのに感心しました。

「父は奥の一間にひきこもつたまゝ、しばらくは嬉しうにチャヤ／＼金貨の音をさせながら勘定をしていましたが、やがて自分の部屋へはひつて眠つてしまいました。それを見た私は、さあ、大王さまに御恩報じをするのは今だと思ひましたが、しかし一人でどうにもならないので、母を起して自分の考へをよく話して味方にし、上ですり眠つてゐるのを幸ひ、母と一しよに、幾度もく／＼行つたり来たりして、やうやうこの光がさしはじめの頃までに、どうやらかうやらみんな運び出して、だれにも見つかからない場所へ隠しおほすことが出来ました。

「驚いたのは父でした。あくる朝目をさまして見ると、大事なく軍用金がないのでこれでは駄目だと云ふので、たうとう私の思ひどほり、謀叛がおこらずに済みました。これで私は蔭ながら、大王さまに忠義をつくすことが出来たと喜びましたが、しかし喜んだのもホンのわつかの間で、——父は軍用金をぬすまれて謀叛をメチャ／＼にしたのを仲間のものに申譯ないと思つたのでせう。その日のうちに、首をくくつて死んでしまいました。私は忠義をたてるために、大事な父を殺してしまいました。あゝ、私はなんとといふ親不幸ものでせう。アアン、アアン、アアン、アアン……」

なんといふらしい奴でせう。死んだ父をわるいものにし、まだ生きてゐる母をいい



そいで、ライネツクは首斬臺からおりることを許されて、大王と王妃とのあとについて、御殿の奥の一間へはひつて行きました。さうして聞かれるまゝに

「いえ、實は謀叛を企てたものがをりますのです」

「なに、謀叛を企てたものがをると……。そりやア一たい誰だ」

「私の口からは實に／＼申しあげにくいのですが、發頭人は、私の父と、狼のイセグリム、それに熊のブラウンでございます。その外にもまだありますが、まづ頭だつものはこの三人でございます」

「もつと詳しく聞かせてくれ」

かう云はれて、ライネツクは、それからそれへと嘘を上手にこしらへて行きました。

「今申しあげた三人が、大王さま、王妃さま、あなた方お二方を殺して、王の位を横取りしようと企てたのです。さうして王には私の父がなる約束でした。三人は森ちゆうから味方を集めて、大王さまの軍勢よりも強い軍勢をこしらへようとしました。それには軍隊を養ふ食へものを買ふお金がある、そのお金をこしらへるのが父の役でした。この謀叛の企てのあるのを知つた私は、大王さまに、ふだん受けてゐる大恩をかへすのはこの時だと思ひました。どうかして、この謀叛を中途で駄目にしなければならぬと決心しました。それには一ばん大事なお金をみんな盗んでしまふに限ると考へました。それからといふもの、私は毎晩々々寝ずに番をしてゐました。すると、或晩、父がこつそり金貨の袋をいくつもく／＼盗み出して来るのを見つけました。重い袋をく



ものにして、こんなデタラメを口から出まかせに云つて、ソラ涙をボロ／＼こぼして見せました。

ところが、ノベル大王の王妃は、この話にすつかり感じ入つてしまつて

「まあ、なんといふ感心な、さうして氣の毒なライネツケでせう。ねえ、あなた、この忠義にめんじて、今度だけは罪を許してやつてはいかゞでせう」と、大王に云ひました。

「うん、許してやつてもいい。しかし、ライネツケ、そのかほりには、金貨をみんな朕によさねばならぬぞ。」

この言葉を聞くと、ライネツケは

「あの、わたくしめをお許し下さると仰やるのでございますか。うれしや、夢ではないか。あ、慈悲深い大王さま。おなまけ深い王妃さま。この御恩は一生忘れはいたしません。ハイ／＼、金貨のありかはこの場ですつかり申しあげます。」

かう云つて、かくしてある場所を、こまかく地圖までかいて大王に知らせました。しかし、もちろん嘘ですから、皆さん、だまされぬやうになさい。

ライネツケの方はこれですみました。が、すまないのは、家木の中に謀叛人がゐると聞いたノベル大王の胸の中でした。あら／＼しい壁で

「狼のイセグリムと、熊のブラウン、それに猫のミニヨン、この三人を早速牢へぶち込め」といふ命令をお出しになりました。これを聞いたライネツケは、心の中でさ

ぞ赤い舌を出してゐたことせう。

間もなく家來が、

「申しあげます、御命令のとほり、三人のものを牢へ入れました。」と云ひに來ました。すると、ライネツケは

「さて、大王さま。私はこれから死んだ父の罪亡しのつもりで、巡禮をしてまはつて來ようと存じます。つきましては、熊のブラウンの皮で合財袋をこしらへ、狼のイセグリムの皮で靴をこしらへたいと思ひます。どうか二人の生き皮を剥ぐことをお許し下さい。」と、亂暴なことを云つて願ひました。

「よし、謀叛人の罰には丁度いゝかも知れない」

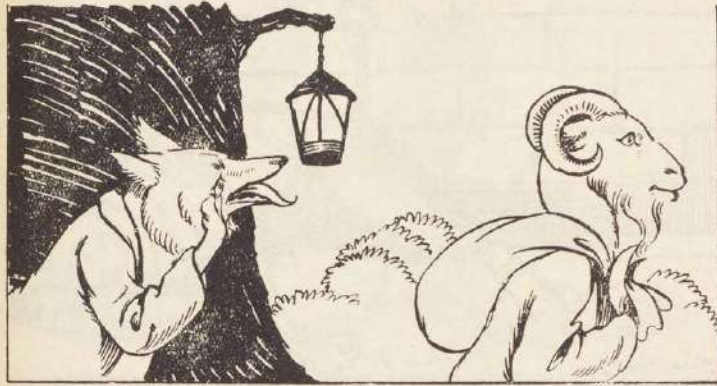
ノベル大王は、無慈悲にもその願ひをお許しになりました。

そこで、ライネツケは牢へはひつて行つて、鎖で嚴重にしばられてゐるイセグリムとブラウンとから、生き皮を剥いで御殿をさがりました。

ノベル大王は、一たん家へかへつてそれから永い巡禮の旅に出るといふライネツケを、王妃をつれ、大勢の家來をうしろに従へて、ぞろ／＼途中まで見送つて行きました。しばらく行つてから、御自分たちはそこから引きかへすことにして、例の鬼のランプと、羊のベリンとに云ひつけて、ライネツケの家まで見送らせました。

メバタキスの家では、ライネツケのお母さんやおかみさん、二人の子供たちまでがみんな心配して待つてゐるところへ無事で歸つて來たので、家内ぢぢうの喜びと云、





「たありませんでした。ライネツケは、羊のペリンをそこに待たしておいて、ランプだけつけて中へはひつて行きました。さうしてみんなを前にして、今日御殿でおこつたことを詳しく話して聞かせた事句、

「それもこれも、みんなこのランプの奴が餘計なことを馬鹿の大王に云ひつけたからだ。かたき打ちに、殺してたべてしまはうぢやないか」と、例のまことしやかな嘘を云つたからたまりません。

「お父さんを苦しめて、にくい奴だ。ガリく」と、家内ちゆう總がかりで、たうとうよい鬼一匹を噛み殺して、

「うまいく」と云ひながら、晩御飯の御馳走に、みんなその肉をたべてしまひました。

それからライネツケは大急ぎで、ブラウン(熊)の皮で合財袋をこしらへあけ、その中へ食べ残したランプの生首を入れて、

「やあ、ペリンさん、お待ちどほ。さあ、これを大王さまへ持つて行つて下さい。大事なものですよ。わたす時、ペリンも手傳つたと申しあげると、どつさり御褒美がいたゞけますよ。」と云つてわたしました。

御褒美がいたゞけると聞いて喜んで、ペリンは袋を肩に、とほく／＼と山をおりて行きました。(つゞく)

水滸傳 (第四回) 宮島資夫

公孫勝の術 (つゞき)

翌朝になつて早く眼を醒すと、公孫勝は、

「昨日は何にもお構ひすることが出来なかつたから。」と云つて、色々な御馳走を出して二人を饗應しました。さうして戴宗とまた相談を初めましたが、遂に

「今日もう一度真人にお願ひして、ど

うあつてもお辭しを受けることにしよう。」と云ふことに決して、三人はまた山へ登つて行く事になりました。

李逵は、その真人はもう昨夜自分が殺してしまつてゐるのだと思ふと、可笑くつて堪りませんでした。何喰はない顔をして二人のあとをついて行きました。やがて松鶴軒に着くと昨日の童子が二人出て來たので、孫勝が

「老師はどこにおいでになる。」と訊きますと、

「只今雲床の上で清氣を養つていらつしやいます。」と答へたので、李逵はそれを聞くと思はず舌を出してぶる／＼つと震へました。

三人はそれから雲床の前に行つてひれ伏しました。すると真人が、

「お前達三人はまた何しに來たのだ。」と尋ねました。そこで戴宗はこゝぞと云ふように熱心の色を顔に現して、

「どうか真人、あなたのお慈悲をもつ

て、孫勝を梁山泊に歸し、大寨の御膳を助けて下さい。」と頼みました。真人はこゝろ／＼笑いながら、

「はゝあさうか、然し私は先に訊くがそこに立つてゐる大男は何といふ者だ。」と尋ねました。

「これは私の義弟で姓は李、名は逵と云ふものです。」と戴宗が答へますと、

「さうか、私は今度といふ今度は、決して公孫勝を歸すまいと思つたが、李逵の熱心に感じて歸してやることにしよう。」と真人がいひましたので、孫勝と戴宗は不思議に感じ、李逵は何となく、くすぐつたいやうな気がしながら

然し真人は俺を恐がつてゐるのかも知れないなぞとも考へてゐました。

「ところで、さう決つたら、これからすぐにお前達三人を私の術で高州へ歸してやらう」と真人がまたいひましたので、戴宗は心の中で真人の法といふのは、自分の神行の法などより、きつ

とどんなにか立ち勝つたものだらうと思つて、
 『どうかさう願へれば大變幸ひです。』と答へました。すると羅眞人は、三つの小さな布を取り出して、
 『さあ来てごらん、お前達に今私の法を行つて見せる。』といつて庭に出て



大きな石の上にそれを擴げ、まつ公孫勝を坐らせて、口の中で呪文を唱へるとその布は見る／＼中に一片の紅い雲に變つて、公孫勝をのせたまゝふわふわと空中に浮んで行きました。次に戦宗を青い布の上に坐らせて、また呪文を唱へると、こんどは青雲となつて戦宗をのせて空中に飛び去りました。次には李逵ですが、これは白い布なので白雲となつて空中に漂つて行きましたが、三人はたゞ／＼夢を見てゐるやうな不思議な氣持で空の中に浮んでゐたのです。すると今度は眞人が、右の



手をさし伸べて、その雲を手招きしますと、青と紅の二つの雲は悠々と戻つて来て、もとの庭前に靜かに降りました。戦宗はもうすつかり感心して、厚く眞人にお禮をのべてゐますと、空の中から大きな聲で、
 『眞人、眞人、私はかりどうしていつまでもここに置くのです。私もどうか早くおろして下さい。』と囁めるものがありました。それは李逵が雲の上で、まご／＼して困つて叫び初めた聲でした。この聲を聞くと眞人は空を仰いで、
 『私は元來出家の身であるから、曾てお前に悪い事をしたことはない。それなのに、お前はどうして昨夜忍び込んで来て、私はかりでなく、童子までも殺さうとした。私かもしはほど道を修めてゐなかつたら、今頃はもう死んでゐたのだ。』と叫びました。すると李逵は、
 『眞人、それはきつと人遣ひです。私は決してそんな事をした覚えはありません。』

せん。』と困つたやうな聲を出して云ひました。眞人は笑ひながら、
 『馬鹿をいひなさい。しかしお前は二人の人を殺したと思つてゐるの知らないが、あれは實は二つの瓢箪を私達の身代りにさせたのだ。どうもお前の心掛がよくないから、今お前に罰をさせてやる。』と云つて、また呪文を唱へますと、さうと一陣の風が吹いて来て、李逵の乗つた雲を捲き上げて行くと、同時に、空中に仁玉様のやうな二人の力士が現はれて来て、李逵の左右に從つて飛で行きました。李逵はたゞ耳の所に／＼風の高る音が聞えるばかりで恐ろしくつて堪らないものですから、すつと眼をつぶつてゐると、やがて蘇州といふ所の城の上に来て、そこ



の知府の家の家根の上に、李逵をどかんと落しました。
 空の晴れた晝の目中に、俄かに天から人が降つて来たものですから、家の
 中に居た知府もはかの入道も驚いて飛び出すと、物凄顔をした男が庭前に落ちてゐるので、下役人がすぐに弱り込んでゐる李逵をつかまへて、知府の前に引きすり出して來ました。その知府は馬大弘といふ人でしたが、李逵に向つて、
 『お前は一體どういふ妖術使ひなので、この晝中に、空から落つて來たのだ。』と尋ねました。けれども李逵は、家根の上へ落ちた時に互で顔を傷けたので、顔中血だらけになつてしまひ、頭もぼうつとしてしまつたものですから、たゞ呆然としてきよろ／＼四邊を見廻してゐるばかりで聲を出すことも出来ませんでした。
 『いや、こ奴はきつと妖術使ひに違ひない。妖術を破るには泥水を顔にかけると術がきかなくなる』

いふ事を聞いてゐるから、急いで泥水を持つて来い。」と知府がまた家來に云ひつけたので、家來はすぐと汚い水を持つて来て李逵の顔にぶつかけてました臭い水が眼や鼻にしみて、苦しくつて堪らなくなつたものですから、遂に李逵は、

李逵を引き倒して散々に打ちました。するとすぐに身體の皮が破れ、血はどんどんと流れ出るので、流石の李逵も苦しくつて堪らなくなつたものですから、たうとう仕方なしに、

一六
に眞人の弟子なのだが、たゞ一寸した間違ひをした爲に、老師がわざとこんな目に合せなすつたのだ。けれどももう二三日もたつたら、きつと私を取返して下さるから、お前達は今のうちに私の所に御馳走や酒を持つて来なさい。さうすればお前達の罪もゆるしてやるもしこの十馬鹿な眞似をしたら、それを命がなくなるから。」と眞面目くさつて脅したので、牢番共は色々な御馳走やお酒を持つて来て、李逵を大切に取扱つてゐました。

「あゝして羅眞人の弟子だといひますが、もし本當なら餘り酷いことをなさらない方が好いと思ひますが。」といひますと、知府は笑つて

「あなたは本當に眞人の弟子ですか。」と聞き返しました。すると李逵はいよいよ顔を改めて、

「まあさう心配する事はない。」と笑つて、

「私は妖術使ひではない。本當は羅眞人の弟子だから、決してそんな眞似をしてくれるな。」と叫び出しました。そこで家來が知府に向つて、

「あなたを熱誠の色を現はして云ひました。羅眞人はそれを聞くと笑ひ乍ら、

「もう許してやつて下さいませんか。」とまた眞人に頼みますと、

「いや心配することはないよ。載宗。私も李逵の性質はよく知つてゐるから、決して殺してしまふやうなことはしない。けれどもあの短氣がいけないから、少しばかり難儀な目に合せて悪い所をなほしてやらうとしただけだ。お前がそんなに心配するのなら、これからすぐにこゝへ呼び戻して上げよう。」と云つて「力士、力士」と叫びますと、松鶴軒の前に一陣の風が吹いて来て、忽然として一人の仁王様のやうな力士が現はれ出しました。そして眞人の前に手をついて、

「お前は性質は悪い人ではないが、どうも短氣ですぐに人を殺したがるのがいけないのだ。これからはそれを改めて、なほ熱心に宋江明を助けて上げな

「いゝえ、あなたはまだ御存知ないか知らないが、あの男は第一にその性質が實直で、人の物を取ることもなんかありません。第二には人に詭ふことがなく、死んでも自分の考へを曲げません。第三には、怒張つたり悪い事をして金を惜む事がなく、義に背くこともありません。さうして何事か始まつた時には、第一に命も惜まず勇み進んで

「お呼びになつたのは何か御用で。」と

「お前を呼んだのは外ではないが、先日お前にひひつけて蘇州に捨てさせたあの李逵も、漸々罪業が満ちたからもう一度行つて、牢の中から助け出して連れて来てくれ。」と云ひました。

「さい」と戒めました。李逵も、またお辭儀をして、

「これからはあなたの云はれた通りにします」と誓ひました。すると今度は戴宗が李逵に向つて、

「お前はこの四五日といふものは、一體どこへ行つてゐたのだ。」と尋ねました。李逵は「いやあの日、あなたも知つてゐる通り、あの白い雲に乗せられて、ふわ／＼と浮んでゐる中に二人の力士神が現はれて来てね。」とそれから蘇州の城の屋根に落された事や、怪我だらけの顔に泥水をかけられて苦しんだ上に、鞭でいくつも擲られた事などを話しました。それから、

「けれども牢へ入つてからは、私は本當は羅真人の弟子で直日神將といふものだ、もし粗略な真似をすると、牢を出てから罰を當てるから、と牢番を脅したものですから、毎日大變御馳走をしてくれました。」と正直に話したも

で三人は大いに喜んで、羅真人に厚く禮を云つて山を下つて行きました。さて三人は日ならず、高唐州の宋江の陣に歸つて行きますと、皆なは大變に喜んで出迎へました。中でも宋江と吳用は戴宗に向つて、

「君の歸りが大變遅いものだから、どうしたのかと思つて心配してゐた。」と云ひ、孫勝には「よく私達の爲に來て下さつた。」と禮をいひました。戴宗も二仙山に行つてからの事を色々話をして、その晩はみんなが三人の勞をいたはる爲に陣中で酒宴をして旅の疲れを慰めました。公孫勝は高廉の陣の工合などを色々吳用に尋ねますと、吳用は、

「この頃は毎日向ふから戦をしかけて來ますが、あなたが來られるまでと思つて、ちつと兵を收めて待つてゐました。」と話しました。「それでは明日はこちらから軍をしむけて、一時に高廉を

のですから、眞人も公孫勝も戴宗も思はず笑ひ出してしまひました。

「さうしたら、先刻また一人の力士神が來て、黙つて牢を明けて眼をつぶつてゐるといふと、すぐにこゝへ連れて來てくれたのです。」と話してしまふとこんどは公孫勝が、

「この老師はいつでも千人位の力士神を使つてゐるさるのだから、決して無暗な真似をしてはいけない。」と云ひますと、李逵は頭を掻きながら、

「その力士神が皆な梁山泊へ來てくれると好いのに。」といつたものですから皆はまた笑ひ出してしまひました。その時に戴宗が眞人に向つて、

「私達が陣中を出てからも可なりの日がたちます。あとがどうなつてゐるかと思ふと心配ですから、あなたのお許しが出たのならこれから歸りたいと思ひます。なほ公孫勝は、軍の濟み次第、こちらにお歸しますから。」と云

つてしまひませう。」といつて、公孫勝はその夜の中に、兵士達に、明日の軍の支度をしておくやうにと云ひつけました。

その翌日は、朝早くから軍馬を整へて高唐州の城下に向つて攻めよせました。高廉は敵軍が寄せて來たと聞くと、すぐと甲冑を着て、三百の神兵を左右に從へ、城門を開いて打つて出て來ました。

すると梁山泊の方からは、左の方に花榮、秦明、朱同、歐陽、呂方、の五人の大將が先に立ち、右の方には林冲、孫立、鄧飛、馬麟、郭盛の五人の大將が先に立ち、中軍には宋江、吳用、孫勝が馬に跨つて押し寄せ初めました。高廉はこの有様を見て、

「梁山泊の山賊ども、今日こそたゞ一戦の中に勝負を決する覺悟をもつて向つて來い。必ず逃げ出すやうな卑怯な真似をするな。」

ひますと、眞人は、

「私は元來公孫勝を許すまいと思つたが、お前達の大義に對して許して上げる事にする。それだからこれからは益を固くして、自分達の志を遂げるやうに勵まなければいけない。」と云つて、今度は公孫勝に向ひ、

「お前が今迄に學んだ法術と云ふのはまだ、丁度高廉と同じ位の程度ものだ。私が今お前に五雷天盟の正法を授けてやるから、それを以て、高廉を破つて宋江を助けて上げなさい。さうして常に天に代つて道を行ふといふことを忘れずに、何事も民を安んずる事を第一に考へて、愆や名の爲に心をくまされたり、大官にへつらふやうな心を決して出してはいけない。お前のお母さんは、お前が留守の間は私が大切に介抱して上げてゐるから、決して心配しないで行つて來なさい。」と云つて五雷天盟といふ法を授けました。そ

と大きな聲で叫びました。これを聞くと宋江は怒つて、

「誰かあの高廉を生捕にする者はないか。」と云ひましたので、花榮といふ大將はすぐに槍をひねつて馬を躍らせて進み出でました。

すると高廉の陣中からも薛元輝といふ大將が、馬上に兩刀をふるつて花榮に向つて來ました。二人は兩方の陣の間で勇を振つて戦つてゐましたが、かれこれ二十分も戦つたと思ふ時、花榮は馬をめぐらして味方の陣の方に逃げ初めました。

これを見ると薛元輝は計とも知らず馬を飛ばせ刀を舞しながら追ひかけて來ましたが、もと／＼花榮は梁山泊の中でも一番勝れた弓の名人だつたので、ひそかに弓に矢をつがへて振り向きざまにひようと射ますと、その矢は勢こめて走つて來る薛元輝の咽喉元に、ぐさつと深く立ちましたか



から、薛元暉は血を吐いて馬からどうと落ちました。これを見ると、高麗は怒つて口の中に呪文を唱へ、銅の牌を叩きますと、神兵の固まつてゐた陣中から、怪しい風が起つて来て、石を飛ばし、砂をあけて、梁山治の陣に吹きつけると共に、猛だの狼だの虎や豹といふやうな獸が、空中に現はれて、宋江の陣に向つて飛んで来ました。公孫勝はさつきから馬の上でこの様子を見てゐましたが、早くも寶劍を抜いてこちらでも呪文を唱へ初めると、すぐに、一筋の金の光がびかつとして、敵陣の中に射し込みました。するとかの獸獸の姿をした物は

通力を失つて、皆なひらりと地の上に落ちて来たので、兵士達はこれを取り上げて見ると、皆な紙で造つた虎や豹の形をしたものだつたのです。この有様に勢を得て、宋江の陣からどつと攻めよせて行きますと、高麗はかねて頼みにしてゐた自分の術を破られたので、這々の體で城中に逃げ込んでしまひましたから、城兵の討たれたことは、どの位だつたか判りませんでした。

その晩宋江明の陣中では、諸頭領を聚めて、今の大将達の功を論じました。公孫勝が第一といふことになりました。

その翌日は、宋江の方から敵の城の四方を攻め立てましたが、今度は敵の方で兵を收めて戦ひませんでした。けれども、その日は終日城を攻めて夕が

陣中に歸つて来ますと、吳用は宋江に向つて、

「今日かうして敵の城攻めをしたからには、こつちの兵が勞れてゐると思つて、今夜はきつと向ふから夜討をしかけて来るに違ひありません。それだから陣中を片付けて四方に兵を伏せておき、敵兵が切り込んで来たたら霹靂の響くと同時に陣中に火の起るやうにしておいて、それと共に伏兵が起つて敵を打取ることにならうぞうぞうぞう。」と云ひしたので、宋江もそれは大變好いことだと云つてすぐに賛成しました。

その日は夕方から兵士に澤山御馳走を食へさせて身體を休めさせ、夜になると方々に手配をして敵の来るのを待つてゐました。

すると高麗の方では吳用の考へた通り、敵の疲れてゐる中に夜討をしらうといつて、三百の神兵には、硫黄や煙硝

を入れた物を持たせ、夜中になつて靜かに打つて出て来ました。さうして宋江の陣に近づくと、高麗が妖術を使つたものですから、黒氣天にのほり、石を飛ばせ土を捲き上げて、怪しい風が宋江の陣に向つて吹きつけ初めました。これと同時に、三百の神兵はその硫黄や煙硝に火をつけて、宋江の陣を目がけて投げつけました。

これを見ると、公孫勝は高い所に登つて、寶劍を額に押しあて、呪文を唱へますと、空にたつてゐた陣の中で、ぐわらぐわら大きな音がすると共に、どーつと霹靂の響が起りました。神兵達は驚いて急いで退かうとすると、空の陣の中から空を照すやうな猛火が起つて四邊は晝よりも明るくなり、四方に隠れてゐた伏兵は一度に起つて来て、神兵を押し包んで打ち取りましたからこの人達は一人も残らず殺されてしまひました。

高麗はこの有様に膽をつぶして、慌てて城中に引き返さうとしましたが、豹子頭林冲とか花榮とか云ふ豪傑に追ひまはされて、たうとう首を打ち落されてしまつたのです。

宋江明はそれからすぐに城中に押し入つて、柴進を助けようと思つて探しましたがが仲々解りませんでした。さうして漸く深い空井戸の中に落されてゐることが、解つたので李逵が入つて助け上げました。

その時は、柴進はもう虫の息になつてゐて、もう少し遅れれば死んでしまつてゐたかも知れないので、皆で助けることが出来たのを大變に喜びました。

さうして、これも偏へに公孫勝の法術のお蔭だと云つて、それから人々は、ます／＼公孫勝を尊ぶやうになりました。



蟲毛

水牧

泣蟲毛蟲雨の蟲
 お眼々の奥から這ひ出して
 あしたは天氣になアレ
 いますぐ天氣になアレ



蟲泣

山若

泣蟲毛蟲は眼々の奥
 お眼々の奥に住んでゐる
 泣蟲毛蟲は雨の蟲
 しくしく降り出す雨の蟲



西班牙の山賊 西條十八

五、山賊か詩人か

山賊の首領エル・クチロは僕が眼の前に居るのを忘れてでもるかのやうに、黙つてペンをとりあげ、その軸で額をコツコツ叩きながら、しきりに天井を見つめて何か思案に耽つてゐた。が、やがてだしぬけに僕の方を向いて、流暢な佛蘭西語でかう試いた。

「午券」を詩の文句に使ひたいのですが、なんかオツな云ひ廻しは無いでせうか？」

そこで僕は、西班牙語はあまり知らないから、さうした事には一向不案内であると答へた。するとかれは、

「わが國の言葉は、数は豊かだが、總體に出来が古いので融通がつかなくつて困ります。」

と、不平さうに云つたが、それからジツと僕の顔を見て、

「さうだ。君は軍人でしたな。軍人に詩の話をするなんて見當ちがひだつた。」

と、呟いた。

僕はこれ聞いて、よつほど「山賊なんかにはなほ不釣合

だ」と悪口を呟いてやりたかつたが、その時にはかれはまた夢中になつて紙の上にペンを働かしてゐた。

しばらくすると、かれはさも満足さうにうなづいて、ペンを下に擱いた。さうして僕を番してゐる三人の手下の前で、その出来上つた詩を読み上げた。すると三人はお世辭かほんたうか、いかにも感服したやうに拍手喝采した。ノッペリした首領の顔は、褒められると、ちやうど娘が人に挨拶された時のやうに、ほんのり赭くなつた。さうして、

「いや、とても、とても。」

と、さも嬉しさうに手を振つたが、更に僕の方を向いて、「この窟では毎晩かうしてお互に詩を作つては、出来栄を批評し合ひ、退屈を慰めてゐるのです。僕は元來詩に妙からぬ趣味を持つてゐるので、永年書きためた詩が遺からず出版されるはずになつてゐる。題は「マドリッド」と云ふのでな。

「いや、それはさうと、詩の話はその位にして置いて、用件にとりかゝることにませう。ところであなたのお名前は何？」

「エティエンヌ・デュラール」

「ご身分は」

「中尉」

「聯隊は」

「騎兵第二十三聯隊。」

「中尉にしちやちと若過ぎるやうですが。」

「何回も戦争で働きましたから。」

「フアン」

かれは一丈馬鹿にしたやうな笑ひかたをしたが、すぐにテイブルの上の例の褐色の厚い帳簿をくりひろげて、

「あなたの軍隊の將校がたまにここへ見えませんでしたよ。僕らがやつた大ていの手術はここに書きとめてあるのですが。

ええと、ここに六月廿四日といふのがある。あなたはスウビロンといふ若い士官をご存知ありませんか？ 脊の高い、艶艶した頭髮をした？」

「知つてゐます。」

「ちやうどその六月廿四日に、僕はその士官を葬つたと附いてゐますよ。」

「えッ！ あの男が！ かはいさうに！」

と、僕は叫んだ。

「で、何で死んだのですか？」

「埋めたのです。」

「いや、その埋める以前を伺ふのです。」

「あなた、感心がへをなすつちやいけません。その士官はもろろん埋める以前には生きてゐたのです。」

山賊の首領は冷かに答へた。

「やッー では貴様等はあの男を生理めにしたのだな！」

僕はこれ聞いて總身の血が煮へくりかへるやうな気がした。さうして憤怒のあまり思はず、エル・クチロに飛び掛らうとした。

まつたく

三人の手

下が僕の

縄尻をと

つてるな

かつたら

僕は後奴



の喉を、いたが絞めつけてやつたに違ひない。エル・クチロはどこを風が吹くかと云ふやうな顔をして、ニヤリニヤリ立ち騒ぐ僕の様子を見おろしてゐた。その面がまへがあまりに憎らしいので、僕は「この馬鹿野郎」とどなり續けながら、二度三度自分を引据ゑる手をふりもぎつて、前へ突進しようとした。併し手下の山賊どもはいつかかな手をゆるめなかつた。つひに僕の上衣は裂け、手くびからは血が滴つた。それで山賊どもはたまりかねて、僕の両手から足に括りつけてある縄を強く引いたので、僕は仰向きに引くり返つてしまつた。それでもなほ僕は叫びつづけた。

「この狡猾な獣め！ 悪魔！」

もしおれの手に刃があつたら、佛蘭西武士の魂を知らして呉れるのだぞ！ 覚えておれ、この残忍非道の山賊め！ 貴様らは穴の中の鼠のやうにいづまでもここに隠れ終せようと思つてゐるのか知らないが、今に見る、わが大帝の御威光によつて貴

様も、またつき添ふ毒蟲奴らも、間

もなく皆殺しにされてしまふのだ！

その時になつて吼面かくな！」

僕は前後十四回の戦場で習つたありとあらゆる悪口雑言を奴の顔に投げつけてやつた。それでもエル・クチロは顔色ひとつ變へない。恰かも

何か新しい詩の文句でも想ひついたやうに、ヂツと天井裏を見つめて、

相變らずベン軸で額をコッコッ叩いてゐる。

たまりかねて、僕はもう一倍悪口

の薬を強くして、かう叫んだ。

「ヤイ、このへボ詩人！ 貴様はこの洞穴に於て生命が長いと思つてゐるのか！ ところが貴様の命は、いま貴様が書いてゐるその下手くそな詩の行よりすつと短かいんだぞ！」



知らないか馬鹿ッー！」

ところが今まで何を云はうとも空吹く風と聞き流してゐた山賊の首領は、この悪口を聞くと、バネ仕掛のやうにスツクと椅子から立ち上つた人の命をとることにかけては八百屋が大根を取り扱ふよりも無神経なこの悪漢も、何處かまた感じる神經を持ち合せてゐたらしい。かれの顔は鉛のやうに蒼白くなつた。さうしてその氣どつた鬚髯は、はけしい怒のためにブルブル顫へてゐた。

「よろしい。よくも云はれた、ヂェラール中尉。」

と、エル・クチロは喉のつまつた聲で云つて、

「あなたは最前今日まで立派な經歷を踏まれたやうに話された。だから、

私はあなたに立派な死にかたをさせてあげませう。いかにもあなたに似合った死にかたをな。」

「ありがたう。だがたゞひとつ、僕の死んだことを、君のその下手くそな詩でうたふことだけは断るよ。」

と、僕は叫んだ。それから尙三言三言奴をひやかしかけたが、エル・クチロが腹立ち紛れに何か手真似をしたので、番卒共はその間もなく、荒々しく僕を戸外へ引すり出してしまつた。

六、釘づけにした足

以上はその當時の模様を、僕が今おぼえてゐるかぎり委しく述べたのだが、この二人の會見はかなり時間をとつたものと見え、戸外へ出て見るともうすっかり夜になつてゐて、空には月が皎々と輝えわたつてゐた。

窟の外では出賊どもが、樫の枯枝でさかんに焚火をしてゐた。もちろん、これは暖まるためではない。むしろ陽氣はもうだいぶ蒸暑い位で、これは奴らの晩飯を料理するためであつたのだ。大きな鍋の霧が火のうへに懸つてゐた。さうして

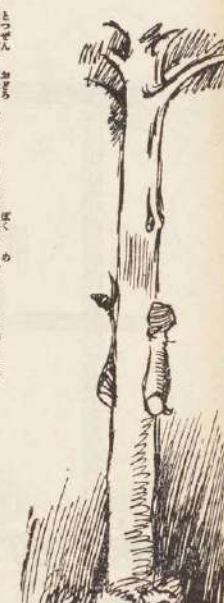
悪漢どもはその黄ろい火光のまはりをぐるりとまいて寝をべつてゐた。僕はこの場の光景が、いつぞや戦友のジュノーがマドリッドの町で盗んだ油繪の中の一枚になんとかく似てゐることをおもひだした。

僕はその連中からすこしく離れた一本の樹の下に抛り出されて、遠くからかれらを見ながらこんなことを考へてゐたのだ。最前から僕の世話をやいてゐた番卒どもも、その連中に加はつて、胡坐をかいて煙草をふかしてゐた。

さてどうしたものか、僕にはまるで見當がつかなかつた。さすがの僕も今までこれほど絶望な場合に置かれたことは無かつた。だが、僕は心の中でかう云つて自分をはげました。

「勇氣を出せ！ 勇氣を出せ！ デュラール中尉！ 貴様はたび／＼こんな危い瀬戸をくゞつてこそ、今の若さで中尉にも昇進したのぢやないか！」

そこで僕はせいぜい勇氣を奮ひ起して、どうにかして遁る工夫は無いものかと、しきりとあたりを見廻したものだ。する



で、最初僕はその長靴が樹に括りつけてゐるのだと想つてゐた。

ところがよくよく見ると、それは太い釘で樹の幹にうちつけてゐるのだ。しかもその釘は長靴のだいぶ上の方でうつつてゐるのだ。と、僕は急に氣がついて、あまりの恐ろしさに「アッ」と叫ばうとした！ 諸君！ その長靴の中は空

では無いのだ、たしかに人間の足が入つてゐるのだ！

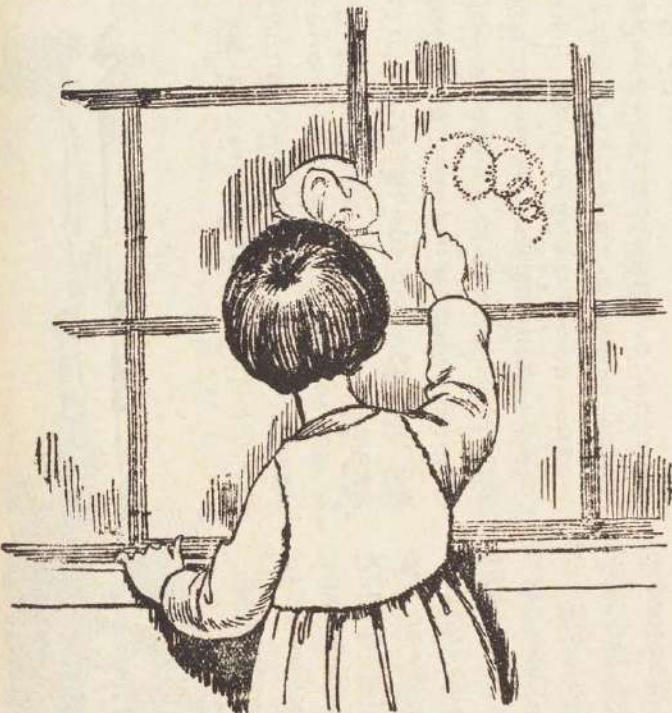
(つづく)



と、突然、驚くべきものが僕の眼にとまつた。

今云つた通り、大きな焚火が炎々と空地のまんなかで燃えあがつてゐるところへ、皎々と月の光が射してゐるので、そこら中には何もかも晝間のやうに明るいのだ。と、空地の向側になつた一本高い樫の樹が立つてゐる。その幹の色や、下側の枝の色が妙に變つてゐるのが、僕の注意をひいた。なんでもその下で焦げるほどさかんに火を焚いたのらしい。またその樹の前には藪があつて、それが樹の根方を隠してゐる。

ところで、僕がふとふり仰いでびつくりしたことは何やら藪のうへにブラ下つてゐる黒いものがあるのだ。どうやらそれは爪さきの上向いた騎兵の乗馬靴らしい。それが二つちやんと並んで下つてゐるのだ。



曇り日 (推慶)

伊藤夢子

今日は曇りよ

くもり日よ

雀の啼き聲

曇つてる

窓の硝子も

曇つてる

そこら一杯

曇つてる



香爐の行方 (つゞき)

森川 一郎

一、金龍の香爐

やがて、待つてゐた俳句と香の會の日は來ました。二人は朝から身を清め、雲水の位牌の前にお燈明を上げて、『どうかたきの糸口が判りますやうに。』と祈るのでした。そのうち時刻が來ましたので、二人は薄物を改めて牛込の酒井様のお屋敷に參りました。入つて見るとその立派なこと、始めて大名の屋敷を見る草太郎の眼を驚かすものばかりでありました。

茶室らしい風流な、廣くもない二軒家で、二三人の宗匠らしい人も來て待つて居りました。暫らくしてゐるうちに一人の武士が來て、『こちらへ』といふ案内に従つて參りますと、今度は可成廣い、そして立派な座敷に通されました。

やがて家中の人達も二十人ばかり集りました。これらの人達は武士とはいひながら、風流の道に親しむ人達ですから、如何にもケツと碎けた様子でその席に着いたのでした。そして最後に眼線は、二三人の供より外連れずに、これも又ケツと碎けた様子で出て來たのでした。

殿様を見ると昔一樣に平伏して、今日のお禮を申し上げました。すると殿様にこやかに微笑を浮べて、『陶石を始め、皆々揃つたやうだな。今日は余の館では特別な催したが、余は風流の道が性來好きだ。今日は皆々現慮せずゆつくりとするがよい。』

殿様の優しい言葉に皆々は又有難く平伏しました。やがて、薄茶の御馳走があつてからそれく短冊を持つて首を傾げたり腕を組ん

だりしてよい句を作らうと苦心するのでした。俳句の會が済むと、今度は香の會でした。それは俳句の會とは違つて、その席に坐る人も皆高貴の人ばかりで、夕方近い頃は、諸大名を始め、自慢の香爐を持つてゐる大家なぞが、立派な大廣間に集つたのであります。

四方山の風流話をしてゐますと、折から月が上りました。それを切つかけに香の抜き合せが始まりました。何しろ二十人以上もの席の人々が、皆當代一流の名門の者なので、その香といひ香爐といひ、皆負けず劣らずの珍らしいもの、尊いもの揃ひでした。それには誰の香の匂は高い山に雲の懸る感じがすると、誰々の香の匂は春の日の花の中に眠る心地がするとか、それは、いろ／＼な面白い批評の言葉が出て賑ふのでした。そして良いと賞めた人の多いからだん／＼と等級が付けられてゆきました。

皆一通り抜き終つた頃、酒井の殿様は陶石を皆々に紹介してから願て云ひました。『そちが云ふ珍らしい香とやら、狹いて見んか。』

その時、陶石はハツと頭を下げまして、

「眞に有難き幸せに存じます。就きましては私に、香爐を持参して居りませんので、御拜借願へませぬでございませうか。」

「あゝよい、余のを使へ。」
殿様がさう申されましたので、それを借りることにいたしました。流石は風流好みの殿様だけあつて、その香爐も大したものでありました。陶石は懐中から例の「光來香」を取り出して焚きました。すると紫色の煙が二筋三筋ゆる／＼と立ち昇つたと思ふと、不思議なほど煙の高い匂ひが周囲に立ちこめて、然もその匂ひは如何にも人の心を恍惚とさせるやうな楽しい味ひがありましたので、居座んでゐた人々は、その香を譽める言葉を惜しまなかつたのであります。

「うむ、世にも稀なる香ぢや。一體その方はどうしてその香を購めたか。」
酒井の殿様はさんさん譽めた後にかう云ひました。

「はい、これなる品は私がさる公卿様のお館へ参上いたしました折、下されたもので、何んでも唐から傳つたものなごさうでございませぬ。その香には、更に不思議な現はれがござ

います。」
「不思議な現はれとな、それは一體何ぢや。」
「この香は狭く香爐によつて中々面白い趣きを現はしますさうで、何んでも唐の國にある「青龍の香爐」と申します尊い香爐で焚きますと、立ちのぼる煙煙の中に如來様の御姿が現はれると聞いて居ります。また聞く所によりますと、我國にして金龍の香爐」と云ふのがありませうで、それによつて焚きますと煙が三段の輪を畫くさうでございませぬ。」

「右様か、それはまた珍らしい話ぢや。その金龍の香爐とやらは何處にあるのだらう。」
殿様の言葉に陶石は此處ぞとばかり、
「甚だ無禮な申出にはございませぬが、この席にお出遊ばすお殿様方の香爐を私にお見せ願へませんでせうか。かゝる高貴なお集り故の金龍の香爐がないとも限りませぬ。」
「それはまことに容易いことぢや。」
と並居る殿様方は一様に申しました。それでは御免と陶石は小姓が一つ一つ持つて来る多くの香爐をう／＼しく履し覗きながら見るのでした。

陶石が十五六の香爐を一々手にとつて見た

「草太郎、これでどうやら敵を知る糸口はついたやうだ。これから私は松平様へ行つてあの香爐を入れた骨董屋を聞いて来るから、お前はあの失立を持つてそつと郷里へ歸り、それを賣つた店を調べて貰ひたい。私の見當では確かにお前の家からさほど遠くない所の店だと思ふ。」と師匠の陶石は云ひました。

「畏りました。それではすぐ出立いたすことにいたしました。」
と云つて草太郎はその日のうちに支度をして、久方振りで郷里の村へゆくことになりました。草太郎は自分の顔を知つてゐる人に逢つては都合が悪いと思ひましたので、武士姿になつて、深編笠を冠つて出掛けました。

四年振りで生れた村へ歸つて見ますと、昔のまゝで、何も變つたこともないらしい村の景色は、なんとなく懐しく思はれました。草

と思ふ頃、一つの香爐を手にして思はずハタと膝を打ちました。
「これぞ、正しくその「金龍の香爐」に相違ありません。」
陶石が喜んで申す言葉の終るか終らないうちに、

「それは拙者のぢや。」と如何にも嬉しそうにいふ聲の方を見ると、それは松平様でした。席上の人々の眼は一様に松平様のお顔の方に注がれて、如何にも羨ましそうでありました。

「成程、これがその「金龍の香爐」か」と殿様方は席を立つて陶石の周囲に集られ、手に持つて見たり覗いて見たりして、これを譽めはやすのでした。

「陶石、お前早速その香爐で香を焚いて見よ。」と酒井の殿様が申しますので、
「畏りました。」と答へて、ふとその時傍に居りました草太郎は目配せをいたしました。すると草太郎は便所にでも立つやうにして廊下の方へ席を外しました。

陶石は金龍の香爐の中に三所に分けて香を入れました。すると三筋の紫色の煙が静かに立ち昇ります。並居る人々は三段の輪を畫く

「草太郎、これでどうやら敵を知る糸口はついたやうだ。これから私は松平様へ行つてあの香爐を入れた骨董屋を聞いて来るから、お前はあの失立を持つてそつと郷里へ歸り、それを賣つた店を調べて貰ひたい。私の見當では確かにお前の家からさほど遠くない所の店だと思ふ。」と師匠の陶石は云ひました。

「畏りました。それではすぐ出立いたすことにいたしました。」
と云つて草太郎はその日のうちに支度をして、久方振りで郷里の村へゆくことになりました。草太郎は自分の顔を知つてゐる人に逢つては都合が悪いと思ひましたので、武士姿になつて、深編笠を冠つて出掛けました。

四年振りで生れた村へ歸つて見ますと、昔のまゝで、何も變つたこともないらしい村の景色は、なんとなく懐しく思はれました。草

と思ふ頃、一つの香爐を手にして思はずハタと膝を打ちました。
「これぞ、正しくその「金龍の香爐」に相違ありません。」
陶石が喜んで申す言葉の終るか終らないうちに、

「それは拙者のぢや。」と如何にも嬉しそうにいふ聲の方を見ると、それは松平様でした。席上の人々の眼は一様に松平様のお顔の方に注がれて、如何にも羨ましそうでありました。

「成程、これがその「金龍の香爐」か」と殿様方は席を立つて陶石の周囲に集られ、手に持つて見たり覗いて見たりして、これを譽めはやすのでした。

「陶石、お前早速その香爐で香を焚いて見よ。」と酒井の殿様が申しますので、
「畏りました。」と答へて、ふとその時傍に居りました草太郎は目配せをいたしました。すると草太郎は便所にでも立つやうにして廊下の方へ席を外しました。

陶石は金龍の香爐の中に三所に分けて香を入れました。すると三筋の紫色の煙が静かに立ち昇ります。並居る人々は三段の輪を畫く

二、敵は誰

草太郎は師匠の陶石に連れられて行つた酒

すから、其奴は俗雑悪い奴に違ひありません。さう云つて、その人は草太郎の姿を見ながら、
「雲水さんの息子さんに草太郎さんといつてなかく、情柄者があつたが、どうかして敵を探して討ちたいと云つて旅に出掛けたやうでした。恰度年頃も、お武家様位になりませうかれ。」

草太郎は自分を見破られはしないかとびくびくしながら

「この家はそんな譯で荒れ果てゝゐるので、か。雲水といふ人はお氣の毒ですれ。いや、お呼び止めして失禮いたしました。」といつて、草太郎はその人に別れてわが家の前を離れ、上と一緒に楽しく住んだ家は、どんなに草太郎の眼に懐しく見えたでせう。

深淵笠に人目を忍んだ草太郎は、懐しい村へ来て、知合の人とも顔合せ、幼な友達の従弟をも訪ねずに、そのまゝ、街道を真直に歩いてゆきました。すると見慣れない茶店があり、見るとその店のお婆さんは草太郎の知



らない人でありましたから、
「お婆さん、お婆さんはこの土地の者か。と訊れて見ました。するとお婆さんは驚だらけの手を揉みながら、
「いえ、私は他國の者でございます。實は遠州からこの村のある人を頼つて来たのですが、来て見ますとその人は行方が知れませんでした、たうとうこの村でこんな商賣を始めてしまひました。」

「さうですか。」と云つた草太郎は、やつと安心して深淵笠をとりました。

草太郎が腰かけある途か前の方には草太郎にとつて忘れられない家が見えました。それは自分が幼い時住んだ廣い大きな立派な家でした。その家の幾棟かの屋根も見えるし、後のこんもりとした杉の木も見えました。
「時にお婆さん、あの家は何んと云ふ人の家だれ。」と訊れて見ました。

「あれは六兵衛さんの家でございませうよ。」
「六兵衛さんですと？」その六兵衛といふ人は元からあの家に住んでゐたのかね。
草太郎は自分昔の家がいつの間にか伯父の住むものとなつてゐたので、大層驚いたの

でありました。お婆さんの話す所を聞くと、伯父は二年前に、その家を買ひ取つて移り住んだのださうで、以前の住居であつたお寺の前の小さな家に出べると大した出出だつたのであります。

伯父がどうしてそんなに急に金持になつたかは草太郎には少しも解りませんでしたけれど、昔の家が同じ人手に渡るならば、せめて身内の伯父の手に入つてゐることは何處やら嬉しい氣もいたしました。

「お婆さん少々訊れないことがあるのですが、この矢立と同じやうな品を買ひたいのですが、これを賣つてゐる所を知りませんか。」

「どんな矢立でございます。」といつて、お婆さんは草太郎の矢立を手を取つて見てみましたが、黒漆の裏にあつた「佐」の字に氣が付いたと見えて、

「この矢立なら、これから北へ一里ばかり行つた宿場に佐七さんといふ金物屋があります。多分其處で作つたものでせうよ。」
「さうか、それは有難う。」



草太郎は意外に容易く矢立の賣り主が判つたので、喜び勇んでその茶店を出掛けました。そしてお婆さんに教へられた通り、北へ一里ばかり行きましたら、貧し氣な宿場がありました。草太郎は少年の頃の頃の宿場の

しにはよく聞いてゐましたけれども、来たのはこれが始めてでしたが、佐七といふ金物屋はさきに知れました。
草太郎はすつかり、待のやうに威張つてその店に入りました。そして出て来た主人に矢立を出して見せ、
「一寸物置を置れるが、この矢立はお前の所で賣つたものか。」と云ひました。

「へえ、手前共で作りました、手前の店で賣つたものに相違ございません。」と金物屋の佐七はお、人にでも調べられるやうなおづ／＼した氣持で答へました。

「それではこのやうな矢立をお前の店に買ひに来た者で、野本村の者はなかつたか。」
「へえ野本村の村も深山お出になります。名主様の惣兵衛さんを始め、金貨の金造さん、六兵衛さん、その外いろいろの方が見えますが、中でも六兵衛さんなんぞは至つて御懸念に願つて居りまして、金物類は何から何まで私の所を使つて下さいませう。」

「この矢立を四年前に買つた人を覚えて居らぬか。」
「お武家様、どうしてそれを覚えて居られま

せう。昨日や一昨日のことならまだしも、四年前のこと、聞いちや、とても見當がつきません。」

佐七のさう云ふのを聞くと、草太郎はそれ以上知らうと思つても無理だと思ひました。それで、佐七にはお禮をいつてその店を出ました。

草太郎はその夜はその宿へ泊つて、翌日は早く立つて江戸へ歸りました。江戸では關石が草太郎の歸つて来るのを待つて居りました。

『どうだつた。何か手掛りが知れましたか。』
關石は草太郎の顔を見るなり云ひました。

『いえ、先生、この矢立を賣つた店は判りましたが、この矢立の買主は古い事で、どうしても判りませんでした。』

『さうだらう、私もさう思つてゐた。』と師匠が云ふので、草太郎はそれなら何故自分を探しにやつたのだらうと思ひました。

『けれども村へ行つて何か變つたことを聞かなかつたかね。例へば貧乏人が急に金持になつたやうなことを。』
『それなら先づ聞きました。伯父の六兵衛が

『あの伯父の六兵衛、憎くき父の敵。』と草太郎は拳を握めて口惜しがりました。

師匠の關石は尙も言葉を絶ぎました。

『それに就いては松平様、大層お前さんのことを感心して、敵討ちをするなら家來の中で強い者を四五人貸してやるから、討ら損じのないやうにするがよいと云つて下さつた。そして首尾よく敵が討てたら香爐を返して下さいとまで仰言つた。』と申しました。

草太郎は大層喜んで、明日仇討に出掛けよう、と、師匠と共にその支度をいたしました。父の位牌を出して生きた人に物云ふやうに、やつとの事で敵が知れましたから、明日こそは乾度お根みをお晴し申しませうと云つたりお湯に入つて體を清めたりしました。そしてその夜は明日の仇討に勇み立ちながら眠つたのであります。

その夜、草太郎は夢を見ました。

その夢の中で、草太郎は七八つの子供でした。春のことで、雨上りの日は麗らかに晴れ渡つてゐました。草太郎は寺小屋に手習ひに行つての歸りを、今小川に架けられた土橋の所まで來ました。雨上りのことゝして、小川は

私の父の昔の家屋敷をそっくり買ひ取つて今では其處で、立派な暮しをしてゐるやうです。』

『その家と云ふのは私が御厄介になつたことのある家かね。』

『いえ、あの家ではありません。落ぶれない前の家です。』

此時關石は「古めた」と手を打りました。

『草太郎、お前さんの父の敵が知れたぞ。』

『え？、知れましたか。一體それは、だ、だれですか。』

草太郎は嬉しさの餘り、膝を詰め寄せて申しました。

『それはお前さんの伯父の六兵衛だ。』

『え？、伯父さんが？』

草太郎は餘りに意外な言葉に吃驚してしまひました。

『先生、本當ですか、それは。そして一體どうしてそれを知つたのですか。』

『まあ急ぐな、今話す。』

關石の話す所によりますと、關石は草太郎が出て行つた後で、松平様のお屋敷に伺つたのでした。やつとの事で敵様にお目通り

いつもより水が枯れて居ります。いつも水より四五尺も高くなつてゐる土橋が、今日は水とすれ／＼になつてゐました。見ると土



橋の袂で、伯父の六兵衛が釣をしてゐました。『伯父さん、何か釣れたかえ？』

が出來て、先夜のお禮から「金龍の香爐」の話をいたしました。そして關石はその香爐の不思議な運命や、その爲めに俳諧師雲水が何者かに殺された事から、その後息子の草太郎が敵を討たうとして苦心して、間違つて自分が狙はれたこと、その後は共々大切な香爐と敵を探れてゐることなど、残らず物語りました。そして、どうぞその香爐が何人の手からお殿様の手にお入りになりましたか、それを教へて下さいと頼みました。

それを聞いて敵様は、早速承知して下さつて、すぐ様家來に命付けてその骨董屋を招んで聞いて下さいました。すると、それは野本村の六兵衛といふ人から五百兩で買ひ取つたものであることが判りました。

『こんな事でお前の父を殺したのは伯父の六兵衛に相違ないことが判つた。憎むべきは六兵衛である。自分の兄を殺して香爐を奪ひとるなんて、大畜生にも劣る奴だ。お前さんは今度こそは、間違なく敵を討たなければならぬよ。』
關石はさういつて喜び進み、草太郎に元氣をつけました。

『や、草太郎が、いくらも釣れないよ。』といつてゐる時、一本の竿の浮を激しく魚が引いてゐるやうでした。伯父は慌て、それを上げると、何か大きな魚が掛つたらしく重くてな／＼上りません。魚は水の中でばかりと逃げ廻つてゐます。

『あ、大きな魚が。』と叫んだ草太郎は、どうした發作か、土橋を踏みはずつて小川の中へどんぶりと落ち込んでしまひました。それから後暫らくの間、草太郎は何も知りませんでした。氣がついて見ますと、伯父の家には驚かされて、伯父や叔母やに介抱されてゐました。

『草太郎、氣が付いたか。あ、やつとこれで安心した。お前が川に落ちたものだから、己れは飛び込んで助けたのだよ。そのお蔭で大きな魚は逃してしまつた。』といつて伯父は笑ひました。

草太郎はその夢から覺めた時は、もう明方の光が戸の隙間から微かに陰れてゐました。そして考へて見れば、夢の中で見たことは自分が幼い時にあつた事と同じ事だったので

號ムリグ



「あの事があつてから、自分は伯父さんの命の恩人だと思つてゐた。」と考へると、その恩人を今日は父の敵として討たなければならぬ。心苦しさをしみじみと味ひました。

草太郎が起きると、師匠の幽石もすぐに起きました。

「草太郎、今朝はお前の門出を祝してかお日様まであんなに輝いてゐる。一點の曇も見えない。」といつて、幽石は如何にも喜ばし氣でしたが、ふと草太郎の暗く沈んだ顔を見て、「お前さんは大層顔色が悪いね。どうかしたのか。」と心配して訊ねました。

その時草太郎は、墨に両手をつけて、「先生、宥して下さい。私は敵討ちを止めたうござります。」

この言葉を聞いて、幽石は火のやうに顔赤くして怒りました。

「何をいふ。今朝になつて敵討ちを止めにするとは、扱はお前さん、憶病風にかかれたな。」

その時、草太郎の眼からはばらばらと涙がこぼれました。

「先生、私は意氣地なしかも知れませんが、憶病者かも知れません。けれども私は恩義の爲めに、どうしても伯父を討つことが出来ません。」といつて、草太郎は昨夜見た夢のことから、日頃伯父を命の恩人だと考へてゐたことを話しました。そして、

「私の伯父は現在の兄である父を殺しました。それは本當に憎むべき非道です。けれども私が亦父の敵といつて恩人の伯父を殺すなら、一方で孝行になりますけれど、一方で私知らずの非道者になります。そして、今の私の家の系圖が少しも汚れてゐなかつたものを、伯父が父を殺し、私が伯父を殺してゐましたら、何んといふ非義非道の一族となるでせう。私はさんざ考へた末になうとう敵討ちを止めようと思つたのです。」

「成程、お前さんのいふことは道理です。然し、伯父の恩と親の恩とを計にかけたらどちらが重いと思ふかれ。」

「はい、それは親の恩の方が重いと思ひます。けれども私は現在の恩人である伯父にどうして刃を向けられませう。私は亡くなった父に不孝のお詫びに今日から出家して父の菩提を葬ひます。」

草太郎は涙を流して真心を盡して申しました。

ので、幽石も悉かり感心してしまひました。

「あゝ、お前さんは本當に天賜れな心掛けです。親に孝心厚い者は、矢張恩義にも厚いものとは兼ねなく知つてゐました。私はそれを聞いて、お前さんが敵を討つたよりもお前さんの偉いのに感心しました。」といつて、幽石も涙を流して草太郎を譽めました。

草太郎はその日の中に江戸を發つて高野山へ登つて坊さんになつてしまひました。

幽石は草太郎に別れて野本村に六兵衛を訪ねました。そして今迄のことや、草太郎の出家したことを話して、

「あなたは草太郎さんの真心だけでも涙んでやつて下さい。」と申しました。

六兵衛は始めのうちは「自分は雲水を殺して香爐を奪つた者ではない。」と云ひ強つて居りましたけれども、だん／＼話を聞いてゐる中に、自然と涙が下つてしまひました。そしてたうとう、堪忍して下さい。」と云つて、幽石が歸つた後、六兵衛は良心に責められて、たうとう申附の爲めに腹を切つて死んでしまひました。(なほり)

グリム兄弟の話

中島 孤島

(一)

ドイツの子供が、お父さんお母さんの次に、一番よく知つてゐるのは、グリム兄弟の名だといはれます。そのくらゐグリムの童話は、ドイツ國民の心に深く染みこんだものです。

今から百十二年前の一八一二年にこの童話集の第一巻が初めて出版された時からドイツの家庭生活がこの童話集によつて、どれほど豊かにされたでせう。いやそればかりでなく、ヨーロッパ文化の及ぶところには、殆んど世界の果までも、傳はつて行つた。ドイツの子供たちが母親の乳と一しよに吸ひこんで生長するといはれるグリムの童話が、遠く高山を隔てたわが日本の子供たちにまでなつかしまれるやうになつたのはなんの不思議がありません。まあ低にグリムといふのはこれらの童話を書き集めた人の名だといふことを、ばつかりと知らない子どもがあつたにしても、あの狼と七匹の子山羊の話や、ヘンゼルとグレーテルが、森の中でお菓子の家をつける話や、お灰さんや赤い

のです。

中學から大學へ移る間に、弟のキルヘルムは病氣をして、一年おくられました。そればかりでなく、その時から、キルヘルムは病身になつて、ばげしい仕事が出来なかつたので、大學を卒業してから、カッセルで、母と一しよに、ぶら／＼暮してゐました。兄弟がドイツの童話を集め出したのは、この時分からでした。併し健全な兄のキルヘルムは、弟とちがつて、仕事の上で、ペリーへ出たり、ペリーから歸つても、いろ／＼の職についで、いそがしく働いてゐましたし、後には外務省の役人になつて、ペリーへも、キーン(ドイツの都)へも行つてゐたので、童話を集める方の仕事は主に弟のキルヘルムが、附にあかして、ぼつ／＼と進めてゐたのでした。それでもこの病身なキルヘルムの骨折が、だん／＼とつもつて行つて、一八一二年にはそのうらから八十五歳を選んで、童話集の第一巻を出すまでになりました。この童話集は兄弟二人の名になつてはありますが、キルヘルムが書いたのは「ラプンツェル」や「黄金鳥」など、ほんの三つ四つで、あとは残らずキルヘルムが書いたものでした。そればかりでなく、キルヘルムは、この童話を書き集めてくれたグリム兄弟といふのほどどういふ人でせう。

巾や、指指や、雪のなばさんの話を知らない子どもは少ないでせう。そのくらゐグリムはもう世界の子どもたちとちがつきになってゐます。もしこの子供たちが大きくなつて、ある時、ある機会に、これらのお話を作つた人が、グリムだといふことを聞いたとしたら、その時からグリムといふ名は、一生の間忘れることの出来ない、なつかしい名になるにちがひない。かうしてあのグリムの童話は、ドイツの子どもたちの聖い寶物であるばかりではなく、今では世界の子どもたちの共同の寶物になつたのです。

(二)

それではこの童話を書き集めてくれたグリム兄弟といふのほどどういふ人でせう。

グリム兄弟は、兄をヤコブ・グリムといひ、弟をキルヘルム・グリムといつて、一ツ遣ひの兄弟でした。兄のヤコブは、今から百三十九年前一七八五年一月四日に生れ、弟のキルヘルムはその翌年二月二十四日に生れました。生れた場所は、ドイツのフランクフルト市の近くにあるハナウといふ小さな町でした。兄弟の父は裁判官でしたが、ヤコブの九歳の時に死んだので、それから母の手一つで育てられ、一七九八年兄のヤコブが十四歳のキルヘルムが十三歳の時に二人は一しよにカッセルの中學校へ入學し、中學の課程を卒業すると、マールブルクの大學へ進んだ。最初のうちは二人とも父のあとをついで官吏になるつもりでしたが、中途から目的をかへて、文學に轉じた

ルムは、この童話の序文も自分で書いたが、そのうらには、こんな意味のことが言つてありました。



キルヘルム
グダ

「時によると、暴風雨やなにかの天災のために、作物がすつかり荒らされてしまつても、どこかの隅つこに、たとへば道ばたの低い生垣や藪の下などに、そつと頭をつきこんで、麥の穂が少しばかり残つてゐるといふやうなことがあります。もう一度太陽が恵み深い光をそまぐと麥の穂は誰の眼にもつかずにはひとりはつちで、だん／＼とおほきくなつて行く。だれも鎌をもつて来て刈つて行くものはないが、それでも秋になつて、すつかり實がついた時分になると、貧乏な人が見つけに來て、一つ一つ穂を拾つて、町裏にしばつて、一束の麥よりも大切に、うちへ持つて歸ります。そしてそれを冬中の食料にするでせう。多分はまたそれが來年の種子にもなるでせう。子度これと同じやうに、遠い昔に榮えたいろ／＼なものうちで、たゞ僅かの民謡や、一二冊の童話や、少しばかりの詩や、民間に傳はつたこれらの無邪氣な昔話のほかには、なに一つ残つてゐないのを見ると同じやうな感じがするのです。暖爐のそば、圍爐裡の

まはり、屋裏へのぼる階子段、今に残つてあるお祭り日、ひっそりした森や牧場、そのうちにも謎やかな空想が、これらのものを保護して、今日まで残して来た生垣だつたのです。

ほんたうに、グリュム兄弟が、この理もれた共同の寶、國民的詩的空想のうちから咲きいでた、このなつかしく、うつくしい花を、もう一度明るい日光の下に出すまでには、人の知らないいろいろな苦心があつたのです。

その時分にはまだこんな昔話を集めた書物は一冊もなかつたので、兄弟の進まうといふ道は、たれひとり踏んだことのない野原のやうなもので、この兄弟は自分で筆を分けて、新しい道を開いて行かなければならなかつたのです。兄弟は夢のやうな記憶をたどつて、幼い時分に、母の膝元で聞かされた昔話の筋を、ときれ／＼に思ひ出して見ました。それから、知つた人のうちから、こんな昔話をよく知つてゐる人を見つけては、その話を聞いてもらひました。澤山聞くうちに、同じ話もありましたし、又同じ話でも、話す人によつて、幾らかづつ違つてゐるところもあります。さういふ話を一つ一つ細かに書きとつておいて、同じ話で幾らかづつ違つてゐるといふやうなのは、よくよく比べて見た上で、自分でいゝと思ふのを取るやうにしました。こんな風にして、これまで路ばたの草のやうに棄てられてゐた昔話を、丹念にひろひ集めて行つたのです。かうして童話の材料を興へて、兄弟の仕事を手助けしてくれた人々のうちには、カッセルの町で薬屋をしてゐたキルド家の娘で、後にキルヘルム

の妻になつたドロテアだの、ドロテアの姉妹たちだの、ドロテアのお母さんだの、それからドロテアの乳母であつた「マヨイ婆や」だの、又ドロテア姉妹の仲よしの友達だつたアマヨイとヤネツチといふ姉妹の娘だのがありました。そのうちでもドロテアと、ドロテアの姉さんのグレイチエンと「マヨイ婆や」から聞いた話が、一番多く、病身のキルヘルムはよくドロテアの家の庭へ行つては、その頃まだ十五六の少女であつたドロテアの口から、夢のやうな昔話を聞くのを何よりの楽しみにしてゐました。

(三)

童話集の初巻が出た時は、ドイツはまだフランスと戦争を續けてゐる際でしたが、それでもこの書物は世間から歓迎されて、グリュム兄弟の名は、この一著によつて廣くドイツ國民の間に知られるやうになりました。

童話集の初巻が、すべての世界に紹介してくれたからとキルヘルムは後に書いてありますが、實際グリュム兄弟の名をその本國の子供とその子供の父母ばかりでなく、廣く世界の子供たちにも覚えてゐることに出来なかつたのは、この童話集の功です。そこで一八一五年には、更に七十篇の童話を集めた第二巻を出版し

又一八一九年には第二巻を出版しました。

この二巻には、澤山の訂正も加へ、又前の二巻には入れなかつた新しい童話をも加へたので、初版に比べると、大分違つたものになつてなりました。一例を挙げると、あの有名な「ヘンセルとグレンテル」の話でも、第一版では、兄弟が森の中を迷つて歩いて、魔女のうちに來ると、中から魔女が、

「チップ、チップ、チップ、

戸をたたくのはそりや

たれだ？」

と聲をかける。兄弟がび

つくりする。そこへ魔女

が小屋の中から顔を出す

といふことになつてゐま

すが、第二版では、魔女

が現れる前に子どもが小

屋の屋根をかいて食へな

ら、

「風一 風一

天の子どもー」

と答へることになつてゐます。

こんな風にあとからだん／＼と加へたり、かへたりして、版の重なる



ヤコブ
グリーム

たがに幾らかづつ改まつて行きました。そこにも、兄弟の眼に見え

ない苦心がうかがはれるのです。

一八二二年に童話集の第三巻が出ました。けれどもこの第三巻は前

の二巻のやうに童話を集めたものではなく、前の二巻を讀む人々の愛

考として、一々の童話の出た地方を記し、又それと似つた方々の話

を採つて、比較したり考證し

たりしたものです。これを

讀むと、グリュム兄弟がああ

話集を出版するまでに、どの

くらゐ苦心して材料を集めて

ゐるかといふことがよく分る

のです。

(四)

童話集でゝがあがつてからも

弟のキルヘルムは、カッセル

の圖書館で、わづかな俵給を

もらひながら、自分の仕事をつづけてゐました。そのうちに、一八一

四年に兄のヤコブも、官吏をやめて、カッセルへ歸つて来て、弟

と同じ圖書館へ勤めることになりました。この時から兄弟は始終同じ

家に生んで、机を並べて仕事をしてゐました。

一八二五年に弟のキルヘルムは、あのキルド家の妹娘のドロテアと

結婚して、間もなくヘルマンといふ子どもまで出来ましたが、兄のヤコブは「生妻をもたなかつたので、兄弟は生涯離れることなしに、同じ家で暮しました。」
後に兄弟はゲッティンゲン大学の教授に迎へられ、晩年にはフリードリヒ・キルヘルム帝に招かれてベルリンへ行つたが、二人はいつもいつしよでした。

キルヘルムの子のヘルマンも後に立派な學者になつた人ですが、この人が自分の父と伯父のことを思ひ出して書いたものうちにこんなことないつてゐます——

『その頃わたしたちが父と「アババ」(わたしたちは伯父のことなさう呼んでゐた)の書齋にはひる時は、そつと邪魔にならないやうに氣をつけてゐた。しんとした書齋の中には、本の軋る音が高かつた。時々伯父が小聲にささやく聲がした。伯父は顔の紙の上に近く當て、短いペンで性急に書いた。父は長い驚きの先にインクをひたして、考へ考へ筆を執つた……』

兄のクリムは學者風の人で、「ドイツ文典」や「ドイツ神話學」などの大きな著述を残してゐるくらゐですが、弟のグリムは、どちらかといふと詩人肌で、ドイツの傳説や、古文學の研究に力を注いでをりました。

あの童話の簡潔な、詩的な文體は、主として弟の筆から出たもので、弟のグリムは一八五九年十二月十六日に七十三歳でこの世を去つた。

だが、兄のグリムはそれからまた四年生きのこつて、一八六三年九月二十日に七十七歳で、弟のあとを追つて行きました。
ヘルマンの「思ひ出の記」のうちには、なほこんなこともいつてゐりました。

『あなたがグリム兄弟の身内だといふのはほんたうか？とわたくしはこれまで幾度人にきかれたか知れません。わたくしが兄弟の子であり男であるといふことが、その人たちに親類のやうな親しみをもたせるのでした。わたくしに取つて、これほどうれしい名譽なことはありません……兄弟のため、記念の銅像が建てられると聞いたとき、すべてのドイツ人は歡つてその費用を寄附しました。遠い他國になるものまでが寄附して来た。子どもと貧民は、一錢二錢の金をあつめて持つて来た。』

その銅像は、一八九六年に、兄弟の生れ故郷のハナウに建てられたが、それは弟のキルヘルムが椅子へ腰をかけて、膝の上へ本をひろげてゐるそばに、兄のヤコブが立つて、片手を椅子の肘へおいたまゝ、ちつと本をのぞいてゐるところで、その臺石には最期まで二人のそばにゐて、いろ／＼な世話をしたドロテアの像が刻んであるさうです。

グリム兄弟にはもう一人、ルードヴィヒといふ木の弟がりました。この人は畫家でしたから、童話集の挿畫を澤山にかきました。(なほり)



小屋と靴屋

(児童劇)

楠山正雄

役の名

- 貧乏な靴屋
- 靴屋のお上さん
- 靴屋のお客(男のお客二人、男の子二人、女の十一人)
- 靴屋の小鬼二人
- そのほかの小鬼十人

第一場

靴屋の店(晩)

まん中(まんなか)にことの臺(たい)。そのまはりに椅子二つ三つ。靴屋(くつや)入つて来て、靴(くつ)を裁(き)らはじめる。お上(お上)さんが出てくる。

お上さん。あなた、けふお金(かね)がすこしないでせうかねえ。子どもたち(こどもたち)にどうかして着(き)るものをこしらへてやらなくてはなりませんし、内(うち)にはもうあしたのお米(こめ)がないのですよ。あともう二日(ふたにち)でクリスマスだといふぢやありませんか。

靴屋(くつや)。それは困(こま)つたねえ。だがあつたけのお金(かね)でこの皮(かわ)を買(か)つてしまつたらう。(こしらへかけの靴(くつ)を見(み)せる)もう一文(いちもん)だつてのこつてやしない。とにかくこれで一足(ひとあし)だけ靴(くつ)ができる。

あしたの朝は早くおきてしあけてしまはう。するとお晝頃
にきつとお客さまが来て買つて行つてくれるだらう。
上さん。さううまく行けばいいが。とにかく、やれるだけ
のことをやつて見るだけすわ。(ため息をつく)どうかし
て子どもたちのために、いいクリスマスにしてやりたいも
のですね。もうおそいから、けふは寝ませう。

靴屋とお上さんは出て行く。小鬼が二人瓜先立ちをして入つて
来て、そつとうなづき合ふ。やがてしこの臺の上へ、おな
かのさけるほど大笑ひをして靴屋の、つて置いた靴をこしらへ
はじめ。針で縫つたり、押でなくつたりして見る／＼靴が一
足でき上がる。それから扉口へ行き、ほかの小鬼を十人つれて
来てしあがつた靴を見せる。みなまた大笑ひに笑つて十二人が
一つになつて靴屋の舞踏を踊つて、またそつと拔足してかへつ
て行く。靴は臺の上にもろ／＼へつてゐる。

第二場

あくる日の朝。靴屋、目をこすつてあくびをしながら出てくる。
しこの臺に腰をかけて、小鬼のこしらへて行つた靴を見つけ
てびつくりする。

靴屋。へい。こゝにちやうどお子さんにびつたりはまる靴が
ございます。ちやあ坊つちやんお腰をおかけなさい。ため
して見て上げますから。

(子どもに靴をはかせる。まねだけでもよろしい)



靴屋。(靴を手にとつてとび上がる)やあ、こりやあどうしたの
だらう。おい、おい、早く来てごらんよ。ふしぎなことが
あるから。(お上さん出てくる)ごらん、こんないい靴が臺の
上につつてゐたよ。

お上さん。どこから持つて来たんでせう。
靴屋。分らない。でもゆうべわたしが裁つておいた靴には
ちがひないよ。

お上さん。(靴をしらべて見る)だれがこしらへてくれたんでせ
う。まあよくできてゐるちやありませんか。いくらあなた
がお上手でも、とてもこれだけにはできませんよ。きつと
どこかのいい化が来てこしらへてくれたんですよ。

靴屋。さうかもしれないね。
お上さん。まあ、今夜また来るかもしれないから、そつとの
ぞいて見て見ませう。

(かういつてあるところへ、お客が男の子を一人つれて、やつて
くる)

靴屋。いらつしやい、お早うございます。

お客。やあお早う。この子にはかせる靴がありますか。

お客。あゝ、けつこう、けつこう。(靴をながめたり、靴の先に
さほつて見たりする)どうだね、ぐあひはいいかい。

子ども。おとうさん、いいぐあひですよ。

お客。立つて、すしあるいてごらん。(子ども立つてあるい
て見る)

子ども。あゝ、これなら上等だとも、おとうさん。

お客。よし、よし。ちやあこれをもらつて行かう。(靴屋に
いくらすね)

靴屋。五十錢頂きます。

お客。どうしてこんないい靴が五十錢ばかりで買へるもの
か。ちやあ一回上げよう。(お金をやる)

靴屋。どうもありがとうございました。

子ども。うちまで、こんどの靴の方を、はいて行つてもいい
の。

お客。あゝいいよ。

靴屋のお上さんが、ばいて来た古い方の靴を紙にくるんで、お客
にわたす。

お客。あわがたう。ちやあさやうなら。

靴屋とお上さん。 さやうなら。 おかへんなさい。
 靴屋。(うれしきうな顔をして) どうだい、こんなにお金がもう
 かつたぞ。 さあお米を買ふお金を上げよう。 半分は皮を買
 ふお金だ。

(お上さんにお金を半分わけてやる。)

お上さん。 まあ運がよかつたことね。 さつそくお米やさんへ
 行つて来ませう。

靴屋。 わたしも皮屋へ行つて来よう。

靴屋とお上さんけ外へ出て行く。

第三場

靴屋。 靴屋が出て来て、あしたの朝の靴のしごとを臺の上になら
 べてゐる所へお上さんがはひつてくる。

靴屋。 さあこれで二足の靴を裁つておいた。 あしたの朝早
 く起きてしあけるんだ。 けふのやうないいお客さまが、あ
 したも来てくれるとすればいいんだがなあ。

お上さん。 きつとまた、あしたの朝までに、この靴ができ上
 がつてゐるかもしれませんよ。



四九

靴屋。 お前、そんなに懲ばるものぢやないよ。 なあにいいお
 客さまへ来てくれればそれでいいんだよ。

お上さん。 え、でもまあとにかく誰か今夜も来るか、見て
 るませうよ。

靴屋。 あ、いいとも。 だがお前、いいお化がもう来なくつて
 も、がっかりしてはいけませんよ。 もうあれだけしてくれた
 んでも、けつこうなんだからね。

お上さん。 さあ、もうおそくなりましたわ。 そろ／＼いいお
 化の来る時分ですわ。

靴屋とお上さんは、屏のうしろにかくれる。 はじめまつ二人の
 小鬼が来て靴をこしらへる。 あとから十人の小鬼がはひつて来
 て一しよに舞踏をする。 すべて前の通り。 この間にちよい／＼
 靴屋とお上さんが座でのぞいてゐる。 舞踏がすんで、小鬼たち
 がしあがつた靴を二足臺の上のせて出て行つてしまふと、靴
 屋とお上さんがあゝ息を切つてはひつてくる。

お上さん。 まあ、かはいらしい小鬼たちの様子をごらんにな
 つて。

靴屋。(靴を手にとつてながめる) こんなきれいな靴を、見てゐ
 るうちに、しあけてしまつたぢやないか。

お上さん。でもかはいさうに小鬼たちは、着物が無いんでせうか。いくら元氣でかけまはるからといって、はだかではさぞ寒いでせうね。

靴屋。何か、着物をこしらへてやりたいもんだなあ。あんなにしんせつにしてくれたんだもの。

お上さん。小ちやい上着とズボンをこしらへてやりませうか。

靴屋。ちやあわたしは先のとがつた小さい靴を縫つてやらう。お上さん。ちやあついでに、靴下も編んでやりませう。これもあしたの朝からさつそくかゝることにしませうね。

靴屋。うん、それがいい。それがいい。

靴屋とお上さんは出て行く。

第四場

あくる日の朝、靴屋が来て、しごと臺の上でしごとをしながら、お客が女の子と男の子を一人づつ連れてやつてくる。

靴屋。いらつしやい。お早うございます。

お客。お早う。この女の子には靴はありませんか。

靴屋。ちやうどおあつらへ向きの靴がございませう。(靴を見せ

る) いかゞです、これではお氣に召しませんか。

女の子。あら。かはいらしい靴だこと。おとうさま、これを買つてね。

お客。まあ、お前さまにはいてごらん。うまく合へば買つて上げるよ。

(靴屋、女の子に靴をはかせる。おとうさんが靴をいぢつていろいるためして見る) うんよし、これを買ひませう。それからこちらの男の子も靴がほしいのだが。

靴屋。これがよろしうございませう。ひとつためして見て頂きますせう。

男の子に靴をはかせる。男の子は大とくいで踊りまはる。

お客。この方もぐあひがよきさうだ。買つておきませう。いかほどですか。

靴屋。一足五十錢ついでございます。

お客。どうもそれでは安すぎてお氣の毒だ。ちやあ倍にして上げませう。(靴屋に代をやる)

靴屋。どうもたくさんに頂いてすみませぬ。ありがとうございました。

靴屋さんの針が。

アラップ アタップタップ。アラップアタップタップ。

トン、トン。トン、トン。靴屋さんの槌が。

アラップ アタップタップ。アラップアタップタップ。

トン、トン。トン、トン。靴屋さんの槌が。

この歌の拍子に合せて靴屋はトントン槌をたたく。この歌を二度くりかへしたのち、お上さんが縫物をもつて奥へはひると、そのあとから靴屋もついてはひる。

(幕なつかふ場合には、二人がしごとをしてゐる姿勢のまま靴をおろす)

第五場

靴屋しごとの臺の上でせつせと靴をこしらへる。お上さんはそのそばの椅子に座をかけ着物を縫ふ。

負けずに縫ひませう。

靴屋。さうだとも。さつそく靴をこしらへにかゝらう。晩まで間に合はないといけないから。

お上さん。わたしも着物の切れをもつて来ました。あなたに

靴屋。(しごとをしながら歌をうたふ)

行つたり来たりいそがしきうに

靴屋さんの針が。

行つたり来たりいそがしきうに

お上さん。着物を靴のわきに並べておいてやりませう。(臺の上におく) 小鬼が今夜も来るといいんですね。

靴屋。あ、きつと来ると思ふよ。そして新しい着物を見たら



するぶん喜ぶたらと思ふよ。

お上さん。新しい靴だつて、どんなにうれしがるでせう。

靴屋。もうおそいよ、かくれてるよう。さあ早くおいで。

二人は出て行く。扉のかげにかくれる。二人の小鬼がそつとはひつてくる。着物と靴を見つけると、まも、れしさに踊りまはつて、そつと笑ふ。着物を着て靴をばいて、お互に袖をひつぱつたり靴を指さして見せたり、とくいらしくはねまはつて、

『しやれた、きれいな子供になつた、靴直しではなくなつた。』

と、うたふ。それから十人の小鬼を呼び込む。みんなはひつて来て、二人がきれいになつたのを見て、手をたいて喝采する。着物をひつぱつたり、靴をいちつたりするものもある。それから二人の小鬼をまん中に、十人の小鬼はそのまはりにもるい輪をつくつて、靴屋の舞踏をなとる。舞踏がすむと、みんなしづかに出て行く。

〔附記〕

この芝居はグリムの童話にもつづいたアメリカの児童劇を改作したものです。場面は度々變りますが幕はいりま

せん。各場のはじめとをはりの人物の出入が幕あきと幕切れになるのです。

(幕を使ふ場合、第一場のはじめは靴屋がしごとをしてゐる所で幕をあげ、第三場の終り、靴屋とお上さんがしごとをしてゐる所で幕をおろして下さい。)

小鬼の舞踏は原作にはデンマルクの農民舞踏をはめて使ふやうに指定してありますが、これは適宜のものをえらばれたらいいでせう。

背景はむろんいりません。靴屋のお上さんが小鬼のしごとをかけたのでぞく所があるので、幕か屏風のやうなものがあるほうがいい。小道具は靴をたくための小さな槌と木の足形、それにお客のかける椅子が二三脚あればけっこうです。靴や皮は本物には及びません。このほか靴屋がしごとをする臺の代りに、何か箱のやうなものが一つほしいものです。

衣裳はもちろん特別に作るには及びません。靴屋になる子供は赤チョッキに白シャツに腕をまくり上げて、茶色のエプロンをしめれば靴屋さんらしくなりま

す。

お上さんになる子供も、いつもの胴の上になつと頭巾やエプロンをちよつと工夫すれば職人のお上さんらしく見えるでせう。

お客はやはり大きい子供がやります。これはお百姓風にといふ原作の註文です。

さてちよつと工夫のいるのは小鬼ですが、これは裸體といふ心で禪または草色の縫ひぐるみを顔だけ出して頭の天邊から足の爪先まで全身に着込みます。そして妖精のしるしに額と足の爪先を失らせておきます。縫ひぐるみは簡單に何かで代用させて(たとへばシャツの上下を著るやうにでもして)下さい。頭の上に二本赤い角をこしらへて下さい。赤いリボンか針金で赤い線をまいたやうなものでいいのです。それから左右の肩に二枚、標か草色の翼を糊で張つた切れか何かで工夫して下さい。

小鬼の贈物につかふ赤い着物と赤い靴は、紙とボールでかはいらしく、おもちゃの着物と靴のやうにこしらへたらいいでせう。



男 巨 き 若

蝶 狐 場 馬

(一)

五四

或る田舎の人に一人の息子がいましたが、それが小さいにも小さいにもほんとに小さくつて、背が父親の指の丈位しきや無く、何年経つても一分だつても伸びるのではありませんでした。或る日、父親が野を鋤きに出ようとしますと、その小人島の息子が、

「お父さん、私あなたと一緒にいきたいんです。何うぞつれてつてください」と云ひました。

「いや、それはいけない。お前は家にゐなさい。野らへ行つてもお前は何の役にも立ないし、それに、お前は直きに迷子になつてしまうから」と、父親は云つてきかしたのです。

けれども、息子は納得しませぬので、ワア／＼泣きだしましたので、父親ももうさくなくいやうと思つて、息子を衣籠へ入れて、野らへつれて行きました。野らへ行きますといふと、父親は息子を衣籠から出して、新たに掘り起した畝の上へ坐らせて置き

ました。

息子がさういふ風に坐つて居ますといふと何と不思議ではありませんか、山の上から、實に大きい巨男が下りて來たのです。

父親はそれを見ると、息子を感して、大人しくさせようと思ひましたので、

「あれ、あの大きい人を御覽、彼の人がお前を流つて行つちまうのだよ」と、云ひました。

巨男の脚は恐しく長かつたのですから、たつた二歩で、小兒のゐた畝のところへやつて來ました。で、二本指で小兒を摘みあげて、ちつと見てゐたのですが、やがて、小兒を摘んだまゝで、スタ／＼行つてしまひました。傍で見てるながら父親は巨男の様子を見て、恐しさに全く慄へあがつてしまつて、あつといふ聲さへ出し得なかつた程でした。で、巨男の影が見えなくなつてしまひますといふと、もう自分の息子は自分のところへ歸つて來、ことはなく、それが自分の子の見納めだつたのだと思つたのです。

(二)

巨男はその小人島の小兒を自分の家へつれて行つて、食物を小兒に與へたのですが、それが實に不思議な食べ物で、その一寸ほしの小兒が、身體も、力量も、巨男風に、すんずん大きくなり、すん／＼強くなつて行くのでした。それから二年経ちますと、巨男は小兒を森へつれて行つて、

「彼の木の枝を折つて、お前の鞭をこしらへなさい」と、云ひました。

けれども、小兒は、枝どころか、その若木を根ごと引き抜いてしまひました。

然し、巨男はまだそれでは満足しませんでした。巨男は小兒を又自分の家へつれて歸つて、もう二年置きましたが、二年目の終になりますと、小兒は森の中の大きい古い樫の樹を、やす／＼と根こぎにすることができるよう、力が強くなつてしまつたのです。

五五

けました。

小兒はもうその時は小兒ではなくつて、若い巨男になつてゐたのですが、その邊にあつた一番太い樹の幹を根ごと引っこ抜きました。それは、その若い巨男に取つては何でもない事であつたのです。

『もう、それで宜しい。お前の修業はこれで結構だ』

巨男はさう云ひまして、若い男を元摘みあげた野らへと歸らせました。

(三)

父親は、その時勦を持つて、野を劬いてゐましたので、若い巨男はその傍へ行つて、

『さア、お父さん、あなたの息子がこんな大きい男になつたのを見てください』と、云ひました。

父親は、餘り大きい男から、聲をかけられたので、たゞもう慄へあがつてしまつて、

『いゝや、お前さんはわしの息子ぢやアない。わしはお前さんなんぞに用はない。何うぞあつちへ行つてください』と云ひました。

『私はほんとにあなたの息ですよ。さア、あなたの仕事をませう。地面を劬くことなんざア、あなたよりすつとうまいんですぜ』と、若い巨男は云ひました。

『いゝや、飛んでもないことです。お前さんがわしの息子だなんて、途方もないことです。お前さんに何うして勦が扱へるものですか。さア、あつちへ行つてください』と、父親は云ひました。

さうは云つたもの、父親は何分その巨男の若者が恐かつたので、勦から手を放して、側へ寄つてしまつたのです。すると、若者は勦の取柄をつかまへて、ぐつと押しつけるといふと、勦の齒が地面へぐうつと深く潜り込みました。それを見ると、父親は、聲を揚げて、

『地面を劬くのなら、そんなに力を入れるには及ばないよ。それぢやア、反つてうまく勦けはしない』と、云ひました。

若者は、父親の言葉などはてんで耳へも入れない風で、馬を勦から解き放し、自分一人で勦を引張りながら、父親にかう云ひました。

『お父さん、あなたは家へ歸つて、お母さんに晩飯を澤山支



度して置くやうに云つて下さい。私は真きにこの地面を勵いてしまつて、歸りますから」

父親は家へ歸つて、母親に若者の言葉を傳へて、晩飯の支度にかゝらせたのですが、若者の方は、見るくうちに、八段程の地面をすつかり勵いてしまひました。それから、若者は肥を自分の身體へ結び付け、一遍に肥を二つ引摺つて、畝をすつかりつけてしまひました。で、さういふ風に仕事を終つてしまふといふと、森へ入つて行つて、大きい樫の樹を二本を根こぎにして、一本づつ肩へ載せて、森を出て来て、その樹の一本の方へは勳をぶら下げ、もう一本の方へは馬をぶら下げ、それでさういふ荷が藁束でもあつたかのやうに、いかにも軽々と引つ擔いで、家へと歸つて行きました。

(四)

家の前の廣場へ入つて行きますといふと、母親は夫を見て「まア、入つて来たあの恐しい巨男は何者なんでしょうか？」と大聲で聞きました。

「あれが家の伴なんだよ」と、父親の農夫が云ひました。「いゝえ、そんなことがあるものですか。家の息はもう生き



てる筈はありませんよ。あんな息を持つたことはありません。家の息はほんとに小さい兒でした」

と母親は、云つて近寄つて来る若い巨男に向つては、「行つてしまつておくれ。私たちはお前さんに用はないんだから」と、嗚鳴りました。

若者は返辭をせずに、馬を厩へつれて行き燕麥と干草を澤山にやつて、心持よく休ませました。さて、さうして置いてから、家へ入つて行つて、腰架にかけて、

「お母さん、晩飯はもうできましたか？ 大變腹がへつて居るんですが」と、云ひました。

「え」と、母親は云つて、兩親ならば一週間振り位に結構當る分量の入つてゐる圖抜けて大きい皿を二つ持つて来て、それを息子の前へ置きました。若者は見る間にそれをみんな食べてしまつて、もつとないかとききました。

「いゝえ、もうそれで家にある食べ物はあるんだよ」と、母親は云ひました。

「これちやアほんの味をみただけといふものですよ。何でもいゝからもう少し眞はなければしやうがありませんよ」と、

若者は云ひました。

母親はその大きい若者を恐がつたので、いやとは云ひ得ないで、肉汁の一杯入つてゐる大きい鍋を火へかけて、それが沸き立つと、息子の前へ持つて来ました。

「あ、これでも何もありませんね」と、息子は云つて、麵包を割つて、汁の中へはふり込んで、べろりとみんな食べてしまひました。で、やがて、息子はかう云ひました。

「お父さん、こんな家配ちやア、家にやアとても私の食べるだけのものではありませんね。だから、私の膝の上で折ることができない程強い鐵の棒を見つけて来てくだされば、私は家を出て行つて、あなたがたに厄介をかけずに、一人で旅をします。」

父親の農夫は、その大きい若者が出て行つてくれるといふのを非常に喜んで、早速、荷馬車へ馬を二匹つけて、村の鍛冶屋へ行つて、その二匹の馬でもやうく挽いて來られるやうな素的に長くつて、太い鐵の棒を持つて來ました。若者はその太い鐵の棒をつかんで膝へ當てたのですが、忽ちボキリと音がして、その太い鐵の棒が古る木でもあるかのやうに

真中から折れてしまひ、若者は、それを投げ出してしまひました。

そこで、父親は荷馬車へ馬を四匹つけて、前のよりすつと強くすつと太い鐵の棒を持つて來ました。今度のは四匹の馬でやつと挽いて來られる位重いのでした。それでも、息子はそれを膝に當てるや否や、何の苦もなくまづ二つに折つてしまつてかう云ひました。

「お父さん、こんなものぢやア何の役にも立ちませんよ。何うぞ、もう一遍荷馬車に馬をつけて、もう少しいゝ、もう少し強いやつを持つて來てください。」

それで、父親は今度は荷馬車に馬を八匹つけて、その八匹でもやう／＼挽いて來る位の素的減法に大きい鐵の棒を持つて來たのですが、息子はその鐵の棒を手取るや否や、直ぐにボキリと二つに折つてしまひました。そこで、息子はかう云ひました。

「お父さん、私の欲しいと思ふ鐵の棒を見付けることはあなたにはとてもできないことが分りましたよ。もう宜しいから、私は出て行きます。」



(五)

若者は家を出で、少し行つたところで、或る町へ來ました。其所には一軒の鍛冶屋がありました。主人はひどく怒張り屋でして、何でも出すのは大嫌ひで、備けたものは残らず自分の懐へ入れるといふたちの男でした。若者はその家へ入つて行つて、奉公人はいらぬかと、主人にきゝました。

「あゝ、こいつはきつと力のある恰憚な男だな。鍛冶屋には持つて來いといふ太い腕をもつて居やがる。善く働くに違ひないわい」と、鍛冶屋の主人は心の内で思ひましたので、「給金はいくらだといふのかね」と、若者にきゝました。

「一文もいりませんよ。唯、あなたが二週間目に、あなたが他の者に給金を渡しなざる時に、私にあなたの頭を二度なぐらせて下さりさへすればいゝんです」と、若者は答へました。

怒張りの鍛冶屋は、給金なしでこんな若者が使へるといふのなら、非常なとくになると大喜びでした。頭を二つなぐられるなんぞは何でもない事で、それは此方からもなぐり返せばいゝのであつて、直ぐ埋め合せのつく事なのだと思つたのです。その鍛冶屋は腕の力の強い男でしたから、その若者の

非常に大きい身體を見ても、少しも恐れはしませんでした。

次の朝になりますと、新しい奉公人のその若者は仕事にかかることになりました。主人がまづかに灼けた鐵を鐵床の上へ載せまゝといふと、若者は鐵をうち下したのですが、唯つた一打で鐵はまるで何千もの粉に碎けてしまひ、鐵床は地面へ深くめり込んでしまつて、それを引き上げることはとてもできなくなつてしまひました。鍛冶屋はひどく怒りました。

「若い、お前のやうな奴は家で使う譯にやアいかねえ。こんな亂暴な鐵の使ひ方ぢやア、役に立つどころか、まるでぶちこぼした。出て行きなさい。給金は残らなければいゝのか？」と、嗚りました。

「給金は一文もいらないよ。唯お前を一つなぐりさへすればそれでいゝのだ。唯それだけなんだ。」

若者は、かういふが早い、足を擧げて、ボンと一つ蹴りまゝと、鍛冶屋の身體がヒュッと空へ飛び上つて、大きい干草塚を三つ越してむかうへと、けし飛んでしまひました。そこで、若者は四邊にあつた一番強い鐵の棒を取つて、それを杖に突いて、出かけました。(つゞく)



金持ちと貧乏人

西川 勉

昔、神様が人間の間に混つて、地上を歩いてゐた頃のことです。或る時、非常に疲れました。そして、日が暮れたのに宿さへ見付けることが出来ませんでした。漸くのこと、行手に、丁度向ひ合つて建つてゐる二軒の家が見えました。一軒は大きくて、立派な、金持ちの家でした。もう一軒は、小さくて、みすほらしい、貧乏人の家でした。

「金持ちの人には、大して迷惑なことでもないだらうから、あの家に泊めて貰はう。」

神様はかう考へたので、金持ちの家の扉を叩きました。その音を聞いて、金持ちの主人が窓を開けました。すると、見たことのない旅人が立つてゐるものですから、何うして呉れと云ふのか、と訊ねて見ました。

「二晩お宿を貸して下さい。」と、神様は申しました。

金持ちの主人は旅人の頭から足の先まで眺めました。神様はみすほらしい着物を着てゐたのです。それを見て、主人は頭を振つて、かう云ひました。

「お前を泊めてやることは出来ない。俺の家には貴重な寶物が澤山あるんだ。玄關へ来て頼む人間を、誰でも泊めてやつたりなんかしてゐると、直ぐ俺自身が乞食になつてしまふに違ひない。まあ、他の家へ行つて頼んで見るが好い。」

かう云つて窓を閉めてしまつたので、神様は表に立つた儘置いてきほりにされてしまひました。

其處で、立派な家を後にし、眞向ふのみすほらしい家へ行つて見ました。すると、未だ扉を叩かうともしないうちから、貧乏人が出て来て、扉を開けて、見たこともない旅人を親切に家の中へ呼び込みました。

「二晩泊つていらつしやい、もう眞暗になつてゐます。これから先き一足だつて歩けるものぢやありません。」と、貧乏人が云ひました。

その言葉が神様には嬉しかつたので、家の中へはひりました。おかみさんも快く出迎へて、お樂になさるやうにと云つて呉れました。

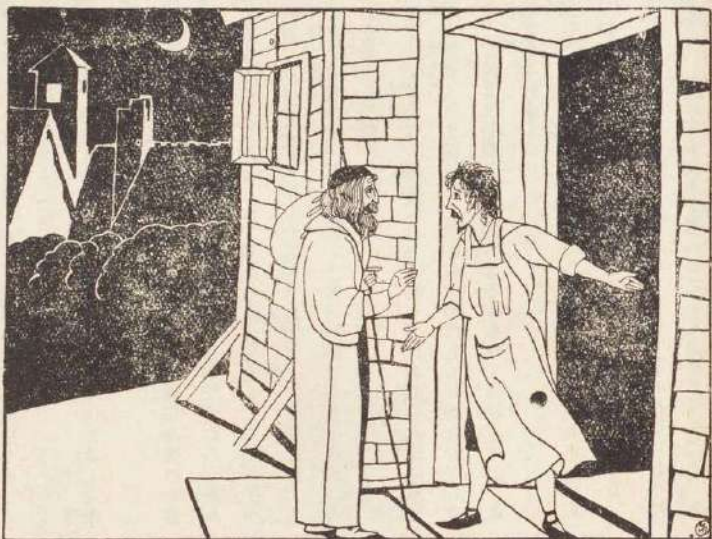
「澤山はございませんが、あり合せのものなら、何なりと、心から御馳走いたします。」

かうも云つて呉れました。

それから、おかみさんは馬鈴薯を焼きました。そして、お客様に少々お乳を上げたといふので、料理の合間を見て、山羊の乳を搾りました。お膳立が出来た時、神様も食卓について、皆と一緒に食べました。僅かな御馳走でも、満足して、平和に、お相伴したものですから、大變旨かつたのです。

御飲が済んで、寝る時が来ると、おかみさんは夫に向つて窃つと嘖きました。

「ねえ、あなた。今夜、わたし達は藁の寢床を拵へて、其處で休みませう。旅のお客さんは、一日ちう歩いて来て、疲れ



てゐらつしやるのだから、わたし達のいつもの寢床でゆつくりとお休みなさるやうにね。」

「さうとも、さうとも、一寸、さうして貰ふやうに話して来ませう。」と、夫は云ひました。

然しながら、神様は初め中々この親切な申出でを受けませんでした。けれど餘り熱心に勧められるものですから、斷ることが出来なくなりました。貧乏な家の主人と、そのおかみさんは、かういふ按排で、菓の寢床で眠ることになりました。翌朝、神様が起きて、貧しい夫婦と一緒に朝御飯を食べて別れを告げて出懸ける時に、

「わたしが貧乏で、困つてゐると考へて、お前さん達は大變親切に情深くして呉れましたから、わたしもお禮をいたしませう。三度までお前さん達の希望をかなへて上げよう。」と神様が仰有いました。

「別に大それた希望など持つてゐる譯ではございませぬ。まあ、わたし共二人が生きてゐる間ちうだけ、丈夫で、強くて、そして始終、その日その日の粗末な食物と着物位間に合へば結構です。第三の希望など考へることも出来ませぬ」と、夫

が云ひました。

「この古い家の替りに、新しい家が欲しいとは思はないか。」と、神様が訊ねられました。

「はい、はい、この三つの希望がかないますことなら、外には何の希望もありません。」

二人が叫びました。

すると、神様は古い家を新しい家に建て變へて、外の希望も必ずかなへてやると約束して呉れて、貧しい夫婦の無事を祈つて、出懸けて行かれました。

晝になつて、立派な家の主人が、ひよつこ窓から覗いてお向ふの、古い家が前に建つてゐる場所に、紅い屋根の、小さつぱりした、新しい小屋が建つてゐるのを見て、喫驚しました。暫くちつとそれを眺めてゐて、たうとう、奥様を呼んで、かう云ひました。

「こりや一體何うしたことだ？ 昨日は彼方に壞れ懸けたやうな小屋が建つてゐたのに、今日は立派な新しい小屋になつてゐる。一と走り走つて行つて、何うした譯か訊ねて来い。」奥様は貧しい人の家へ訊ねに行きました。すると、

ああ、知つていさへしたら、

こんなことにならなかつたのに。あの見たことのない旅人は、初め家へ来たんだ。そして、俺に一晚泊めて呉れと云つたのを、斷つてしまつたんだ。」と主人は叫びました。

「よござんすよ。さあ、急いで、馬に乗つて、追つ駈けていらつしやい。若し追付くことが出来さへしましたら、あなたの方に願つて、あなたも三つの希望をかなへて貰へるぢやありませんか。」

金持ちの主人は、この耳奇りな忠告を容れて、馬に鞍をつけて、旅人の後を追つ駈けました。そして、漸くのこと

「昨夜、みすほらしい旅人が来て、一晚泊めて呉れと申しました。そして、今朝、出懸けて行く時に、三つの希望を述べると仰有るので。わたし達は何時も丈夫でゐたいといふことと、その日その日の食物に不自由しないやうにと願つたら、そればかりでなく、古い家より、新しい家の方が好からうと仰有つて、この小屋を建て呉れたのです。」これを聞いて、金持ちの奥様は急いで走つて歸つて、聞いて来た一伍始終を主人に話しました。

「俺の身體が八裂になつて、粉々になつちまへば好い。」



で、追いついて、至極丁寧に、親切らしく、話し懸けました。そして、前の晩、お宿申さなんだことを悪しからず思召して頂きたいと、お詫びを申し上げて、かう云ひました。

「わたしが一寸扉口の鍵を探してゐたら、その間に、あなたが行つちまひなすつたのですから、どうぞ、お氣に懸けないやうになすつて下さい。もう一度わたし共の前をお通りの節は、きつと、お宿をいたしますから。」

「はい、再びお宅の前を通るやうなことがございましたら、さういふことにねがひませう。」と、神様が答へました。

それから、金持ちの主人は、隣の人と同じやうに、三つの希望を許して貰へないでせうかと、お願ひして見ました。

「快く許して上げよう。けれど、それがお前の爲めにはならないだらう。お前は、何もこの上望みなんかしない筈だ。」

金持ちの家の主人は、若し希望をかなへて貰へることが判つてゐたら、何か自分に幸運が向いて来るやうなことを直ぐに考へ出すことが出来ますと、答へました。

「よろしい、馬に乗つて歸つて行け。お前の三つの希望が何であらうとかなへて上げよう。」と、神様が答へられました。

「未だ二つの希望が残つてゐるんだ。」

かう思つて、自分の心を慰めてゐました。

かんかん頭から照りつける焼けるやうな眞晝の日を浴びて熱い砂の上を歩いてゐると、熱の爲めに氣がられて、疲れてしまひました。鞍が身體を背後へ引き戻すやうで、今にも落ちてさうに思はれ、何の希望をかなへて貰つたら好いか、はつきり決めることが出来ませんでした。

「世界ぢうの金と寶をみんな自分のものにする希望がかなへられたら、何うして使つたら好いだらう。」

彼は、かう獨語を云ひました。

「金と寶と、何方にしたものかなあ。待て、待て、二つの希望をかなへて貰つたら、もう後には、希望をするやうなことは一つも残らないやうに、とくと思案して見よう。」

かう考へて、彼は嘆息をついて、云ひました。

「若し、俺が昔話にあるパバリヤの百姓のやうなことになるつちや、つまらない。彼奴は三つの希望を述べると云はれた時に、第一にはビールを一本飲みたいと云つたさうな。次には飲めるだけ飲みたいと云つて、三度目には一樽空けてしまひ

金持ちの家の主人は目的を達したものだから、何の希望をかなへて貰はうかと、深く考へ込みながら、馬に乗つて家へ歸りました。彼がこんなことを考へてゐる間に、手綱が緩んでしまつて、馬がはねたり蹄つたりして、たうとう、考へてゐたことが減茶減茶になつてしまつて、もう一度、考へを繼めることも出来ないやうな事になりました。彼は馬を打つて、かう云ひました。

「ベス、靜かにしろ。」

然し、かう云つて叱つても、馬は躍り上つたり、後足で突つ立つたりして、たうとう、彼は馬の背から投げ出されさうになりました。お終には、彼も怒つて、嗚鳴り立てました。

「何といふことだ。お前の首なんか折れてしまへ。わたしの希望だ。」かう云ふと、忽ち馬が倒れて死んでしまひました。

これで第一の希望がかなへられた譯です。ところが、この男は生れつき貪慾な人間でしたから、鞍や手綱を棄てる事は出来ませんでした。革紐を切つて、背中に背負つて、家へ歩いて歸る支度をしました。もう歩いて歸るより外に仕方がなかつたのです。

たいと云つた。そして、その度毎に、希望がかなへられたと思つてゐたんだ。然し、後になつて見ると、何の役にも立たないことが判つたといふ話だ。俺もそんな風になつちまつてはつまらないぞ。」

すると、間もなく、自分の妻が、涼しい部屋に坐つて、何か旨いものを食べてゐて、何んなに樂々してゐるだらうかといふ考へが、ひよいと浮びました。さあ、妻と一緒にその部屋にゐないことが、癪に觸つて、腹が立つて堪らなくなつてその爲めに、何ういふことになるかといふことさへ、碌々考へても見ないで、かう叫びました。

「ああ、この重い鞍が俺の背中から知らぬ間に飛んで行つて妻の奴め、その上に坐つて、動けないやうになつてゐたらなあ。俺の希望だ。」

かう云つてしまふと、鞍と手綱がなくなつてしまつた。其處で第二の希望がかなへられたことに氣がつかしました。

このことを考へると、頭がぼつとなつて、家へ駈けて歸りました。獨り部屋の中に坐つて、最後の希望には何か大いことを考へ出さうと思つたから、急いで家へ駈けて行つたんです。



然し、部屋の扉を開けて見ると、奥様が、鞍の上に喰ひ付いて、降りることが出来ないと云つて、嘔き悲んでゐました。「すつかり安心して居れ。俺は世界ぢうの金を自分のものにする事が出来るんだ。お前が何時までも、さうして我慢してゐさへしたら、俺の希望はかなへて貰へるんだ。」と、金持ちの主人が云ひました。

「だけれど、あなたは何と云ふ馬鹿なんでせう！ わたしが何時までもこの鞍の上に坐つてゐなきやならないんだつたら世界ぢうの金が家へ集つたつて、何の彼に立ちませう。いえ、いえ、わたしが鞍からもう一度降りられるやうに希望を立てて下さい。」と、奥様が大そう腹を立てました。

主人も、其處で、仕方がないから、嫌々ながら、奥様が自由になつて、鞍から離れて動けるやうにと、第三の希望を述べました。その希望は直ぐかなへてくれました。

金持ちの我儘者の主人は、かういふ譯で、三つの希望から何の徳もしないで、つまり怒つて、腹を立てて、苦んで、奥様から叱言を云はれたきりでした。貧乏な夫婦は信心深く、生涯に暮しましたとき。

て心配し切つてゐましたので、お城の庭へ出てはお父様の事を思つて泣いてゐました。

と、そこへ一人のお爺さんが出て来ました。そして、なぜそんなに悲しがつてゐるのかと訊きました。王子たちはお父様が死にさうなのに、お救ひすることが出来ないで、悲しんでゐるのだと話しました。

すると、お爺さんが、「私は助かる法を一つ知つてゐる。命の水」を飲めばたちどころに治つてしまふのだが、それを探すが難しいのだ。」といひました。

「では、私がすぐに行つて探して来ます。」と、いつたのは一番兄さんの王子でした。兄さんの王子は病氣のお父様のところへ行きました。そして、お父様をお救ひするにはこれより外に方法がありませんからといつて、「命の水」を探し

に行くおゆるしを願ひました。「いけない、危いことだ。それ位なら私が死んだ方がいゝ。」と、王様は仰ひました。

でも、王子がどうしても行くといつてきかないので、たうとう王様もおゆるしになりました。「うまく水を持つ。来れば、お父様のお氣に入つて、お父様の跡を繼ぐことが出来る。」と、王子は思つたのでした。

そこで、王子は出立しましたが、馬に乗つて途中まで行くと、小人が道端に立つてゐるのに出遇ひました。

「そんなに急いで何處へ行くのです。」と小人が大きな聲を出しました。

「馬鹿のチビ助！ お前なんぞに用はない。」

王子は威張つていひました。そしてどん／＼行つてしまひました。小人は大變に怒つて、悪い呪禁をしま

命の水

齋藤佐次郎



昔、あるところに、王様がおるでになりましたが、大層重い御病氣で、もうお命も危いほどでした。王様には三人の王子がありました。王子たちはみんなお父様のことを思つ

した。
と、間もなく、王子は山の中の路間にさしかかりましたが、馬を進めれば進める程、徑がせまくなつて、もう一足も先へ進むことが出来なくなつてしまひました。王子の馬は前へ進むことも出来ず、といつて王子が馬から降りることも出来ないうで、全く困つてしまひました。

二

御病氣の王様は、長い間王子の歸り



を待つておりましたが、たうとう戻つて来ませんでした。そこで、二番目の王子が、
「お父様、「命の水」をさがしに私をやつて下さい。」
と、おねがひしました。もし兄さんが死んだのなら、自分が跡とりになれると思つたからです。
王様は、最初は行つてはいけないうつてお聞き入れになりませんでした。したが、おしまひにはたうとうお許しに

70
なりました。そこで二番目の王子も、兄さんと同じ道を通つて出かけますと、同じ小人に出遇ひました。小人はそんなに急いで何處へ行くのかとききました。
「ちんちくりんめ、お前なんぞに用はない。」
と、王子はいひました。
そして、後も見ずに、どん／＼行つてしまひました。
しかし、小人は王子に呪をかけたの

で、この王子も兄さんと同じやうに狭い路間に迷ひこんで、後へ退くことも進むことも、出来なくなつてしまひました。

傲慢な二人の王子は、かうした目に出あつてしまつたのです。

さて、二番目の王子も行つたきり戻つて来ないので、末の王子が「命の水」をとりに行きたいとおねがひしましたので、王様はたうとう此の王子も行かせることになりました。

末の王子は小人に出遇ひました。小人は何處へ急いで行くのかとき、ましたので、王子は立止つて、

「私がお父様が御病氣なので、「命の水」を探しに行くのです。」と、いひました。

「何處にそれがあるのか知つてゐるかね。」

「いゝえ。」と王子はいひました。

「お前さんは私に氣持ちよく口をきい



てくれる。兄さん達のやうに傲慢でな

71
どうしたら「命の水」が探出せるか教へてあげよう。それはね、魔法にかゝつたお城の庭の中の泉から湧出てるのだよ。けれども、私が鐵の鞭とパンを二つお前さんにやらなければ、それを持つて來ることが出来ない。その鞭とお城の鐵の門を三度おたゞき、すると、それがすぐに開く。中へ入つて行くと、二匹の獅子が大きな口を開けてゐるけれど、パンを一つづつやればおとなしくなつてしまふ。しかし、お前さんは十二時を打つ前に急いで「命の水」を取つて來なくていけない。さもないと、お城の門が閉つて、中へ閉ぢこめられてしまふから。」
王子は小人にお禮をいつて、鞭とパンをもらつて、また出立しました。
お城へついて見ると、何もかも小人のいつた通りでした。三度たゞくと門は開き、ました。それからパンをやつて獅子をおとなしくさせて、王子はお



④

城へ入つて行きました。

大きな廣間の中には、大勢の魔法にかゝつてゐる王女達がゐましたので、一々指から魔法の指輪を抜いてやりました。王子は、その時、王女達の傍にあつた劔とパンを拾ひとりました。

次の部屋へ行くと、きれいなお姫様がゐました。お姫様は王子の来てくれたことを大層喜んで、王子のおかけで救はれたから、自分の國をみんなあけるといひました。それから一年の内に歸つて来てくれれば、王子と結婚したいといひました。それからお姫様は、魔法の水のある泉を教へてくれました。

そして時計が十二時を打つ前にお城を出る様に急ぎなさいと云ひました。

そこで、王子がさん／＼と奥へ行きますと、きれいな寢床がありましたので、そこで一と憩みしようと思つて、その上に横になりますと、そのまゝぐ

つすり寝込んでしまひました。

王子が目覺した時には、十二時十五分前でした。王子はびつくりして飛立つて、泉へとんで行きました。そして、傍にころがつてゐた蓋に水を汲んで、急いで駆け出しました。

王子が鐵の門についた丁度その時に時計が十二時を打つたので、門は忽ち閉つて、王子は踵を少し踏みとられたほどでした。

王子は「命の水」がとれたので、大喜びで歸りの旅につきました。が小人のゐるところをまた通ると、小人は王子がお城から持つて来た劔とパンとを見

て、
「それは、お前さんに大變役にたつよ。お前さんはその劔で敵を打破ることが出来るし、そのパンはどんなに食べても、無くなることはない。」と、いひました。
しかし、王子は兄さんをつれずにた

だ一人で家へ歸るのは悲しいので、「親切な小人さん、兄さん達は何處にゐるか教へて下さい。兄さん達は私が出かける前に「命の水」を探しに行きました。が、それつきり歸つて来ないのです。」といひました。

「兄さんは二人とも、狭い山の谷間にしつかりと挟まれてゐるんだよ。あんまり威張つたので、私が呪をかけてやつたのだよ」と、小人がいひました。

そこで王子は、兄さん達をゆるして下さいと熱心にねがひましたので、たうとう小人もゆるしてくれました。しかし、小人は、

「兄さん達に油断をしてはいけません。心の悪い人達だから。」といひました。

王子は、二人の兄さんの呪がとけて戻つて来たのを見ると、大層喜んで、これまでのことをすつかり話しました。どういふ風にして自分が「命の水」を探し出して、蓋へ一ぱいそれを持つて

來ることが出来たか話したのです。それから、どうして、きれいなお姫様を助けることが出来たか、そのお姫様は一年の間待つて、自分と結婚したいといつてゐる事や、さうなると、立派な國の王子になれる事なども話したのです。

それから三人は一しよになつて馬を進めて行きますと、飢饉と戦争でひどく困つてゐる國へ差しかかりました。その國の王様は全く亡るより外ないとあきらめてゐるほど、ひどく困つてゐたのでした。

末の王子は、その國の王様のところへ行つて、持つてゐたパンをあけるとそれが國中の人をお腹一ぱいにさせる事が出来ました。王子はまた持つてゐた劔もあけたので、王様はそれをもつて敵を全滅させることが出来て、再び平和に暮すことが出来ました。

しかし、三人の王子は戦争と飢饉で

ひどく困つてゐるもう二つの國を通つたので、その度にも末の王子はその國の王様に劔とパンをあけました。王子はかうして三ヶ國を救つたのでした。

それから後、王子たちは船に乗つて海を渡りましたが航海の間に、二人の兄さんは、こつそり話し合ひました。「一弟は「命の水」を探し出して来たが僕たちは出来なかつた。だからお父様は僕等がほしがつてゐる國を弟に譲つてしまふ。弟は僕たちの仕合せを一人で持つて行つてしまふのだ。」

兄さん達は口惜しくつて堪らなくなつて、末の王子を無いものにしてしまはうと決心しました。そこで、兄さん達は末の王子の眠るのを待つて、王子が持つて来た蓋から「命の水」を盗んで、代りに鹽水を一ぱい入れて置きました。

家へ着くと、すぐに末の王子はお父様の身體がよくなるやうにと思つて、

盃の水を持つて行きました。ところが、鹽水だったので、二三滴も飲むと忽ちにお父様の御病氣は前よりも一層悪くなつてしまひました。

お父様が切りと苦しがつてゐるところへ、兄さんの王子が入つて来て、弟はお父様を毒殺しようとしたのです。私達こそ、本當の「命の水」を持つて來ましたといつて、お父様に飲ませました。

お父様は、それを飲むと、すぐによくなつて、忽ちにして、若い時のやうに丈夫に元氣になつておしまひになりました。

そこで、兄さん達は末の王子のとこへ行つて、さんへに囁りました。「命の水」を見つけて來たのはお前だつた。苦勞はお前が一人で背負つて、お禮はこつちでみんな貰つてしまつた。お前はもつとく、お怜悯にならなければ駄目だよ。目を大きく開き。僕

「狩人、お前はどうかしたの。」と、王子がききました。

「私はあなた様にお話ししなければならぬのでございます。でも、それが出來ないのです。」と、狩人が答へました。

「お言ひよ、どんなことでもゆるすから。」と、王子はいひました。

「あ、私はあなた様を鐵砲で撃たなければならぬのでございます。それが王様の御命令なのでございます。」と、狩人はいひました。

王子はびつくりしました。「私を殺さずに助けておくれ。お前の着物を私にくれないか。代りに私の着物をあげるから。」

「私は喜んでさういたします。私は決してあなた様を撃つことは出来ません。と、狩人はいひました。そこで二人は着物を換へて、狩人は家へ歸つて行き、王子は森の中へささまひ去りま

たちはお前が眠つてゐる間に盗んだのだよ。一年たつと、僕たちの中の一人が行つて、あのきれいなお姫様をつれて來てしまふ。しかし、この事を誰にもいつてはいけません。お父様はお前が何といつたつて信じはしないが、もし一言でも口を迂らせれば、お前の命は無くなつてしまふから。」かういつて、嘲つたのでした。

三

さて、年をとつた王様は、末の王子が御自分の命をとらうとしたのだと思つて、大層お怒りになつて、御殿の役人をお集めになつて御相談になつた結果、末の王子をこつそり殺してしまはうとなさいました。

ある日のこと、そんな事とは夢にも知らない末の王子は、狩に出ようしますと、王様のおとももの狩人が、王子と一しよに行くやうにと御命令をうけました。

した。

それから暫くたちますと、王様のところへ末の王子にあけてくれといつて、黄金と寶石を三臺の車に一ぱい乗せて持つて來ました。これは末の王子の劍と不思議なパンで救はれた國の王様たちが、お禮のしるしだといつて贈つて來たものでした。

その時、お年をとつた王様はふと思ひました。「もし、末の王子が本當は罪がなかつたら、どうしたらいいだらう。」さう思ふと、たまらなくなつて家來に仰ひました。

「あ、王子が生きてさへゐてくれたらばなア。私は彼を殺してしまへといひつた。何てなさない事をしてしまつたのだらう。」すると、お傍にゐたおとももの狩人が、王子様は生きておるので、ございませす。私は陛下の命令通りにいたすと

狩人が、悲しさうな顔をしてゐるの



が出来なかつたのでございます。」といつて、すつかりの話を王様に申し上げました。

狩人の話を聞いて、王様は大層御安心になつて、王子にすぐと戻つて來るやうにと國中へお布令をお出しになりました。

四

お話し變つて、お姫様の方で、御家來にいひつて、お城へ通じる路を光輝いた黄金でおこしらへになりました。それからまた御家來にいひつて、その路の上を眞直に歩いて來た人は本當のお姫様なのだから、お城の中へ入れるやうにとお云つけになりました。しかし、路の上を眞直に歩かないでどつちでも端の方を歩く人は、ほんたうのお姫様ではないから、お城へ入れてはいけなと仰ひました。丁度、その年が終りに近づいた時に一番兄さんの王子はお姫様のところへ



お城の門まで行き着いた時、門はヒラリと開かれて、お姫様が喜んで王子を迎へました。

王子とお姫様との結婚式は、それから直きに挙げられました。みんな大層な喜びでした。

結婚の式もすんだ時、王子は、お姫様から國もとのお父様が、王子にあひたがつて、是非もう一度歸つて来てもらひたがつてゐる事を聞きました。

そこで、王子はお父様のところへ戻つて行つて、今までのことをすつかり話しました。兄さん達が、お父様を欺いた事や、無理に自分に口を開かせなかつた事などを、すつかり話したのでした。

お父さまの王様は、二人の兄さんを罰しようとしたが、兄さん達は船に乗つて海をわたつてどこかへ行つてしまひました。そして、もうそれつきり戻つて来ませんでした。(をほり)



急いで行つて、自分がお婿さんになつて、その國の王様にならうと思つて急いで出かけて行きましたが、いよいよお城の近くまで来て黄金の路を見た時それを踏むのはもつたないと考へました。

そこで王子は、わきへそれ、路の右側を歩きました。しかし、王子がお城の門まで行くと、お城の人達はこの王子は本當のお婿さんでないといつて追返しました。

それから間もなく、二番目の王子が出かけて行きましたが、例の黄金の路を見た時、矢張りその上を馬で歩いてはもつたないと考へました。そこでこの王子も側へそれ、路の左側を行きました。

しかし、王子がお城の門まで行き着いた時、矢張りほんたうのお婿様ではないといはれて、兄さん同様追ひ返されてしまひました。

その年もいよいよ終りになつた時、

末の王子は森の中から出て来ました。そして、お姫様にあつて、これまでの悲しいことをすつかり忘れようと思つて馬を進めて来ました。王子はたやお姫様のことはかりを考へてゐました。お姫様と一しよに暮すことばかりを考へて進んで行つたのでした。ですから王子の眼には黄金の路も眼に入りませんでした。

王子の馬は路の真中を真直に進んで行きました。



何でも知ってる學者

水谷 まさる

七八

むかし、あるところに、クラブといふ名前の百姓が住んでました。クラブといふのは蟹のことです。妙な名前ですが、日本ならまづ蟹吉とか蟹太郎とでもいふんでせう。

ある日のこと、彼は薪を賣らうと思ひたちました。そこで、薪を荷車に積んで、あゝどうかして、自分も學者になりたいなあと思ひました。

そこで、彼は學者に向つて、自分でも學者になれるものかどうか、訊きにくかつたのですが、勇氣を出して訊いてみました。

「大丈夫、造作なくなるさ」と、學者が答へました。

「造作なくなるつて、どうすればいゝんですか。」

「まづ第一に、ABCアブック（日本で云へば繪を入れてやさ

二匹の牛に曳かして、町へまゐりました。町では買手がちぎに見つかりました。買手といふのは、見たところからして、大そう偉い學者にちがひないと思はれる人でした。この人は彼の薪を四圓で買つてくれました。ところで、この人が四圓のお錢を勘定してゐる間に、彼は戸口から家の中を覗いたのでしたが、眼にうつたのは、この家の人たちがさも楽しさうに、何か食べたり飲んだりしてゐる有様でした。

それを見た彼は、學者になればあんなに楽しい暮が出来しく覺えられるやうにしてある「いろは帖」です」を買ふのさ。これも、口繪は鶏がコケコツコウと啼いてゐるのを買ふのさ。それから、第二に、お前の荷車と二匹の牛を賣つてお錢に換へて、それでもつて立派な服を買ふのだ。まだそのほか、學者らしく見えるために必要なものを買ふのだ。最後に（私は何でも知つてゐる學者です」と書いた札を、お前家の戸に打ちつけるのだ。」

彼はこの學者の言葉聞いて、大そう喜びました。村へ歸

つて来て、さつそくその言葉どほりにしました。

さうかうするうちに、一つの事件が持ちあがりました。それは、あるお金持の男爵が、お錢を盗まれたのでした。すると誰かが、男爵に向つて、これこれの村に「何でも知つてゐる學者」が住んでるが、この人ならきつとお錢のありかを知つてゐるにちがひないと云つて知らせました。

男爵は彼のことを聞くとすぐさま、馬を馬車につなぐやうに命じました。そして、その馬車に乗つて、彼の住んでゐる



七九



村へ、大急ぎでやつてまゐりました。男爵は彼に逢つて訊ねました。

「何でも知つてゐる學者はあなたですか。」

「さうだ。」

「では、あなたをお連れ申したいのです。そしてお錢を探して下さい。」

「よろしい、だが私の妻のガーツルドも、一しよに連れて行かなくちやならないんだが……」

男爵はそれを承知しました。そこで三人が馬車に乗りました。男爵は自分の邸まで、いつさんに馬車を走らせました。

三人が邸につくと、立派な御馳走が用意してありました。

「どうぞお席におつき下さい。」と云はれて、彼は妻と一しよに食卓の下の方へつきました。

第一の召使が、おいしいスープのお皿を持って入つて来た時、彼は妻をつついて云ひました。

「あの男が第一だ！」

それは、あの男が一ばん初めに肉を持って来たといふ意味なのでした。けれど、召使はそれを取り違へて「あの男が第

一の盗人だ！」と、云はれたのだと思ひました。例しろほんとは、その召使が第一の盗人なのでしたから、さう思つたのは無理もないのでした。それで、召使はすっかりときまきして、料理場にある仲間のところへ行つて、かう云ひました。

「あの學者は何でも知つてゐるぜ。俺たちはひどい目に遭ふだらうよ。だつてなあ、あの學者は俺のことを、あの男が第一だと云つたんだよ。」

このことを聞いて、第二の召使は、皿を持って行くのが怖



くなりました。けれど、持つて行かないわけにはいかなないので、おつかなびつくり持つて行きました。すると、部屋へ入るか入らないうちに、またまた彼は妻をつついて云ひました。

「ガーツルドや、あの男が第一だ！」

さう云はれたので、第二の召使は、すっかり驚いてしまひました。そして、大あわてにあわてて、部屋から飛び出してしまひました。次に入つて来た第三の召使も、やはり同じやうに、驚いてしまひました。だつて、例の學者に妻に向つて

かう云つたんですもの。

「あの男が第三だよ！」

第四の召使は、お皿でなしに、蓋物を持って来ました。男爵は學者に向つて、この蓋物の中に、何が入つてゐるか、ほんとにあてゝ、お偉いところを見せてほしいと云ひました。ところで、この蓋物の中には、蟹が入つてゐたのですが、もとより解る筈もないので、學者はすつかり閉口たれてしまひました。でも、どうかしてあてようと思つて、暫くの間その蓋物と腕めつこをしてゐましたが、たうとう、あてることが出来ないで、

「あゝ、かはいさうなクラブだなあ！」と、叫びました。

「ばん初め」書いたとほり、クラブといふのは自分の名前です、然る意味は蟹といふことです。だから、彼としては、自分のことを蟹に思つて、さう云つたのですが、それを聞いた男爵は、

「うまい！ そのとほり！ これなら、きつと先生は、私の盗まれたお錢のありかも御存知だ！」と大いに感心したあけく叫びました。

をりました。

學者は例のABCブックを、頻りにあつちこつちめくつて、口繪のコックコッコウを探してゐましたが、ちつとも見つからないので、たうとう叫びました。

「出て来なくちやいけな。ゐる事はちやんと知つてゐるんだよ！」

下の方から、かういふ學者の叫び聲が聞えて来たので、煙突の上の方にゐた第五の召使は、そのまますゝと煙突をすべり降りて「この方は何でも知つていらつしやる！ この方は何でも知つていらつしやる！」と、大聲で云ひながら、煙突の底から部屋の中へ出てまゐりました。そこで「何でも知つてゐる學者」は、お錢のあり

第四の召使は、とても驚いてしまひました。そこで學者に眼くばせて、この部屋から出て来てほしいといふことを知らせました。學者はその眼くばせのとほりに、部屋から出て行きました。すると、外にはお錢を盗んだ四人の召使が、ちやんと集つてゐました。彼等は、自分たち四人がお錢を盗んだといふことを、云はないでゐて呉れたら、たくさんお禮のお錢をさしあげると云ひました。まつたくのところ、彼にさう云はれたら、彼等の首は危いわけでしたから、さう云つて頼んだのは、無理はありませんでした。また彼等は、お錢の隠してあるところへ、彼を連れて行きました。

學者は大そう喜んで、決して彼等のことを云ひつけなといふ約束をしました。それから、邸へ歸つて来て、御馳走の並んでゐる食卓へつきました。そして、例のABCブックを取り出して、男爵に向つて云ひました。

「さて男爵、私は本を見て、お錢のありかを見つけませう。」

その時、これもやはりお錢を盗んだ仲間の一人であつた第五の召使は、學者が自分のことを知つてゐるかどうかが、聞いてみようと思つて、煙突の中に入り込んで、ちつと耳を澄まして



かを男爵に告げました。お錢はちやんと男爵の手に返りました。けれど、誰かそのお錢を盗んだか、そのことについては、彼は一言も云ひませんでした。

だから、彼は男爵からも、召使たちからも、たくさんのお錢を、お禮として貰ひました。

このやり方はあまり賞めた話ではありませんけれど、その後になつて、彼は立派な人となりました。そして、二度とふたたび、悪い人たちの云ふことを聞いて、お禮を貰ふやうなやり方はしなかつた筈です。(をばり)



幸福なハンス

鈴木善太郎

ハンスは主人の家に七年間も奉公しましたので、主人に申しました。

「旦那、わたしの年期もこれで済みました。わたしは村のお母さんの處へ歸りたいと思ひますから、どうぞお給金を藏かして下さいまし。」

すると主人が答へました。

「お前は奉公人のつとめをよく守つて正直に働いて呉れたから、どつさり褒美をやるぞ。」

そこで主人はハンスに金の塊を與へました。それはハンスの頭位大さ

なものでした。

ハンスはハンケチをポケットから出して、その金の塊を包むと、それを肩に擔いで、お母さんのある村を指して主人の家を出ました。

段々歩いて行くと、向ふから馬に乗つてやつて来る人に逢ひました。その人はいかにも元氣よく、面白さうで、威勢のいい馬に鞭をあてながら、ハンスの前を通り過ぎようとしました。ハンスは思はず大聲で歎鳴りました。

「あゝ馬乗りつて奴はいゝもんだ。乗つてゐる人はまるで椅子にかけてゐると同じだ。石つ塊にもつきあたるやう

な事はない。おまけに自分の靴をへらさなくたつていゝし、それでて知らぬ間に遠くへ行けるんだものなア。」

馬乗りはハンスの言葉を聞くと、馬を止めて聲を掛けました。

「おい、若い衆、そんならお前は どうしてその二本の足で歩いてゐるんだ。」

ハンスは答へました。

「でもね、わたしは歩くより外に仕方がないんですよ。わたしはおまけにこんな金の大きな塊を首ツ玉に結へ付けて歩いてゐるんで、首は眞直にする事が出来ないし、こいつが肩に垂れかかつて重いと云つたら話の外でさア。」

「そんなら一つうまい相談があるがな。どうだ、二人で取りかへつこをしようぢやないか。わたしはお前に馬を運るから、お前はその金の塊をわたしに呉れるさ。」

と馬乗りは云ひました。

「それは願つたり叶つたりですよ。然

遣り、手綱をハンスの手に握らせました。そしてかう云ひました。

「馬を早く馳けさせようと思ふ時は、ハイ、シイ〜！ と掛け聲をするんだよ。」

ハンスは馬乗りに別れて、馬を歩かせました。身體は軽々として、晴々しい心持でした。

少し行つてから、ハンスは先程の馬乗りの言葉を思ひ出しました。

「さうだ、馬を早く馳けさせてやらう。」

そこでハンスは「ハイ、シイ〜！」と掛け聲をしました。すると馬は素張らしい威勢で馳け出しました。

ハンスは何だか目まひがして來ました。そしてハツと思ふ間もなく、馬の上から跳ね飛ばされました。ハンスは畑と街道の間の溝の中に、四つん這ひになつて落ちました。



し、念の爲にお断はりして置きますが、あなたはこの金の塊を持つちや、引摺るやうな思ひをして歩かなきゃなりません、承知ですかね。」

「あゝ、承知だとも。」と馬乗りは云ひました。馬乗りは馬をヒナリと下りて、ハンスから金の塊を受取りました。それからハンスに手傳つて馬の上に乗せて

向うから百姓が牛を追ひながらやつて来ました。百姓はそれを見ると、逃げて行かうとしてゐる馬をうまく喰ひ止めて呉れました。ハンスは手や足に附いた泥を拭きながら、漸く溝の中から出て来ました。

ハンスは無茶苦茶しながら百姓に云ひました。

「一體馬乗りなんて良くない遊び事だよ。取りわけこんなやくざな馬に乗つちや災難さね。この馬の畜生、人を突出しやがつて、も少しでおれは首つ玉を折る處だつた。おれはもうどんな事があつたつて、二度と馬なんかに乗る事ぢやない。馬鹿々々しいや。」

「お前さん、そんなに馬に怒りくしなすつたかね。」

と百姓は笑ひながら云ひました。ハンスは百姓の牛をつつく、眺めて云ひました。

いて来て舌が顎に引着きさうでした。「こりやかうしてゐられない。どれ、牛の乳を搾つて精分を付けようかな。」

とハンスは考へました。

そこでハンスは路側の枯木に牛を繋ぎましたが、乳桶がありませんから、自分の被つてゐたなめし皮の烏打帽を桶の代りにして、乳の下に置きました。然しどうしたのか、さつぱり乳が出て来ません。ハンスはいろく工夫して乳を搾り出す爲めに、牛の乳を一生懸命で採り始めました。牛は餘り乳をひねられるのでうるさくなりました。それでもハンスが離れませんから、牛は仕舞に怒つて了つて後足でハンスの頭をポンと蹴りました。

蹴り方があまり烈しかつたので、ハンスはよろめきながら、ドーンと地べたに倒れました。ハンスは一寸の間氣が遠くなりました。丁度そこへ牛殺しが通りかゝりまし

「お前さんの牛はおれの馬から見るとい、や、さうやつて誰でもうしろから懐手して懐氣について行けるしよ。おまけに牛乳とバターとチーズは毎日取れない事つて無いからな。もし牛を一疋貰へるなら、おれは何でもおれの持つてゐる物を遣るんだがな。」

「お前さん、そんなに牛が氣に入つたのなら、お前さんの馬と取りかへつこをしませうよ。」

と百姓は云ひました。

ハンスは大喜びで取りかへつこをしました。百姓はハンスの馬の背中にヒラリと飛び乗つて鞭をあてると、その儘向うへ飛んで行きました。

ハンスは悠々と牛のうしろを追ひながら、運のいい取りかへつこをしたと思つて、一人でニコくしてゐました。「おれがパンさへ買へば、まさかパンの買へない事はあるまいしな、そしたらいつでも大好きなバターとチーズをバ

た。その男は車の上に豚を一疋載せてそれを挽いてゐました。

「おや、どうしなすつた」と云つて、牛殺しは倒れてゐるハンスの側に馳け寄ると、すぐ抱き起しました。ハンスは漸く正氣付いて、出来事を一部始終話した。

牛殺しは自分の持つてゐる瓶をハンスの手に渡して云ひました。



ンに附けて食べられるんだ、咽喉がかわいたら乳を搾つて、温い牛乳が飲めるといふもんだ。牛さへあればおれは何も入らない。あゝ、いゝ事をしたつむ。」

ハンスはそんな事を考へてゐました。お晝時分に或る茶屋の前にかゝりました。ハンスは茶屋に飛び込んで手に持つてゐたパンを食べました。仕舞に晩飯の分に取つて置いた方まで食べて了ひました。それから財布の底を叩いてビールを一杯呑みました。かうして晝飯が済むと、又牛を追つてお母さんのゐる村の方へ出掛けて行きました。

段々日盛りになつて来ると、暑さが益々暑くなつて来ました。それにその邊りは丁度廣い野原にかゝつて、そこから尙一時間も歩かなければ、木蔭のある處へ出られませんでした。ハンスは汗がシトシと流れるし、咽喉が乾

「兄さん、まア一杯飲んで元氣を付ける事だ。成る程、この牛ちや一滴しだつて乳が出さうもないや、この牛は年寄りだ。精々車でも挽かせるか、殺して食うより外役に立ちさうもないね。」

ハンスは頭を掻いて云ひました。「おや、さうかい。おれはそんな事とはちつとも知らなかつたもんだが、この牛はどれたけ肉があるかね。然し、ほんたうの處、おれは牛の肉はあまり好きではないよ、水つ氣が少いからね。そこへ行くとお前さんの持つてゐる豚は素的だね。年の若い豚と来ちや、こんな疲牛とは違つて、馬鹿にうまいからね。おまけに豚だと腸詰ま

で取れるんだ。」

「そんなら兄さん、おれは取りかへつこしてもいゝよ、お前さんが欲しいといふなら、この豚を上けるから、その代りその牛をお呉んなさい。」

と牛殺しは云ひました。

「ありがた、ありがた。お前さんの親切は忘れないよ。」

とハンスは元氣ついで云ひました。

ハンスは牛を牛殺しに渡しました。牛殺しは車から豚を下ろしてハンスに渡しました。

ハンスは牛殺しと別れて、豚を曳いて歩いて行きました。

「うまいぞ。何でも漢でもおれの思ふ通りになるから素的だぞ。いゝ加減世話の焼ける事が持ち上ると、そいつが寒うまい工合に納まりが付くなんて、全くありがたい話だ。」

ハンスは歩きながらそんな事を考へてゐました。

四

段々行く中に、ハンスは一人の男と道連れになりました。その男は美しい白い鷺鳥を抱いてゐました。ハンスはその男といろく話をしました。今朝

した。

「おれはあまり好まないが、然しお前さんの災難にかゝるのを、黙つて見てもゐられないからな。」

男はさう云つて、ハンスに鷺鳥を渡しました。そして豚を曳いてサツサと何處へか行つて了りました。

お人好しのハンスは鷺鳥を抱へて、お母さんの村の方へ歩いて行きました。「考へて見ると、おれはやつぱり取りかへつこをして得をしたな。第一、うまい焼肉が出来る。それからこの脂肪で素的なパンも焼ける。おまけに綺麗な白い羽子が取れる。この

からの出来事も語つて、いつでも自分の得になるやうな取りかへつこばかりして来たと言つて、自慢らしく話しました。

するとその男は自分の抱いてゐる鷺鳥をハンスに見せてかう云ひました。

「一寸まあこの鷺鳥を抱いて御覽。どうだい、素的に目方のある鷺鳥ぢやないか。この二月といふもの、餌をうんと呉れたからな。これを焼肉にして食べたら脂肪があつて、畑つべたが落ちたうだらう。」

ハンスは鷺鳥を受取つて、手で目方をはかつて見ました。そしてかう云ひました。

「ほんたうにこいつは馬鹿に重いや。然しおれの豚だつて、野放しのやくざ豚とは違ふよ。」

すると相手の男は又尤もらしく首を振つてこんな話をしました。

「見さん、お前さんの豚は筋道の正しい羽子を枕の中に入れて、安々と頭を落着けて眠られようといふもんだ。これはお母さんだつてどんなに喜ぶか知れないぞ。」



ハンスはその美まの村にさしかかり

い物とは云へまいよ。おれが今向うの村を通つて来たなら、その村ぢや豚小屋に泥棒が入つて、豚を一定盗み出されたと言つて騒いでゐた處だつた。危いもんだなあ。お前さんの持つてゐる豚は、盗まれた豚かも知れないよ。村では人を出して豚を探してゐる様子だから、萬一村の人達が豚と一緒にお前さんを引張つて行くやうな事にでもなつたら、それこそお前さんも飛んだ目に逢ふといふもんだ。罪が軽く済むとした處で、牢に入らなくちやならないからな。」

ハンスは聞きより驚いて了りました。「やア大變な事になつた。何とかしておれを助けて呉れないかね。お前さんはこゝらが明るいだらうから、何とか運け路も知つてゐたらう。おれを助けると思つて、おれの豚を取つてお呉れ。そしてその代りにお前さんの鷺鳥をおれに呉れてお呉れ。」とハンスは云ひま

ました。村の中には剃刀研ぎがゐりました。その男は道具を載せた車の側に立つて、歌をうたつてゐました。

研ぎ屋、研ぎ屋、剃刀研ぎ屋、わたしが研げば素的に切れる、石でも金でも何でも切る、研ぎ屋、研ぎ屋、剃刀研ぎ屋

ハンスはその側に立ち止つて、研ぎ屋の手先を見てゐました。それからたうとう話し掛けました。「研ぎ屋さん、お前さんは面白さうに研いでゐるね定めし、

「儲かりますとも。手先の仕事つてものは、金の土臺を持つてゐるやうなものでね、一人前の研ぎ屋にさへ成り済ましや、いつでも懐の中にはお金がどつさり呻つてゐますよ。それはさうと、お前さんはその美しい鷲鳥を何處で買ひなすつたね。」

研ぎ屋は剃刀を研ぎながらかう云ひましたのでハンスは自慢の鼻を高くして答へました。

「これかい。この鷲鳥は買ったんぢやないよ。豚と取り替つたのさ。」

「ちやアその豚はどうして手に入れたんぢやね。」

「それはおれが牛の代りに取つたものだよ。」

「ちやアその牛はね。」

「馬の代りに買ったのよ。」

「ちやアその馬はね。」

「おれの頭位大きな金の塊と取りかへつこをしたのさ。」

遣れるし、古釘を叩いて真直に直す事も出来ますよ。これも序にお上げするから大事にお持ちなさいまし。」

六

ハンスは重い石を擔いで、大喜びで出掛けました。

「おれは一體運がい、男なんだな。おれが欲しいと思ふ物は、何でもすぐにおれの手に入らんのだ。おれはまるで神様の手供見だぞ。」とハンスは歩きながら獨り言をしてゐました。

段々歩いて行く中に、朝から歩き續けて来た疲れが出ましたし、おまけに重い石を擔いでゐますので、ひどく足がだるくなつて來ました。その上、晩飯の分を用意して置いたパンまで、牛を手に入れた嬉しさに夢中になつて、先程の茶屋でみんな平けて了つたのですから、お腹もペコ／＼に空いて來ました。仕舞にハンスはやつとの事歩いてゐました。そして少し歩けばすぐ

「ちやアその金の塊はね。」

「うん、そいつはおれが七年間奉公した御褒美に貰つたものさ。」

「うむ、お前さんはして見ると、いつでも自分の得になるやうな仕事をする呼吸を心得てるから豪いよ。處で兄さん、今度はお前さんがいつでも懐に手を突込むと、お金があうんと詰つて

るて、手先が冷めたくならうつてい處まで漕ぎ付けたと、お前さんも仕合せ

の頂上迄登り詰めたと云ふもんだがね。」かう研ぎ屋が云ひました。

「そんな仕合せの頂上つて奴になるにはどうすりやい、んだね。」

とハンスは聞きました。

「それにやお前さんもわたしのやうに研ぎ屋になる事ですよ。研ぎ屋になりたいと思ふなら、研ぎ石一つありさへすりや外に何も入りやしません。そして何でも欲しい物はすぐ手に入るやうに儲かるといふ素的な商賣ですよ。」

に足を休めなければならぬやうになつて了ひました。すると例の石が一寸重くなつて、全く泣き出した位邪魔になり出しました。どうかしてこの重い石を擔いで行かなくとも済むやうになつたら、どんなに嬉しいだらうと思ひました。ハンスは蝸牛が歩くやうな有様で、ある野原の中の井戸の處まで痛い足を引き摺つて來ました。

その時、こゝで一休みして、この綺麗な水を呑んで、元氣を付けようといふ考へが起りました。ハンスは石を傷めないやうに、丁寧に井戸の縁に下ろして、その上に膝を付けました。それから身體を屈めて井戸の水を呑まうとしました。

すると、そのはずみに、その石を自分の身體で前に突いて、アツと思ふ間に、石を二つともその井戸の中に落して了ひました。

ジャボン！ といふ音がして、石が

こゝに一つ研ぎ石の持合せがあります。少し傷が付いてゐる代り、別に心配は入りません。お前さんの鷲鳥をお禮に下さりさへすりや、これを上げてもらひが、どうですかね。」

「どうですかねか、おれはさうして貰へば願つたり叶つたりだよ。どうかその研ぎ石と取りかへてお呉れ。さうするとおれは世界中で一番の仕合せ者になるんだぞ。おれがいつでも、懐の中に手を突込むと、どつさり詰つてゐるお金で、手先が冷めたくならうといふ話を聞いた上は、おれはもう一刻も早く取りかへつこをしたくなつたよ。」

ハンスは鷲鳥を研ぎ屋に渡しました。そしてその代りに研ぎ石を買ひました。研ぎ屋は自分の側にあつた只の石塊の重いを取り上げて、又ハンスに云ひました。

「こゝにもう一つ、石があります。こゝの上でならい、工合に打ち物も

井戸の水の中に落ち込むのを見た時、ハンスは嬉しくなつて、思はず踊り上りました。ハンスは膝をついて神様にお禮を云ひました。神様がこれまで恵みを掛けて下さつた上に、尙もお慈悲を掛けて下さつて、重い石をお母さんのゐる村まで、ブツ／＼苦情を云ひながら引き摺つて行かなくとも済むやうに、何も彼ももうまい工合にして下さつた神様のありがたい思召が、考へれば考へる程ハンスにはうれしくなりませんでした。ハンスはその厄介拂ひをしたお禮を、涙を流して神様に申上げました。

「あゝ、おれ程の仕合せな者は、この廣い世の中にないだらう。」

とハンスは云ひました。荷を下ろして身が軽くなつたハンスは、その自由な身體で飛ぶやうにお母さんの家の方へ馳け出して行ききました。(なはり)

お利口なカテリヌ

(劇 話 童)

岡 本 歸 一



登場人物
フレデリック (百姓)
カテリヌ (若いお嫁さん)
ハンス (村長の使ひ)
泥棒一、二、三、
時、或る日の午後夕近く

第一場、フレデリックの住居

夕飯だよ。飲物と腹一杯の舞馳走をねつて。え、ほつべたの落ちる様な舞馳走だつて出来てよ。それにあのビールは、胸のすくやうな飲みものには、もつてこいだわ。」

肉は鍋の中でじゅうじゅうひ出した。

カテリヌ「さうだ、かうしてゐるより、肉の焼ける間にビールでも取つて来ておきませう。その方が餘程利口だわ。」

ビールの容器をもつて左手より湯桶、ビールを出してゐる體にてカテリヌ「あらつ、あたしつたら、折角とつて来たキャベツを鶏小屋へ忘れて来たわ。此の間に一寸行つて取つてこよう。鶏に食べられたかも知れないわ。」

元の戸口から出て来て外を見て驚き、カテリヌ「慌てゝ出て行きなすら」あらつ、戸も開け放しになつてゐるわ、しつ、しつ、しつ、

鶏を小屋へ追ひ、まうとして走りまはる。驚いた鶏の鳴聲、叱る聲など聴し。喉では肉は焦げついて盛んに煙を上げてゐる。ビールは容器から溢れて床に流れ出してゐる音。やつと、大骨折で鶏を小屋に追ひ込んだカテリヌ、食うらされたキャベツを持つて息をはずませ乍ら登場。

正面奥の壁に向つて、右に大きな竈、左に前庭を通じて外との出入口(戸は上下半分づつ別になつてゐる)。左手の壁に室に通ずる戸口、舞臺中央にアーナル一つ、椅子二三脚、その他貧しからぬ百姓の住居らしい道具、カテリヌ卓の上をかたづけたり、肉をマタと一所に鍋に入れて火にかけたたりして、夕飯の支度の體。カテリヌ(獨白)「さア、もうそろそろお夕飯の支度にかまひませう。うちの人は、夫の口眞似をして」カテリヌや、今日は随分遠くまで行つて来るんだから、歸つて来たたら直ぐに

カテリヌ「ほんたうにいけなげ畜生だよ。こんなに食ひちらして、其上、人が折角播いておいた種子はほじくりだしてつぶし、畑は目茶々々にしてしまふし。(ひどい煙に氣がついて、キャベツも投げ出して、あゝ大變、あらつ、まア、まつ黒焦けになつちやつたわ。まア、まるでコークスみたいだわ。どうしよう、これもみんなあひろくでなしの故だわ。覚えておいで、うんとこらしてやるから、お、それに私ビールも出しつ放したつたわ。さア大變、(左手の戸口へ入つて行く) あらつ、まアどうしたらいいんだらう。あらつ、みんな出ちやつたわ。うちの人が歸つて来たたらどんなに怒るだらう。」

とへそなかき乍ら登場。がっかりして椅子に腰かけて、

カテリヌ「なんとかしておかなければねえ。はてどうしたらいいんだらう。お、さうだ。なんでもとつておけば役に立つとはこの事だわ。」

庭の倉から麥粉の袋を持つて来て室の中へまき散らす。ビールの容器の縁がる音。

カテリヌ「まア、今日はなんて運の悪い日だらう。たうと、

うちの人の飲む分までひつくり返して了つたわ。でも、これですつかりきれいになつたわ」

と大手箱でもした襟に得々として、身中粉だらけになつて出て来る。其所へフレデリック、兩手で大事さうに一つの袋を抱へて疲れた體にて登場。

フレデリック「カテリーヌや、今歸つたよ。おやッ、どうしたんだい。まるで水車屋のかみさんみたいに粉だらけになつてさ。あゝさうか私の御馳走をこしらへてみたんだね。うんさうか、お腹は皮が脊骨にひつつく程すいてゐるし、のどはから／＼だ。可愛いカテリーヌや、では早速御馳走にならうか」

カテリーヌ「歸なさいまし、え、あのう、その御馳走が、あなただけ」

フレデリック「うん、その御馳走をさ一つ早くお願ひしたいてもんだね」

カテリーヌ「でも、それがあなた、私は肉の焼ける間にビールをとりに行つたのよ。するとキャベツを鶏小屋へ忘れて来たのを思ひ出して、取りに行く」と鶏がみんな出て畑を目茶

フレデリック「金貨の袋を抱へて埋めに出て行く。暫くして村長の使ハンス登場。」

ハンス「今日は。おかみさん、フレデリックさんはお家ですかいい」

カテリーヌ「おや、おいでなさい。ハンスさんうちの人ですか。居りますよ。今倉へ行つてゐますから呼んで来ませう。何か御用」

ハンス「村長様かね、ちよつくら用事があるから、わしと一所に急いで来てもらひたいといはつしやるのでね」

カテリーヌ「さうですか、御苦勞様でしたねエ。ちや一寸お待ち下さい。(出て行く) あなた、あなた、村長様かね、何か急に御用があるので、来て下さいといつて、ハンスさんが御使ひに見えましたよ。え、え、一所に来て下さいといつて、(もどつて来てハンスに) 只今すぐに参りますつて。まア一服召し上げ」

と椅子をすゝめる。フレデリック手を拭き乍ら入つて来る。フレデリック「やア、今日はハンスさん。どうも御苦勞様でした。お待たせしました。では御一所に参りませう。ちやア

目茶にしてゐるんでせう。やつとこさと追ひ込んで歸つて来て見ると、肉は黒焦になつてゐるし、ビールはみんな流れ出しちやたの。でも心配しないで頂だい。そこへ麥粉をまいてすつかりきれいにしておいたわよ」

フレデリック「エッ、麥粉を。あの上等の。お、カテリーヌ、なんて情けない事をしたんだらう。肉は焦がす、ビールはみんな流す。其上に上等な麥粉まで。あゝとんだ事をしてくれたなア」

カテリーヌ「さうですが、私知らなかつたんですもの。教へて呉れないんですもの。」

フレデリック「やれ／＼、して了つた事は仕方ないが、これからは注意をしよう。お、ちやアましがひのない内に注意しておかぐね。これ御覽、これはねエ、(袋の口をあけて中の金貨を見せ乍ら)黄色いボタンなんだよ。きれいちやないか。これをこの壺へ入れてあの粉倉の入口の桶の下へ埋めておくが、お前は決して手をつけてはいけないよ。いゝかい、きつとだよ」

カテリーヌ「え、あなた、誓つてもいいわ」

カテリーヌ「一寸行つて来るよ。今云つた事は忘れないでね」

ハンス・カテリーヌに挨拶して二人退場。

カテリーヌ「私はとてもあの人が歸つて来るまで、何にも食べずに我慢なんぞ出来ないわ。肉は焦がしちやつたし、いゝわ、パンだけでも」

むしや／＼パンを食へ出す。泥棒二人旅商人の風をして入つて来て、カテリーヌのへ瀬戸物を並べ乍ら、

泥棒一「今日は、奥さん、毎日結構なお天気で、へイ、え、お宅様ではかう云ふ品物は如何で御座いますよ。これは船來もので、きれいでしょ。これはお砂壺壺です。一寸花生けにもなります。かう机の上に置いてあつても大變しやれてゐます、これは」

カテリーヌ「おひかぶせる様に」あゝ、もし、折角ですがねえ、私はちつともお金を持ってゐませんから、欲しくつたつて買へませんよ」

泥棒二「へ、へ、奥様御冗談を」

カテリーヌ「いゝえ、本統よ。でも欲しいわ。あの黄ろい光つたボタンが、お金だつたら買つてもいいんだが」



泥棒「え、黄色い光つてゐるボタンですつて」
 カチリー「え、きら／＼光つてゐる、きれいなボタンよ」
 泥棒「さら／＼光つてゐる、一寸見せて下さい」
 カチリー「こゝにはないのよ。その外の倉へ入つた所の桶の下に、埋めてあるのよ。でも私は手もつけられないの」
 二人の泥棒意味ありげに、眼で話し合つて一人出て行く。
 泥棒「奥棒、それにしても、品物だけでも見て下さい。このきれいなスリーブ皿は如何です。こんなお皿でスリーブを頂いて御覽なさい。同じスリーブだつて、どんなにおいしく頂けるか、考へても御覽なさい。それでお値段の處は、目茶目茶の大勉強、大安賣で」
 その時泥棒ノ二歸つて来る。二人月口ではそ／＼云つたかと思ふと、餘念なく瀬戸物に見入つてゐるカチリーの方を見乍ら、ニヤリと笑つて金貨の壺を抛へて消える。カチリー「や、暫く物を並べて見てゐたが、泥棒達が歸つて来ないので月口へ行つてカチリー「あつたでしよ、それ、役に立ちますか。桶の下よ。入口の、あつたでしよ」
 (返事がないので不審に思つて出て行つたが直ぐ歸つて来て) み

んなおいてきばなしで行つちやつたわ。ちやアこれを飾りませう。うちの人が歸つて来たら、どんなにびつくりするでせう」

あれこれと柵の上や、テアメルの上に飾つてゐる所へフレデリック歸つて来る。

フレデリック「あ、お腹が空いて眼がまはり相だ。おやツ、こりやまアどうしたんだい。こんなに澤山瀬戸物をまア」

カチリー「おやお歸いなさい、早やかつたんですね。これッ、これはね取替へましたの」

フレデリック「誰れと、そしてなんと取替へたんだい」
 カチリー「旅商人と。あの黄色いボタンとよ。でも掘り出したのは旅商人で、私は指一本だつてつけやしませんよ」

フレデリック「膝をつぶしてゐえ、ツ、たゞ、大變なことをした。あゝあれは家の財産全部だ。今日やつと兩替して来た許りだ。お、神様、私はどうすればいいんです。どうしてこんなに私をお困つしなさいませ。私はなんにも悪い事をした覚えもありません。あゝ私は一文なしになりました」

カチリー「まア、さうだつたんですか。それならさうと教へ

て下さればいいのに。でも、たつた今の事だから追ひかけて行つたら、取り戻せないものでもないでせう、さア行きませう」

フレデリック「おゝさうだ。どつちへ行つた。こつちかい。だが己れはお腹がペコ／＼だ。途中で食べるから、パンとチーズとバターを持つておいで。さア早く、さアおいで」

二人泥棒の後を追ふ、暮色漸く迫る。

(幕)

第二幕、森の中

中央に一本の大きな繁つた太い木。向ふは下へ坂になつてゐる心持木の間から夕やけの空見えてゐる。鳥の森に歸る鳴聲聞える。

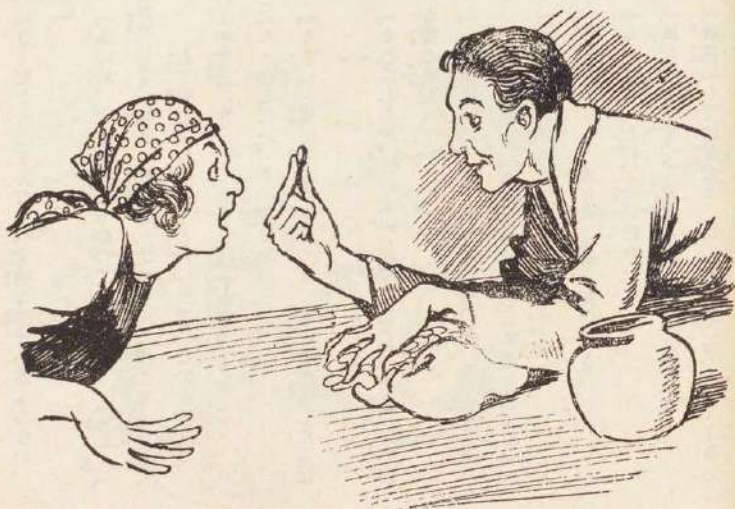
フレデリック登場。

フレデリック「オーイ早くおいで、なにをしてゐるのだい。もう日がぐれて来るぢやないか。ぐ／＼してゐると、道にはぐれても知らないよ。さア早くおいで」

と云ひ乍ら舞臺を一方から他方に横切つて入つて了ふ。カチリー「の聲だけ。」

「カテリーヌ」一寸待つて下さいよう。木が大怪我をしてゐるからバタを塗つてやつてゐるたんぢやありませんか。あなた、（と呼びながら登場、フレアリックの呼ぶ聲が遠くはなれて、やがて消える）「いゝわ、先へ行つたつて、そのかはり歸りは私の方が先きだわ。（木の根につまづく拍子に籠の中からチースの一片が落ちて、下の方へ轉つて行くのに氣付いて）おやつ私がお前をとりにもう一ぺんあと戻りでもすると思つてゐるのかい。私はそんなお馬鹿さんぢやないよ。さアお前、行つて友達を連れておいで。（と別のチースを出して轉がす）おやお前も歸つて来ないね。さアちやお前行つておいで。又かい、しやうのない奴ばかりだね。さアお前道に迷はず連れておいで。おやお前もかい。ほんとにろくでもないお使ひばつかりだよ」

と次ぎから次ぎへ皆投げて了ふ。そこへフレアリック歸つて来る。フレアリック「なにをぐすくしてゐるんだね。いくら待つても来ないし、道に迷つたかといふ加減心配したよ。あゝ私お腹がすいてもうとても歩けやしない。パンをおくれパンを。カテリーヌパンだけ出す。フレアリック籠を自分の方へ引き



よせて）おや、バタやチースはどうしたんだい。ないぢやないか」

カテリーヌ「バタは木の後に塗つて了つたし、チースは一片が逃げ出したので、あとからく、迎へに轉がしてやりましてわ」

フレアリック「なんだつて——そんな馬鹿な真似をするんだい。まアく、パン文けでも残つてゐたのがまだしも幸だ。さアお前もお食べ。二人パンを食ふ、思ひ出した林に」さアお前戸締りをして来たかい」

カテリーヌ「いゝえ、あなた教へてくれないんですもの」

フレアリック「あゝ、やれく、でもまだ家から四五丁しか来やしないんだから、もう一ぺん歸つて戸締りをして、ついでにもう少し食べる物をもつておいで。私はこゝで待つてゐるから」

カテリーヌ「えゝ、よござんす。あなた、直ぐ行つて来ますわ」

カテリーヌ退場。フレアリックつくつくおかみさんの事をこぼし乍らパンを噛ちる。

日はもう全く沈み夜の霧は次第に濃くなる。

月の光が段々強くなる。鼻の音聞える。暫くしてカテリーヌ扉を背にかつき、扉の取手には豆の鼻とリンゴ酢の瓶とをひつけて登場。

カテリーヌ「さアあなた、扉をもつて来ましたから、しつかり押へてゐればこれ程大丈夫な事はないでしょ」

フレアリック（呆れて）「やれく、お利口なおかみさんを持つたものだ。えゝもうどうにでもなれ。だがその扉は私は持たないよ」

カテリーヌ「えゝよござんす。その替りこの重い豆とお酢の瓶は、扉に持たしてやるから。おや、向ふから、誰れか来るわ、（同）あゝ先刻の泥棒よ」

フレアリック「えゝ泥棒。どれ何所に。さア大變、早くかくれろ。おゝ丁度いゝ、この木の上へ登つてゐよ。さア早く登らないと見付かるよ。さア、早く」

と下からフレアリックが押し上げて、二人がやつと登つたか登らない内に、泥棒三人燈火をもつて争ひ乍ら登場。

泥棒一「そんな法つてあるものか。この仕事にや、資本が相當かゝつてゐるんだぜ」

泥棒二「さうだとも、そんな、べら棒な話があるものかい、なア」

泥棒三「兎に角、こゝで休んでゆつくり定めよう。(木の下の三人車座になる) 初めに約束したのはどんな事かもう忘れたのか。三人で同じにわけようと云つたぢやないか」
(木の上から豆がばら／＼と落ちる。泥棒びつくりする)

泥棒一「なに、あの音は」
泥棒二「なに、風が木をゆさぶつて、木の實を落したんだよ」

泥棒三「それにしちや、風の吹いた様子もなかつた様だが、何んだか變な晩だなア」

泥棒二「そんな事はどうでもいゝぢやないか。さア早くきめよう。ぢやア、くじ引きで當つた者の云ふ通りしよう」

泥棒一「己れは圖が弱いからいやだ」
泥棒二「己れは圖が弱いからいやだ」

泥棒三「風が木をゆすつて夜露を落したんだらう」
泥棒二「夜露にしては變だよ。なんだか變にぞく／＼する汗



氣味の悪い晩だなア。この木の上に魔女でもゐるんぢやないか」

泥棒一「おどかしつこなしにしようよ。己れは恐くないが、魔女は大きらひだから」

泥棒三「魔女のすきな奴があるかい」
と云つてゐる所へ今度は、袋と瓶が落ちる。泥棒三度びつくりする。

泥棒二「なんだか、變な晩だぞ。ほんたうに魔女でもゐるのかも知れない、今にぬうつと」

泥棒一「おい／＼後生だからおどかしつこなしにしよう」
泥棒二「なんだお前震へてゐるのか」

泥棒三「なに震へてなんぞゐるもんか。たゞ、身體がこまかく動いただけだ。そんな事いつつてお前も震へてゐるぢやないか。どこか外へ行かうぢやないか」

泥棒二「己れが、己れは只だ寒いだけだ。こはくつて震へてゐるぢやないんだ。ぢや手取り早くきめようぢやないか。どうだい、この中から己れ達の資本を引いて、あとをたゞきわけと云ふ事に」

と云つてゐる時木の上から、えらい音がして枝を折つて風が落ちて来る。
泥棒達はそら出たとキヤツと云ひ乍ら、金貨も何もおいたまゝ逃げて行つて了ふ。木の上からカチリメとフレリツク下りて来て金貨を見付けて、

カチリメ「おや、金貨もなにも皆おいて行きましたよ」
フレリツク「えッ、金貨も。おゝあるある。あゝ、ありがた

い。おゝ神さま。あゝ助つた。あたしはもしも見付つたらどうなる事かと生きてる心持がしなかつたよ」
カチリメ「だつて、私とても重くつて我慢出来なかつたんですもの。でもよかつたわね」

フレリツク「お利口なカチリメや、かうしてゐるうちにも泥棒が又金貨をとりかへしに來たら今度は大變だ。さアこの間に早く歸らう」

カチリメ「えゝ、さアさア」
二人喜び喜んで、貨を持つて退場。

(幕)

大まけ

中島孤島



(一)
ある百姓が牡牛を市場へ牽いて行つて、七圓に賣つて來ました。歸り途に堀のそばを通りかゝると、遠くの方から蛙が、「ゲコ、ゲコ、ゲコ」
と鳴いてゐるのが聞えました。商賣がへりの百姓の耳には、それが「ゲンコ、ゲンコ」といつてゐるやうに聞えたので、ひとりでかう言つた。

「あゝ、あんなことをいつてゐるやアがる。おれがいくらに賣つて來たかも知りもしないくせに、知つたやうな顔をして、「ゲンコ、ゲンコ」といつてゐるやアがる。おい、ゲンコ（五圓のこと）ぢやアないぞ、七圓だぞ、おれの持つてゐるのは。」
かういつてゐるうちに、もう堀のふちへ來たので、百姓は蛙に向つて話しかけた。
「この馬鹿ともが、それより外は知らないのか？ おれの持つて來たのもが、それより外は知らないのか？」

つてゐるのは七圓だよ、ゲンコぢやアないよ」

それでも蛙はやつぱり、

「ゲコ、ゲコ、ゲコ」

と鳴いてゐました。

「よし、うそだと思ふなら、見せてやらう、見せてやらう」といひながら、百姓は懐から金を出して、一枚一枚勘定して見せました。

けれども蛙はそんなことにはかまはずに、やつぱり前のやうに、

「ゲコ、ゲコ、ゲコ」

と鳴いてゐました。

「えいッ」と百姓はいま／＼しさうにいひました。「そんなにおれを馬鹿にするなら、自分で勘定して見ろよ」

かういつて、百姓は手に持つた金を一枚一枚の水の中へ投げこんでやりました。

それから百姓は堀のふちへ腰をおろして、蛙が金を返してくれるのを待つてゐましたが、蛙はやつぱり前のやうに、「ゲコ、ゲコ、ゲコ」

と鳴くばかりで、いつまでたつても金を返してくれませんでした。

さうしてゐるうちに、もう日が暮れかゝつて來たので、いくらのおきな百姓でもさう／＼は待ちきれなくなつてしまひました。そしてたうとう大變に腹を立つて、蛙に向つて悪口をつきはじめました。

「この水もぐりめ、石あたまめ、ぎよろ／＼眼め、貴様はそんなわに口をして、耳のいたくなるくらゐ鳴き立てるくせに、いつまでたつても七圓の勘定が出來ないぢやないか。おれがいつまで／＼待つてゐると思ふのか？」

かういつておいて、百姓はすん／＼行つてしまひました。けれども蛙はその後からやつぱり同じやうに、

「ゲコ、ゲコ、ゲコ」

と鳴いてゐるので、百姓はぶん／＼と腹を立てて、家へかへつて行きました。

(二)
二三日たつて、百姓はまた一頭の牛を買ひました。今度は肉にして賣るつもりでそれを殺しました。もしうまく賣れた

ら、肉だけでも新しい牛が二頭買へるだけの金はとれるだらう、その上に皮がたゞ儲けになる勘定でした。

百姓が肉を持って町へはひると、入口のところには澤山の犬が集つてゐて、先立になつた大きな獵犬が、肉のまはりをとびまはつて、鼻をおつつけながら、

「ワン、ワン、ワン」

と吠え立てました。

犬はいくら追つても、ついて來るので、百姓は犬に向つてかう言ひました。

「よし／＼分つたよ、お前は肉がほしいんだらう。けれどもこの肉はたゞでやるわけにはいかないよ」

それでも犬は何ともいはずに、たゞ、

「ワン、ワン、ワン」と吠えるばかりでした。

「それぢやアお前は、仲間の分までも拂ふだらうな」と百姓は獵犬に向つて念をおしました。

「ワン、ワン、ワン」と犬がいひました。

「よし／＼」と百姓は首を動かしながらいひました。「それはどにいふなら、お前にこの肉を賣つてやらう。おれはお前も



よく知つてゐるし、お前の主人も知つてゐるんだから。だがよいつておくが、三日のうちに金を拂ふんだよ。間違へたらただはおかないから。いゝか、お前がおれの家まできつと届けてくれるんだよ」

百姓は肉をそこへおろして、そのまゝ／＼歸つて行つてしまひました。

犬はすぐにそのまはりへたかつて、

「ワン、ワン、ワン」と吠え立てました。

百姓は遠くでそれを聞いて、ひとりでかう言ひました。「頼むよ、みんなして食つてもいゝが、代は大きな奴が拂ふんだぞ」

三日たつと、百姓は

「今日は金のはひる日だぞ」

と思つて、ひとり喜んでゐたが、たうとう誰れも金を持つて來なかつたので、すつかり失望してしまつて、

「おれはもうどういふも信用しないよ」といつてひとりで、腹を立ててゐました。

その翌日百姓は夜が明けけるのを待つて町へ出かけて、肉屋

へとびこんで行つて、いきなり牛肉の代を請求しました。肉屋は冗談だと思つて、はじめは相手にしなかつたが、百姓は眞面目で、

「まア冗談はぬきにして、金を拂つて下さい。三日前にあの大きな黒ぶちが、牡牛の肉を二頭分、確に持つて來た筈ですから」といふので、肉屋はたうとう腹を立てて、箆をもつて來て、百姓を外へ叩き出してしまひました。

百姓は口惜しがつて、肉屋の前で散々となり散らしてゐたが、しまひに、

「見てゐろ！ 出るどころへ出てとつて見せるから」といつて、とつとと断つて行つてしまひました。そして王様のところへ行つて、訴へて出ました。

(三)

百姓は王様の前へ連れて行かれました。王様はまづ百姓に向つて、訴へて出たわけを尋ね、

「二體その方はどんなひどい目にあつたのか？」と問ふと、百姓は幾度も幾度もおじきをして、いひました。

「はい／＼蛙と犬がわたくしの身代を持つて行つてしまひま

した。そして肉屋が勘定のかはりに棒をくれました。かう前におきをして、これまでのことを残らず王様の前で話しました。

その時王様のそばには美しい王女が椅子へかけて、この裁判を聞いてるたが、百姓がだんだんと話してゆくうちに、王女はをかしくつてたまらないやうに、聲を立て、笑ひ出しました。それを見ると、王様は百姓に向つてかういひました。「今日はその裁判をしてやるわけにはゆかないが、併しお前はけふから姫の婿になれるのだ。姫は生れてから一度も笑つたことがないので、わしは姫を笑はせた者に、姫をやるといふ約束をしておいたが、けふまでまだ姫を笑はせたものがなかつた。お前は全く運のいい男だ」

すると百姓はまた幾度もおじぎをして、「まア、そればかりは御免なすつて下さい。わしは家に女房が一人ありますが、ひとりでも多くゝるで、實は少し持てあましてゐるのですから」

それを聞くと王様は大變に腹を立て、「この無禮者めが！」

まいことをやつたね。そのうちをいくらでもおれによこしな。そんなにもらつたつて、使ひみちに困るだらうから」

「さういふなら、お前さんに二百兩おけるから、三日したら王様にさういつて、もらつたらよかんべい」

かういつておいて、百姓はさつさと門を出て行きました。すると門のところ二人の話を聞いてゐたユダヤ人が、あつて、百姓の後をおつけて来て、上衣の裾をつかんで引留めながら、かう言ひました。

「驚いたね！ お前さんは何といふ運者だらう。わしが兩替



と叱りつけました。

「まア、王様」といつて百姓はまた幾度もおじぎをしました。「どうせ牛からとれるものは、牛肉と相場がきまつてをります。わたくしはこんな田舎者ですから、どうぞ御勘辨なすつて下さい」

「ちよつと待てよ」といつて王様は何か考へてゐたが「それではお前にはほかの褒をやるが、併し今日は一ぺんかへつて、三日したらまたこゝへ来い。お前に五百金拂つてやるぞ」

「はい、有がたうございます」

(四)

と百姓はまた幾度もおじぎをして、王様の前をさがりました。百姓が門のところまで出て来ると、番兵がうしろから呼びとめてかう言ひました。

「お前は王女さまを笑はせたのだから、御褒美をどつさりもらつて来たに違ひない」

「お前さんのいふ通りだ」と百姓がいひました。「五百兩下さるさうだよ」

「なるほど」と番兵は驚いたやうな聲をしていひました。「うをしてあげませう。細かい銀貨にかへてあげませう。そんな大きな金では、使ひ道にお困りだらうから」

「よし、ジウさん」と百姓はユダヤ人の顔を見ていひました「まだ三百兩残つてゐるから、ではそれだけ細かい銀貨にしてもらはう。三日したら王様の前で拂つてやらう」

ユダヤ人は古い銀貨をやつて、新しい金貨を受ければ、自分の儲けになると思つたので、大喜びですぐさま古い古い銀貨を三百圓もつて来て、百姓に渡しました。その銀貨は三つよせても新しい銀貨の二つの価値しかないくらるのものでした。

(五)

三日たつて、百姓はいはれた通り王様の前へ出ました。王様は、家來に向つてかういひました。

「こやつの上衣をはいで、金の鞭で五百だけ食はしてやれ」

「もし王様」と百姓は幾度もおじぎをしながら言ひました。「それはもうわしのものではございません。二百兩は番兵の方に進上しましたし、三百兩はユダヤ人が兩替を



してくれました。ですからわしのもは、もう一文もありません」
そこへ番兵とユダヤ人がめいめいに自分の分前を受取らう

ふ聲が隣の部屋から聞えました。

「あの王のぬすつたうに、たうとう一ばい食はされちまつた。自分で金をくれないで、おれにほしだけ持つて行けなんていつて、ひとを喜ばせておいて、またどんなわるさをするか知れたもんぢやアない。だがポケットへつかみこんで来たこの金は、こりや全館本物かしらんで？」

それを聞くと、ユダヤ人は「しめた！」と手を打つた。そして口のうちでかういひました。

「あいつは王様の悪口をいつてやがる、一走り行つて訴へてやらう。さうすればおれは御褒美がもらへるし、あいつは罰を食ふだらう」

ユダヤ人はすぐに王宮へ引かへして、百姓の言つたことをそのまま王様に申上げました。それを聞くと、王様はくわつと腹を立てて、ユダヤ人に向つて、

「すぐに行つて、あいつを引張つて来い」といひつけまし。

そこでユダヤ人はまた宿屋へ駈け戻つて来て、百姓にかう言ひました。

「王様のお召だ。何かいゝことがあるかも知れないから、お

と思つて、はひつて来ました。けれども金貨だと思つたのはとんだ思ひ違ひで、金の鞭でその数だけ打たれなければならぬのでした。それでも番兵は、折々食ふものと見えて、だまつて自分の分前だけ受取りましたが、ユダヤ人は泣いたり、騒いだりして、

「あゝなさないく、これはとんだ金儲けだ」といつてわめき立てました。

王様はそれを見る、をかくつてたまらなくなつて腹をかへて笑つたので、今までの腹立ちもどこへか消えてしまつて、百姓に向つて機嫌よくかう言ひました。

「こら、お前はまだまだ先には褒美をなくしてしまつたのだから、おれがその理合せをしてやらう。おれの金藏へ行つて、お前のほしだけの金を持つて行け」

百姓は二度とは聞きなほさずに、金藏へとびこんで行つて、大きなポケットに詰まるだけの金貨を詰めこんでしまふと、大急ぎで宿屋へとびこんで勘定をして見ました。

ユダヤ人はどうかしてこの隣を打つてやらうと思、百姓のあとをそつとつけて来て見ると、百姓のひとりごとをい

前さんはすぐそのまんまでおいでなさい」

「いゝや、おらは紳士の作法といふものをよく心得てゐる」と百姓はかぶりをふつて言ひました。王様の前へ出るには、何より先に新しい上衣を一枚造らなければならぬえ。おれのやうな金をうんと持つた者が、こんな古い、ほろ／＼になつた上衣を着り行かれると思ふのか？」

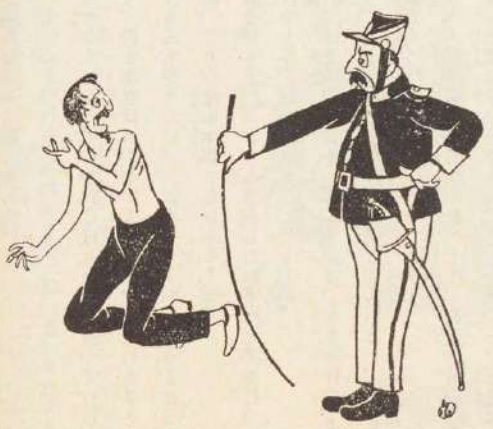
かういつて、新しい上衣の出来るまでは、てこでも動きさうにない様子なので、ユダヤ人は大へん氣をもんで、もしその間に王様のお腹立がなほるやうなことがあつたら大變だと思つたので、急に親切さうな様子をしてかう言ひました。

「ぢやア友達かひに、ちよつとの間わしのこしらへたばかりのこの上衣を貸してあげよう。本當に懲得づくでは出来ることぢやアないんだよ」

百姓は大喜びで、ユダヤ人の上等な上衣を着て、一しよに王の前へ出て行きました。すると王は先刻ユダヤ人から聞いた通りのことを言ひ出して、

「わしの悪口をいふなんて埒な奴だ。さアなぜそんなことを言つたか、申開きが出来らなういつて見ろ！」

と怖しい見番で問ひかけました。
けれども百姓は平氣な顔をして、相かはらすおじぎをいくつもしながら、かういひました。
「ユダヤ人のいふ事なんぞをあてになすつては困りますね。本當のことは一つも言はないんですから。こいつはわしの着



てる上衣を自分のものだなんて言ひかねない奴なんです」
「なんだつて？」とユダヤ人は驚いたやうな聲をして百姓に食つてかゝりました。「その上衣はおれのぢやアないか？ お前が王様の前に出られないといふから、親切づくで貸してやつたものぢやないか？」
ユダヤ人と百姓の争ひを黙つて聞いてゐた王様は、二人を手で制してかう言ひました。
「これ、ユダヤ人、その方はこの百姓に上衣を貸すほどの親切があるなら、なぜ百姓の言つたことをおれのところへ密告して来たのか？ 親切づくで人の悪事を密告するものはあるまい。して見れば、ユダヤ人は、わしか、この百姓か、どちらか一人をだましてゐるに違ひない。その褒美として三百だけ鞭を食はしてやる」かう言つて、王様は家來にいひつけて、ユダヤ人に鞭をくれて放してやりました。
そこで百姓は上等の上衣を着てポケットへは金貨を一ぱい詰めこんで、
「さア今度こそは大當りだぞ」といそ／＼大威張で家へかへつて行きました。（をばり）

三人の本金、髪の色、毛を持つ巨人

霜田史光



昔、或所に貧しい一人の女がありました。その女の子は頭巾のやうな膜を冠つて生れました。それで、その子が十四の時に、王様のお姫さまと結婚が出来ること云ふ豫言をされた

かと訊ねました時に、「五六日前に膜を冠つた子供が生まれました。それは確かに運のよい徴に相違ありません。え、眞實です。何しろそれで十四の年に王様のお姫さまと結婚が出来ると云ふ豫言をされたのですからね。」と村の人は答へました。王様は曲つた心の人でしたから、この豫言と云ふのが纏に障りました。そ

ので、その子の親達の所へ行つて、最も深切らしい様子をして、
「お前さんの手共を私に呉れないかね。さうすれば私は私は大切にして上げるよ。」と申しました。
親達は始めは断りましたが、見知らぬ人が深山のお金を出して頼みましたので、終に承知して子供をやつてしまひました。そして、
「だからあの子は幸せ者だと云ふのだ。何事だつてあの子の爲めにはよくなるらしい。」と思つたのでした。
王様は子供を箱の中へ入れて馬に乗つてゆくうちに、深い川のほとりに出ました。
「頼みもしないこんな花婿を突放して私の娘の愁ひをのぞいてやるのだ。」と獨言を云ひながらその箱を水の中へ投げ込みました。
けれども箱は沈みませんでした。ボートのやうに流れて行つて、一滴の水

さへ中へは入りませんでした。さうして流れてゆく中に、たうとうその王様の宮殿から二哩も離れた水車場の所へ流れて来て、その堰にしつかりとくつついてしまひました。

折よく其處に水車屋の小僧が立つてゐましたが、何かえらい寶物でもは入つてゐるのか知らと思つて、釣針でそれを引き寄せました。所がその箱を開けて見ると、中には元氣のいい赤ん坊がにこ／＼してゐるのです。

小僧は早速水車場の主人の所へその子供を持つて行きました所、その主人夫婦には、子供がなかつたものですから、

「これは神様が授けて下さつたのだ。」と云つて自分の子として大切に育てました。それで子供は丈夫なよい少年となりました。

或日のことこんなことがありました。王様は雷に出合つたので、それを

避ける爲めに水車小屋に立寄つたのです。その時王様は少年を見て、これはお前達の息子なのかと訊ねました。

「いゝえ、これは捨子なのでございませう。これは十四年前に箱に入れられて堰の處へ流れ着いたのを、家の小僧がひき上げたのでございませう。」と答へました。

王様は直ぐに、それはかつて自分が水の中へ投げ入れた所の「運のよい子供」に相違ないと感づきました。

「お前さん達、この子を私の妻の後の所まで手紙を届けさせてくれることは出来まいかね、さうなれば私はこの子に褒美として金貨を三枚上げようよ。」と王様は云ひました。

「王様の仰せですもの。」と夫婦は云つて、少年に支度をするやうにと命合けました。

其處で王様は後に宛て、手紙を書きました。その中には次のやうなことが

書かれたのであります。

「この少年がこの手紙を持つて着いたら直ぐ殺して埋めてしまひなさい。この事は私が歸る前にすつかり仕末をしてしまはなければなりません。」と。

少年は手紙を持つて出立しました。

然し彼は道に迷つてしまつて、日の暮れた頃、大きな森の中へ入り込んでしまひました。すると暗闇の中に小さな灯を見ましたので、それを目あてに進んでゆくと、みすほらしい一軒の家がありました。中へ入つて見ますと、一人のお婆さんが火のそばに坐つてゐました。お婆さんは少年を見るや否や驚いて叫びました。

「何、お前さんは此處へ来たんだね。そして何をしようとするんだい。」

「僕は水車場から来たのです。そしてお后さまの所まで手紙を持つて行く途中なのです。けれどもこの森へ入つて来て道を見失つてしまひましたの

で、私は一晩此家に泊めて貰ひたいんです。」と少年は答へました。「可哀さうに。」とお婆さんは云つて、



「お前さんは泥棒の棲家へ入つて来てしまつたんだよ。あの人達が歸つて来たからお前さんは殺されてしまふだらうよ。」

「誰でも歸つて来るが、いゝさ。

僕は怖くなんか

ありアしない。

僕はもうほんと

に疲れ切つてしま

まつて、どうす

る事も出来ない

んですよ。」と云

ひながら少年は

腰掛の上に體を

延ばして、その

儘くつすと寝

込んでしまひま

した。

その時泥棒達

は入つて来まし

た。そして「其處に寝てゐる變な子供は一體何者だ。」と怒つて訊きました。

「あゝ、あれですかい。」とお婆さんは云つて「本當に無邪氣な子供なんですよ。この子供は森の中へ入り込んで、道に迷つてしまつたのですとさ。私は何んだか可哀さうでならないんですよ。何んでもこの子はお后さまの所へ手紙を持つて行くんだと云つてゐました。」

それを聞いて泥棒達は手紙をとつて読みました。それに因つてこの少年がこの手紙を持つてゆくと直ぐに殺されてしまふのだと云ふことを知りました。其處で、泥棒達まですつかりこの少年に同情してしまひました。そして泥棒の親方はこの手紙を引裂いてしまつて、別な手紙を書きました。この手紙には、この少年が着いたら直ぐに王女と結婚させるがよい。と云ふ命令が

書かれたのです。そして泥棒達は少年を朝まで腰掛の上に静かに眠らせて、少年が起きた時、その手紙を持たせて本當の道を教へて發たせました。

后はこの手紙を受取つて命令けられた通りにいたしました。引き續いて立派なお祝の御馳走を用意しました。王女はこの運のよい少年と結婚することになったのであります。この少年は若くて美しかったものですから、王女は大層喜びました。そして二人はほんたうに幸せだつたのです。

それから暫らくして王様は宮殿に歸つて來ました。そして王女が例の運のよい子供と結婚すると云ふ豫言が、その通りになつてゐたことを見ました。「これは一體どうした譯なんだ。私の手紙には全くこれと別な事を命令けて置いた筈なのに。」と、王様は訊ねました。

それを聞いて后は王様にその手紙を讀んで見せました。王様はそれを読んで見せましたので、王様はそれを讀んで見て、これは他の者が書いたものだと思ふことを直ぐに覺りました。そこで少年に向つて、お前に頼んだ元の手紙はどうしたのだと訊ねました。

「私は何んにも知りません。それでは私が一晩泊つたあの森の中の家で擦り替へられたに違ひありません。」と少年は答へました。王様は火の様に怒つて、「そんなに易々と逃げ口上は赦さんぞ。私の娘の婿になるものは、巨人の頭から三本の金色の髪の毛を取つて來なければならぬんだ。さう、それを取つて來なさい。さうすればお前は娘の婿になつても宜しい。」と申しました。

王様はこんな難題を云ひ掛ければ、大抵少年を追つ拂ふことが出來ると思ひましたが、少年は、「三本の金色の髪の毛——とつて來なかつたのです。すると其處の船頭はまた前のやうに、どんな職業が出來るか、何を知つてゐるかと思ふことを訊

つてゐるかと思ふことを訊ねました。「僕は何んでも知つてゐるよ。」とまた少年は答へました。「それでは伺ひますがね、この街に生えてゐる樹には黄金色の林檍が成る筈なんですが、今ではそれが一枚の葉さへなくなつてゐるんですよ。それは一體どうした譯か今直ぐに話して呉れませんか。」



すとも。僕は巨人なんか怖くはありません。」と云つて少年は別れを告げて漂泊の旅に出掛けました。

だん／＼歩いてゆくと、大きな街に出了ました。街の入口の番人は少年に向つて、どんな職業が出來るか、何を知つてゐるかと思ふことを訊ねました。

「僕は何んでも知つてゐるよ。」と少年は答へました。「それぢや伺ひますがね、こゝの市場の噴水はお酒を噴き出す仕掛けになつてゐるのですが、今では水さへ出ないんですが、それはどう云ふ譯か今直ぐに話して呉れませんか。」と番人が云ひました。

「そりあ話して上げようとも、然し、僕の歸るまで待つて呉れなさいアいけませんよ。」と少年は答へました。

少年はまた歩いてゆくとつと大きな街に出了ました。其處の番人は前のやうに、どんな職業が出來るか、何を知

ねました。「僕は何んでも知つてゐるよ。」とまた少年は答へたのです。「さうかえ、それぢや伺ひますがね。私は始終前や後ろへ行つたり來たりして漕いでゐなければならぬが、一體どうしたら救はれるんでせうねえ。一つ、そのことを話して呉れませんか。」と船頭は云ひました。

「そりあ話して上げようとも、然し僕の歸つて來るまで待つて呉れなさいアいけませんよ。」と少年は又云ひました。

湖を渡り切るとすぐに巨人の王國に入ることが出來ました。其處は暗くて陰氣な所でした。そして巨人は留守でしたが、その祖母さんは笥棒に大きな椅子に腰掛けて編物をしてゐました。

巨人の祖母さんはちろりと少年を見て「お前は何か欲いんだえ。」と云ひましたので「僕はこの國の王様の頭から三本の金色の髪の毛を貰ひたいんです。

行かなければなら

でない。僕はお嫁さんが貰へないんですよ。」と少年は答へました。

「それは飛んでもない望みだよ。あの人が歸つて来てお前を見ようものならお前はどんな事になるか知れやアしない。だが私はお前が此處にゐられるやうに助けて上げようよ。」と云つてお婆さんは少年を一匹の蟻にして仕舞ました。そして上着の髪所へ這ひ込ませました。かうなればまつ安全です。

「あ、それで安心しました。所で私は三つのことを知りたいのですがね。一つは噴水ですが、今までお酒を出してゐたのに今では水さへ出ないんです。——次は櫛ですがね、今まで金色の林檎を成らしてゐたのが、今では葉さへなくなつてゐるんです。——もう一つは船頭の事ですが、彼は始終前や後ろへ漕いでゐなければならぬので、どうしてもその事から逃れる事が出来ないのですと少年は云ひました。

てゐるからだ。誰でもそれを殺してしまひさへすりゃお酒は元のやうに出るんだよ。」
其處でお婆さんはまた巨人が眠つてしまふまで髪の手



「それはむづかしいお尋ねだが、お前は私が三本の金色の髪の手を抜く時に、王様が何んと云ふか氣をつけて聞いてゐるがいよ。」

「そして目が暮れて巨人は歸つて來ました。そしてやつと中へ入りました。その時巨人は部屋の中の空氣が澄んでゐないことに氣がつかしました。『臭いぞ、人臭いぞ。』と彼は叫びました。

「どうも譯しい。」と云つて巨人は隅々を細かく覗いて見ましたが、何も見つけることは出来ませんでした。

「何だね、私がちやんと片付けて置いたものを散らかしてさ。お前さんは自分の鼻の先に人間の匂ひをつけて來たんだよ！ お坐んなさい、そして夕飯でもお上り。」

其處にゐるお婆さんはかう云つて嘔吐しつきました。夕飯が濟びと巨人は疲れたらしく、

を梳いてゐました。そして彼が髪をかくて窓を顔はすやうになつた時、お婆さんは次の一本をグイと抜きました。「またか何をやるするんだ。」と巨人の王は怒つて云ひました。「お怒りでないよ。私はまた夢を見たのだよ。」と祖母

巨人の祖母さんは自分の膝の上に彼の頭をのせて、ほんの少ししかない巨人の髪の手を梳つてやりました。巨人は欠伸をして、眼瞼きをして、それからたうとう髪を吹き出しました。するとお婆さんは金色の髪の手を一本グイと抜きました。そして傍に置きました。「こらッ」と巨人は叫んで、何をやるんだ？」

「私は悪い夢を見たんだよ。それでうっかりお前さんの髪の手を一本抜いてしまつたのさ。」

と祖母さんは云ひました。「どんな夢を見たんだね。」と巨人は訊ねました。

「私は市場の噴水を夢に見たのだよ。その噴水は今までお酒を噴いてゐたのだのに、今は水さへ出ないんだよ。それは一體どうした譯なのかねえ。」

「そんなことがなんで知りたいんだ。あれはな、噴水の石の下に蟻が坐つ

さんは云ひました。

「今度はどんな夢を見たんだ。」と王は訊ねました。

「私は憶かに都の街を夢に見たよ。この街の果實の樹には以前は金色の林檎が成つてゐた筈なのに、今は一枚の葉さへないが、それは一體どうした譯なんだね。」とお婆さんは訊ねました。

「何故だつて！」と王は云つて、「鼠が根元に嚙りついてゐるからだよ。けれどもそれを殺してしまひさへすれば、

金の林檎は元通り成るさ。さうしないと鼠は終ひにはその樹の何から何まで嚙つてしまふだらうよ。さア、今度はこの儘殺せてくれ。若しまた邪魔をするよん撲られるよ。」

それにも拘らずお婆さんは王を揺ぶつて眠らせてしまふと、三本目の金色の髪の手をグイと引抜きました。すると王は大いに怒つて飛び上り、お婆さんを虐めようとした。併しお婆さん

和はらけるやうに云ひました。「誰か夢を見るのを止らるるだらう。」「今後はどんな夢を見たんだ。」と王はそれが知りたくなつて訊ねました。「私は船頭の夢を見たのだよ。彼は始終前や後ろへ漕がされてゐるが、いつになつてもたれからも救はれない。これはまたどうした譯なんだね。」とお婆さんは云ひました。「祖母さんは莫伽だな。」と王は云つて「誰か漕ぎ渡してくれ」と云つて来たたら、船頭は、權をその人の手に渡してしまはなければならぬ。さうすれば渡された人は彼方此方漕いで歩かなければならなくなつて、船頭は救はれるのだ。」



さア、これで、お婆さんは三本の金色の髪の毛もうまく抜いたし、三つの尋ねごとの考へも聞きましたので、巨人をそのまゝ、夜明まで寝かせました。朝になるとすぐお婆さんは、少年の蟻を上着の袷のところから出して人間の形に直しました。

「これでお前さんは王の頭から三本の金色の髪の毛が手に入つたと云ふものだよ。そして三つのお尋ねの答へも、お前さんの聞いてゐた通りさ。」

「はい、有難うございました。御恩の程は忘れせん。」と蓮のよい子供は云ひました。

そしてお婆さんの助けでくれた骨折を感謝しながら、巨人の國を出ました。この少年には本當に何事も運よくなるのでした。少年が船頭のゐる所まで来た時に、彼はさつきの答へをしてやる約束をしたのでしたが、

「まづ僕を漕ぎ渡して呉れ給へ。さう

してから君がどうしたら自由になれるか教へて上げませう。」と云ひました。

向ふ岸へ着くとすぐに少年は、「誰かがこゝへ来て渡して呉れと云つたら、君はその人の手に權を持たしてしまふがよい。」と云つて忠告をいたしました。そして彼は、始めの街に行きました。其處には實の成らぬ樹があつて、また其處には番人が少年の答へを待つて立つてゐました。それで少年はかう云ひました。

「樹の根に嚙りついてゐる鼠を殺してしまふがよい。さうすれば元通り金色の林檎が成るでせう。」

番人は大層喜んで、そのお禮として二頭の驢馬に黄金を一杯積んで贈りました。その驢馬をつれて別な街にやつて来ますと其處には平からびた噴水がありました。少年は其處の番人に巨人から聞いたことを話しました。「噴水の石の下に蟻蛙が坐つてゐるんで

すよ。君が若しそれを殺してしまへば元通りお酒が噴き出るでせう。」

番人は感謝して前の番人がしたやうに二頭の驢馬に金を一杯積んで贈りました。蓮のよい少年は間もなく家へ着きました。すると彼の花嫁さんは、彼の爲めにすべてが極くうまく行つて首尾よく歸つて来たのを大層喜びました。少年は王様から命令けられた所の巨人の頭からとつた三本の金色の髪の毛を王様に渡しました。その時に王様は四頭の驢馬に金が一杯積んであるのを見て大層喜んで云ひました。

「お前は私の云つた通りのことをしたのだから、私の娘と結婚するがよい。だがこの澤山の黄金は何處から持つて来たのか私に話して呉れないかね。」

私は川の向ふから持つて来ました。其處には砂のやうに地の上につばいがありましたので、私はそれを掬ひとつて来たのです。」と少年は答へました。

「私にもそのやうに取つて来られないかな。」と王様は慇懃い心で云ました。「取つて来られますとも。其處には一人の船頭がゐる、王様に向ふへ渡してくるでせう。そしたら王様は答物に一杯黄金をつめてくる事が出来るでございませう。」と少年は答へました。

慇懃い王様は大急ぎでその旅に出掛けました。そして川の岸に来ると、すぐに船頭に向ふへ渡して呉れと云ひました。船頭は王様を舟の中へ迎へ入れました。そして船頭は舟が向岸へ着くが早いか權を王様の手に渡して、自分は陸へ飛び上つてしまひました。

王様は止むなく船頭の仕事をしなければならなくなりました。そして王様は、今でも自分の罪の爲めに、彼方此方と漕いで歩かなければなりません。誰一人王様の手から權を受取るうと云ふ者も来ないので、王様はいつまでも始終漕いでゐるのです。(をばり)

白い蛇

三宅房子



昔 あるところに、それはく、賢い王様がおるでになりました。どんな事でも御存知の事はないといふ程でした。ですから王様には、どんな秘密でもひとりでに空中を通つて、お耳に入るのではないかと思はれておりました。

のまゝ、自分の部屋へ持つて行きました。

家来は部屋の錠をかたくおろして、そつとお皿の中を見ますと、白い蛇が上つておりました。

それを一と目見た時、家来は自分も食べて見たくて堪らなくなりましたので、一片切つて食べました。

ところが、一と口食べたか食べないに、細い聲でおしやべりしてゐる不思議な囁きの聲が閉えて来たのです。

家来が窓口へ行つて耳をすましますと、その囁きの聲は外の雀であることがわかりました。雀たちは野や森の中で聞きたいろ／＼のことを、おしやべりしあつてゐるのです。

さて、王様にはたつた一つ不思議な習慣があたりでした。毎日、お晝飯の時、御家来達が退つてしまつてお獨りにおなりになりますと、お氣に入りの家来が何かお皿に入れて持つて来るのです。そのお皿には、いつも布がかゝつてゐますので、外の者は勿論のこと、その家来でさへ何が入つてゐるのかわりませんでした。王様はお獨りにおなりにならなければ決してお皿の布をおとりにならないからです。

これが長い間つゞいてをりましたが、ある日のこと、家来はいつもの通りお皿を王様のところから下けて来ますと、急に中が見たくて見たくて堪らなくなりましたので、お皿をそ白蛇を食べたので、家来にも鳥や獸の言葉がわかるだけの方が出来たのでした。

ところが、この日、お妃様が一番大切にしてゐらつしやる指輪をお失くしになつたのです。嫌疑は例のお氣に入りの家来にかゝりました。王様は家来をお呼になり、明日中にそれを探し出して来なければ、牢屋へ入れてしまふからとおどかしになりました。

家来は自分でないことを、いろ／＼といひわけしました。が、何の甲斐もありませんでした。

悲しんだり、心配したりして、家来はお庭の方へ行きました。そして、どうしたら此の難儀から脱れることが出来るだらうかと思案してゐました。

見ると澤山の鷺鳥が小川のほとりに集つて、嘴で羽をこすりながら、氣持ちよさうにおしやべりし合つて、仲よく泳いでゐました。家来は鷺鳥のところへ行つて、そのおしやべりを聞いてゐました。鷺鳥たちはお互ひにその朝の出来事について話してゐるのです。

すると一羽の鷺鳥が不氣味さうに、

「何か重たいものが、私のお腹に入つてゐるんだよ。あんまりせいたので、今朝、私はお妃様の指輪を呑んでしまつた。」といつてゐました。

家来は急いでその鷺鳥をつかまへて、御殿のお意所へ持つて行きました。そして、料理番に、

「きれいな、太つた鷺鳥を持つて来たから、直ぐに料理しておくれ。」といひました。

「よろしうございます。」といつて料理番がお料理にかゝりますと、お腹からお妃様の指輪が出て来ました。

家来はすぐと、自分に罪のない證據を立てることが出来ました。王様は御自分が悪かつたので、家来に向つて何んでも欲しいものがあつたらやるし、また御殿の中で一番いゝ役にもしてやるとお約束になりました。

しかし、家来は外のこととはみんなお断りして、たゞ一匹の馬と、旅をするだけのお金を少しばかりいたゞきたいとお願ひをしました。家来は廣い世間を見に、暫くの間、方々を歩いて見たかつたのです。

家来の願ひはすぐに許されて、いよく旅に出ましたが、



ある日のこと、池のほとりに來ますと、三尾の魚が蘆の間に
はさまれて、もう今にも死にさうになつてゐた。魚は口
がきけないといはれてゐますが、家來には魚たちが今にも死
にさうなことを悲しがつて嘆いてゐるのがわかりました。家
來はなきけ深い男でしたから、馬から降りて、三尾を水の中
へ入れてやりました。

魚たちはクル／＼廻つて、喜んで首を水の上に出して、
「私たちは、あなたに助けていたゞいた事を忘れません。い
つかお禮をいたします。」といひました。

家來はまた馬に乗つて、どん／＼行きますと、しばらくし
て、足もとの砂の中にな言つてゐる聲を聞いたやうに思
ひました。ちつと耳をすましてゐますと、蟻の王様が怒つて、
「人間と獸めと早くあつちへ行つてしまつてくれ、ばい
い。妙な恰好した獸め！本當に情け知らずで、澤山のう
ちの家來達の上へ足をのつけてゐる。」と、いつてゐるのが
聞えます。

家來はすぐと傍路へ馬を向けましたので、蟻の王様は喜で、
「いつまでも覚えてゐて、きつと御恩を返しますよ。」と、大

きな聲でいひました。

今度は路が森の中へと通つてゐましたが、家來は夫婦の鳥
が巢の傍に立つて、子供たちを追出してゐるのを見ました。

「この畜生！ さつさと出て行け！ もうお前たちを養つて
置くことは出来ない。もう大いだから、自分で一人だちが
出来る歳だ。」

可哀さうな鳥の雛たちは、地面の上に横になつて、翼をば
たばたやつて泣きながら、

「私たちはまだ一人で食物をさがすことは出来ません。飛ぶ
ことさへ出来ないのです。お腹がすいて死んでしまふだけだ
す。」と、いつてゐます。親切な若者は、馬から降りて行つて
持つてゐる肉を鳥の雛たちにやりました。

「いつまでも忘れません。きつと御恩を返します。」と、雛た
ちは叫びました。

若者はそれからある大きな町へ來ましたが、町の中では大
騒ぎをしてゐます。馬に乗つた一人の男が、王様のお布告を
告げてゐます。

「王様のお姫様はお姫様をお探しになつてゐらつしやるが、

お姫様にならうとする者は、難しい仕事をやらなければなら
ない。しかし、もし、それをしちつた者は命がなくなる。」
と叫んでゐました。

これまでも、この難しい仕事を企てた者は大勢ありまし
た。しかし、みんなしくちつて命をなくしてしまつたのです。
若者はお姫様を見ますと、きれいなのに眼がぐらんだやう
になつて、どんなに危い事も忘れてしまつて、王様の御前へ
行つてお姫様になりたいと申し出ました。

若者はすぐと、海邊へつれて行かれましたが、見てゐる前
で金の指輪が水の中へ投げこまれました。そこで王様は、そ
れを海の底からとつて來いと御命令になつて、

「もし、指輪を持たずに陸へ上つてくれば、死ぬまで幾度で
も海の中へ投げこまれるんだ。」と仰ひました。

みんな此のきれいな若者のことを可哀さうに思ひました。
でも仕方がありませんから、皆なは海の端まで連れて行つて
若者を置いて來ました。

若者は海端でどうしたものかと考へ込んでゐますと、そこ
へ不意に三尾の魚が若者の方へ向つて泳いで來るのが見えま



した。その魚たちは、若者が命を救つてやつた事のある魚たちであつたのです。

真中の魚が口に貽貝をくはへて来て、若者の足もとの砂の上にそれを置きました。若者が取りあげて開けて見ますと、指輪が入つてゐました。大喜びで、若者はそれを王様のところへ持つて行きました。きつと王様は約束を果して下さるに違ひないと思つたのです。

けれども傲慢な王女は、若者が自分に釣合はない者であると聞いて、輕蔑して何かもう一つ外に、仕事をしてもらはなければいけないと言ひ出しました。

そこで、王女は自分で花園へ行つて、稗の入つた十の袋を草の中へ撒きちらしました。

『あの人はあしたの朝、お日様の昇るまでにそれを一粒のこらず拾はなければいけない。一粒だつて残してはいけない。』といひました。

若者はそんなことがどうして出来ようかと思ひながら、悲しさに花園の中に坐つてゐました。しかし、何にもいふ考へが出ないので夜明けになるのを悲しさに待つてゐました。

夜明けになれば、もう命がなくなるのです。

ところが、お日様の最初の光が花園を照した時、十の袋が口もとまで一ぱいになつてゐて、一粒だつて無くなつてゐないのを見ました。蟻の王様が夜のうちに澤山の澤山の蟻と一しよによつて来たのです。そして、恩を忘れない蟻たちに、稗を拾ひあげて袋を一ぱいにしたのでした。

王女は自分で花園へ来ました。そして、若者が仕事をしあけたのを見て腹をつぶしました。

でも、王女はまだ傲慢な心を抑へることが出来ないで、『あの人は二つの仕事を仕遂げたにしても、こんどは生命の樹から林檎をとつて来て、私のところへ持つて来なければいけない。さもないと、私の夫にすることは出来ない。』といひました。

若者はどこに生命の樹があるか知りませんでした。けれども、若者は足で行けるだけに行かうと思つて、出かけて行きました。しかし若者にはそれを探し出せる望みは全くないのです。

さて、若者が三つの國を通つて旅をつづけて行きますと、

ある晩、大きな森を通ることになりましたので、寢ようと思つて樹の下に横になりました。若者は木の枝の間で、何かガサ／＼音がしたやうだと思つて見ると、黄金の林檎が手の中へ落ちて来ました。同時に三羽の鳥が飛び降りて来て、若者の膝の上にとまつて、かういひました。

『私たちは死ぬところをあなたに救はれた鳥でございます。私ども、大いになりました。あなたが黄金の林檎を探しに行らつしやることを聞きましたので、海を渡つて世界の涯まで参りました。そこに生命の樹がございますので、林檎をとつて参りました。』

若者は大層喜んで、それを持つて戻つて行きました。そして、美しい王女にそれを渡しますと、流石の王女もそれ以上何もいふことが出来ませんでした。

王女と若者は、生命の林檎を別け合つて一しよに食べました。すると、王女の心はずつかり變つて、若者が好きになつて、それから一生楽しく暮らしたといふことであります。



狷はりねずみ

秋庭俊彦

昔一人の百姓がありました。お金もあり、地面もたくさん持つてゐて、暮し向きには少しも困らなかつたのですが、不仕合せなことに、自分のあと嗣ぎになる息子がありませんでした。そのため仲間の百姓達と市場へ出かけたりますと、よくみんなに息子のないわけを訊かれたり笑はれたりしました。或る時たうとう腹を立て、家へ歸つて来ると、
「どうしても一人子供がほしい。狷のやうな子供でも生めよ」とお神さんに云ひました。

すると、それから暫くして男の子が一人生まれました。それは體の上の方が狷そつくりで、下の方はあたり前の人間なのです。お神さんは、それを見るところとびつくりして、
「まあ、お前さんが飛んでもないことを云ふもんだから。」

「だが、今更どうも仕方がないよ。洗禮を受けさせなければならぬが、名前をつけないと牧師さんを呼ぶわけに行かない。」と亭主は云ひました。
「狷のハンスとでも名前をつけるより仕方がありませんね。」とお神さんが云ひました。
牧師さんが来て、洗禮を済ますと、
「この子は體に針が生えてゐますから、普通の搖籃ちや眠れませんかよ。」と云ひました。
そこで暖爐の陰に小さい藁の寢床を敷いて、その上に寝かしました。その子は八つの歳になるまで藁の上に寝たつきりでした。その間に父親はこの子が厭になつて、死んでくれ、ばいゝのにと思ひました。けれども、子供は死ぬどころでは

なく、すや／＼と眠つたやうにしてをりました。

或る日、百姓は近くの町で開かれる市に出掛けようとして買物の用をお神さんにきゝますと、お神さんは小さい肉の片と巻パンを買つて来てくれと云ひました。次に女中にきゝますと女中は壺と靴下とを買つて来て貰ひたいと云ひました。一ばんお終ひにハンスに何か欲しいものがあるかときゝますと、

「お父さん、僕には笛を買つて来ておくれ。」と云ひました。亭主は市へ行つて、お神さんには肉とパンを、女中には壺と靴下を、狷のハンスには笛を買つて来ました。ハンスは父親から笛を貰ふと直ぐに、
「お父さん、納屋へ行つて、僕が乗つて行けるやうに雄鶏に鞍と手綱をつけて来て下さい。僕は何處かへ行つて、もう歸つて来ないでもいでせう。」と云ひました。

父親はこの子供が家を出て行くときいて喜びました。そして雄鶏に鞍と手綱をつけてやりました。狷のハンスは支度が出来ると、それに乗つて、森へ行つて伺ひならすために、牝豚と驢馬とを連れて出て行きました。ところが、森へ行く

と、雄鶏がハンスを背中に乗せたまゝ、或る高い樹の上に飛びあがりました。

それから何年かの間、ハンスは牝豚と驢馬とを伺ひながら、その数がたくさんに殖えるまで、樹の上で番をしてをりました。さう云ふ間にハンスは樹の上に坐つて、始終笛を吹いてをりました。それがだん／＼美しい音色になつて行きました。

すると或る時、一人の王様が馬に乗つてその近くを通りかかりました。王様は森で路に迷つて、誰れかに路をきゝたいと思つてゐるところでしたから、笛の音が耳に入ると、不思議に思つて、何處で笛を吹いてゐるのかと家來に探させました。家來達は方々探してから、樹の上に雄鶏のやうな形をした動物がゐる、狷がその背中で笛を吹いてゐるのをやうやく見つけました。王様は、どうしてそんな處に坐つてゐるのか、自分の領地へ歸る路を知つてはゐるのかと家來にきかせました。狷のハンスは樹から下りて行つて、

「王様がお城へお歸りになつた時、一ばん最初に王様をお出迎へになつた人を私に下さると云ふ書附を下さい。それなら

道をお教へいたしませう。」と云ひました。

王様は、何と書いておいてもこんな奴に字なんぞ讀めるものかとお考へになつて、ペンとインキを取つて、何やらお書きになりました。それをうけ取ると、ハンスは路を教へましたので、王様は無事にお城へ歸ることが出来ました。ところが、王様のお姫様が遠くから王様の姿を見つけて、その嬉しさに夢中になつて、駆け出してお出迎へしながら王様に挨拶しました。

その時王様は、猫のハンスのことを思ひ出して、森で出会つたことや、最初自分を出迎へに出た人をその不思議な動物にやらうと約束したことや、その動物が雄鶏の背中に坐つて笛を吹いてゐたことを王女に物語りました。

「けれども、わしは最初に出迎へに出た者をやりはしない。ハンスにはわしの書附が讀めはしまいから。」と王様は仰しやいました。

王女はそんな動物に連れて行かれるのは厭でしたから、それはうまい具合になさいましたと王様をほめました。さて猫のハンスの方は、相變らず家禽や家畜の群を飼ひな

てお渡しになりました。

書附をうけ取ると、ハンスは雄鶏に乗つて、王様の先に立つて路を教へました。そのお蔭で王様は直ぐにわけなく自分の領地へお着きになりました。王様の姿がお城から見えると



がら、樹の上で笛を吹いて遊んでをりました。ところへ或る日また、大勢の家來をつれた別の王様が、森の廣いために歸り路に迷つて、その邊を通りかゝりました。王様は遠くから笛の音をききつけると、家來に向つて、

「笛を吹いてゐるのは何者か見つけて來い。」と、仰しやいました。

家來が樹の下へ行つて見ると、その上に雄鶏がとまつてゐて、その背中に猫がをりましたので、そこで何をしてゐるのかときゝますと、

「私は家畜の番をしてゐるんです。何か御用ですか。」と猫は答へました。

王様の家來は、領地へ歸る路がわからなくて迷つてゐるが、お前はその路を知らないかと訊きました。ハンスは樹から下りて行つて、

「王様がお城へお歸りになつた時、一ばん最初にお出迎へになつた人を私に下さるなら、お教へいたしませう。」と年取つた王様に向つて云ひました。

「宜しい。」と王様は仰しやつて、御自分で約束の書附をかいみんなは喜びの聲をあげました。王様のたつた一人娘の大へんに美しい王女は、懐しいお父様のお歸りになつたのを見ると、嬉しさに夢中になつて、お出迎へに駆け出して王様に抱きついたり挨拶したりしました。そしてお父様はどうして長いこと旅にいらしたのかと訊きましたので、王様は、森で路に迷つて、もう歸れないかと心配したことや、半分猫のやうな半人間のやうな動物が高い樹の上で美しい音楽をやつてゐたことや、その動物が木から下りて来て、自分がお城へ歸つた時、一ばん最初に出迎へに出た人を呉れよばと云ふ約束で路を教へてくれたことやを王女に物語りました。そして一ばん最初に出迎へに出たのは、この王女でしたから、王様はそれを悲みました。王女は暫く考へてから、もしその動物が來たら、私はお父さんのことを大切に思つて、その動物と一緒にいきますと約束しました。

猫のハンスの方は、やつぱり豚を飼つてをりましたが、森一めんになる程たくさんの数が殖えますと、もう森で暮らすことをお止めにして、自分の父親のところへ手紙をかい、

さん連れて行きますから、村中の家畜小舎を掃除しておいて下さい。」と云つてやりました。

この手紙を見て、父親は悲みました。それは息子のハンスはとうに死んだものと思つてゐたからです。間もなくハンスは雄鶏に乗つて、家畜の群を追ひ立てながら歸つて来ました。その時には八哩先きからでも、その騒がしい呻吟聲が聞へるほどでした！ 狛のハンスはほんの一寸の間しか家に入るませんでした。ハンスは納屋へ行つて、雄鶏に鞍や手綱を新しくつけ直して、又もや出て行きました。父親は、今度はもう歸つて来ないにちがひないと喜びました。



ら、決して城へ入らぬやうに、砲で打つて、切り殺してしまへと命じてお置きになりました。ですから、狛のハンスがやつて来ると、家来達は銃剣でハンスをとり圍みました。けれど、ハンスはばつと門を飛び越へ、お城の窓のところへひよいと飛び上つて、そこへつかまりながら、約束の人を呉れなければ、王様と王女とを殺してしまふと云ひました。王様は驚きながら王女に優しく云ひ聞かせて、命の助かるために一緒に行くやうにと仰しやいました。王女は眞蒼になつてゐましたが、やうやく承知しました。

狛のハンスは先づ初めに會つた王様のところへ行きました。王様は兼ねてから、雄鶏に乗つて笛を持った奴が来た

もうあの二人に出會ふやうなことはないにちがひないと思ひました。丁度王様がかう思つた時、二人は都を少し出端れたところでしたが、狛のハンスは不意に王女の肩掛をひつたくつて、體の針で王女を突きさしながら、

「これがお前の馬鹿の報ひだ！ 歸れ、俺はもうお前なんぞに用はない。」と云つて、王女を追ひ返しました。

狛のハンスは雄鶏に乗り、手に笛を持つて、今度は次の王様のお城へ行きました。この王様は兼ねてから、狛のハンスらしい動物が来たら、門番は掛け銃をやり、自由に通して、お城へ案内するやうに、お命じになつて置きました。王女はハンスが来たのを見ると、あんまり奇妙な姿なので、最初は恐がつてゐましたが、王様の約束を思ひ出して、氣をおちつけました。

王女はハンスを出迎へして、そのお嫁さんになりました。それから並んで宮殿の食卓に坐つて、いつしよに食事をしました。夜にたつて寝る時間が来ると、王女はハンスの體の針が怖いと云ひました。

「怖がることはない。ちつとも、害はしないから。」とハンス

は答へました。

それからハンスは王様に向つて、

「部屋の前へ置きますから、その時四人の男が部屋へ駈けこんで、その皮をすつかり燃してしまふやうに云ひつけて下さい。」と云ひました。

やがて時計が十二時を打つと、狛のハンスは部屋へ入り、狛の皮をぬいで寢床の前へ置きました。それと一緒に四人の男は部屋へ駈けこみ、皮をつかんで火に投げこみました。それが燃えついた時、ハンスの體は自由になり、普通の人間の姿になりました。でもまだ石炭のやうに黒く焼けすけて寢床へ横になつてゐたので、王様は聲者をお呼び出して、皮を白くさせる値段の高い香油でハンスの體を洗はせました。するとハンスは、すっかり綺麗な若者になりました。王女はそれを見ると、跳びたつ程喜びました。

その翌日、ハンスと王女はお祭のやうな結婚式を挙げ、その後、年取つた王様から望をゆづられました。(をばり)

人車と粘土細工の自動車で

講師 沖野岩三郎

二月十九日の朝八時卅六分に千葉縣長生郡茂原驛に着きました。驛には豊榮小學校の安藤先生が迎へに来て居て下さいました。驛の前から豊榮小學校まで一里半ばかりの道を「人車」に乗つて行きました。「人車」といふのは「馬車」の馬を人に取代たもので、馬は車の前になつて走るが、「人車」は人が車の後に纏つて車を押すのです。ひどく車が揺れるので硝子窓が毀れたり、時々脱線したりしました。

九時半に豊榮小學校へ着きましたが、恰度學藝會があるので、それを參觀しました。全體のプログラムは談話が十三と唱歌が十一と朗讀が一つと劇が三つありました。私は今迄随分澤山の學藝會を見ました。

したが、其の談話が太抵朗讀口調であるのに不満を抱いて居ました。所が此の學校兒童の「おはなし」は本當に私の常に考へてゐる通りの「はなしぶり」でしたから非常に嬉しうございました。唱歌は練習が足りなかつたと見え、尋常四年の「とんび」の外は失敗でした。唱歌劇や對話劇も此次には、もつとく上手になる餘地がありました。

十二時卅分前から私は童話を初めましたが、何さま聴衆は朝から四時間も休みなしの打ッ通しの後だったので、たうとう私は最後の五分間を持ちこたへられないうで打ち切りました。失敗も失敗、大失敗の講演でした。午後は三時まで學校の先生達と童話に就いて語り合つて、又た

「人車」に乗つて茂原へ歸りました。二月廿日は、朝からひら／＼と雪が降りました。私は十時卅分に茨城縣の高濱驛へ着きました。其所には小川町の小學校の先生が迎へに来て下さいました。驛の前の旅館へ行つた時、私は不思議なものを見ました。それは粘土細工の自動車です。お伽噺にでもありさうだと思つて能く／＼見ますと、それは道が悪いので車體も概も皆な赤土まみれの、現んこになつてゐるのだと知れました。運轉手さんのコールテンのズボンも羅紗の上衣も毛織の帽子も皆な泥だらけなんです。

私達はそれに乗つて小川町の學校の門前まで行きました。一千人の生徒さん達は、もう會場に入つて私を待つて居ました。私は最初五十分間話して、尋常三年以下を歸らせて貰つて、其後に四年生以上に対つて一時間と廿分話しました。

こゝでは私と生徒さん達との氣分が、しつくり合つて御互ひに満足しました。

此所の山崎校長は、昨年まで同縣の池原小學校に居られて、一度私をお招き下さつたお方でした。それから此の學校には金の星詠友の大越親といふ先生が居られました。

二月廿一日は午前十時四十分にて茨城縣の大妻驛へ着きました。同驛には私の友人である五來孝顯といふお醫者様が、

金の星の愛讀者であるお子様二人をお伴れになつて迎へに来て下さいました。面白い程揺れる馬車に乗つて細の中の路を學校の方へ走る時、私は腰掛の下にパネ仕掛けでもしてあるのではないかと思つて、調べてみましたが、何にもありませんでした。愉快に乗客をスプリングさせる馬車でした。此の學校も昨年の今頃

来た事があるので、私を能く知つた生徒さん達は、非常に歡迎して下さいました。私は十二時半から二時前まで話しました。私の話の終つた時、野口先生が見えられて、童話教育についてのお話がありました。會のはてたあとで、寫眞を撮つて別れました。そして強く吹つける東風の中を驛の方へ急いで、恰度四時二分發の汽車に乗る事が出来ました。



三月中の講演部の仕事



沖野先生旅程

- ▽福島市 三月 一日 二日
- ▽仙台市 同 三日 四日
- ▽鹽釜町 同 五日
- ▽白石町 同 六日
- ▽二本松町、本宮町 同 七日

三月一日からはじまつて講演部は大層な忙しさで、沖野先生は仙臺、福島を中心に各地の盛んな講演會へ招聘を受けて出張なさいましたし、野口先生は奈良を中心としてお活動になります。今の確定してをります場所と日とは凡そ下記の通りであります。

金の星講演部規定

「金の星」講演部は童話と童話の新しい運動の先頭に立つて、これまでも目覺しい活動をつづけて参りました。しかし、今後は尙一層大きな活動をつづける覚悟でありますから、講演御希望の方は左記を御覽の上金の星社宛にお申し越し下さい。

○講師は、童話は沖野岩三郎先生、童話及び野口雨情先生が擔任されます。童話なり童話なり、御招聘に應じて講師が出張いたしますが、他に講師のある場合は成るべくお断りいたします。

○講演は先生方のお仕事の都合上、なるべく十五日から二十五日の間に制限いたします。出張費用等はお問合せのあり次第お返事いたします。

◆童謡十講 (野口雨情先生著) 長い間希

待されてゐた野口先生の苦悶の著だけに眞に唯一つの童謡の寶典といふことが出来ます。童謡についての立派な研究書がないので、童謡の研究者は非常に不便を感じてゐましたがこの本が出来て凡て童謡のことは何でも解るやうになりました。全體を十講に分けて丁寧なわかり易く説明してありますが、附録には「野口雨情作風集」が添へてあるので研究者には非常に便利です。尙「補遺」として「童謡界の現在」が附いてゐて各地の童謡運動が一目して解るやうになってゐます。(四六判三一〇頁金の星出版部發行 定價壹圓八十錢送料十四錢)

◆童謡教育の實際 (野口雨情先生序、黒田正氏著) 著者黒田氏は仙 市にあつて長

い間童謡を研究し、童謡を教育に採用して多大の功績を挙げられた熱心家で眞面目な教育者です。本書は著者が自己の實地指導上より得られた、尊い生きた研究の發表ですから、童謡を教育に採用しようとする小學校の先生方の爲めに、また一般父兄方の爲めに此の上ない参考書であります。(四六判二一八頁、定價上製一圓二十錢並製九十錢 神田錦町一ノ一米本書店發行、(發售日座東京五二三三九)

◆家庭用兒童劇 (坪内逍遙氏著) 兒童劇は

坪内先生の熱心な御盡力で念に盛になり、たが、本書は同先生の御苦心になつた兒童劇を集めたもので、最も注目すべき本です。小供さん誌自身のことの出来る劇ばかりに纏むるために演じることの出来る劇ばかりが十二集つてゐます。此の本を讀めばどんな家庭でも小供さん達が集つて繰り手輕に愉快にお芝居ができます。道具や背景や假面の作り方まで親切に述べられてゐます。(四六判一九七頁、定價二圓二十錢、東京早稲田大學出版部發行 振替東京二二三)

◆新譯グリムお伽噺 (中島孤島先生譯)

グリムお伽噺と云ふ譯された物語四十一篇を選んで、中島先生が非常の努力を以て譯されたものが重版になつてまた發賣されました。文章の解り易く美しいのは申すまでもありませんが、岡本先生苦心の裝幀は美しくして目もくらむほどです。巻頭には「グリム兄弟の」と題して、グリムお伽噺の解説に代へて長い親切な序が添はれてゐますから、これを讀めば有名なグリムお伽噺の由來がよくわかります。なほ岡本先生の美しい面白い挿畫が十二枚附いてゐます。(菊版四八四頁、定價三圓八十錢、神田通神保町富山房發行、(發售東京五〇一番)

◆船のリンドンパッド (小島政二郎、久米正雄両先生著) 新らしい童謡の第六篇

です。船のリンドンパッドは、かのアラビヤンナイトの中にある有名なお話から材料を選んだもので、此上もない面白いお話です。著者は序文で「書くにあつたのは言葉の吟味に疲



編輯室より

△そろそろ春めいて参りました。寒い中にもどこかサカサカとした暖かさを感じて、もう空の向ふに春が忍びよつてゐる感じが思はれます。ガラス戸に囲まれた編輯室に射し込むお日様の光りまでが變つて來ましたので、仕事をししてゐながらも、本當にうれしい感じがいたします。

△グリム號はほどほど決定通り出來まして編輯員一同ホツトいたしました。たゞ小山内先生のお作だけが間に合はなかつたのが残念です。岡本先生の劇は先生の處女作だけに興味の深いものだとす。

△豫告には「島になつた王妃」となつてをりました。先生の御都合上、「お利口なカチリ」に變りました。挿畫家としてはばかりでなく、劇作家としての岡本先生がこの作によつて明かになりました。

△中島先生の「グリム兄弟の話」もグリム號

として面白い記事だと思ひます。グリム兄弟といへば、世界の小供さん達が皆な知つてゐる程有名な童謡のおぢさんである事はわかつてゐますが、さて、グリムといふ人ばどんな人だつたかといふ事に就てはあまり知られてゐないやうです。

△しかし、中島先生の紹介で、グリム兄弟がどんな人だつたかといふことは十分おわかりになつたでせう。ことに、グリムの銅像が出來た時、ドイツの少年少女たちがお小遣を割いて寄附金に出したといふ話は實に感動を興へます。これと思ふにつけても日本にグリムの様な偉い作家のない事は悲しい事ではありませんか。しかし、日本にもグリムに負けな

いほどの作者は一人や二人はある筈です。ただ、熱心に、グリム程に力を入れて童謡のために盡す人がないのです。早やうさういふ偉い、そして熱心な人が出てくれる事をわがつてゐます。

△こんど編輯部の事務發展のために新に山野虎市さんといふ方が入社されました。山野虎市さんは長年牧師さんをなさつた方だけに「金の見」の爲には最も適人です。今後編輯の仕事も擔任されます。春、早々東京市内で大々的に讀者大會を開く外に、各区内でも主だった會場で會を開く決定になつてをります。地方へも勿論出張いたします。

△二月と三月にかけて講演部は非常に多忙で、招聘を受けた千葉縣と茨城縣の各地へ童謡の講演に出發されました。野口先生も九

州地方からの講演から歸られまして、茨城縣の外の各地の童謡講演にお出かけになりました。尙、沖野先生は、「たん御覽京になつて二月二十八日から再び福島、仙臺、白石、二本松、本宮地方の盛大な講演會の招聘を受けて出發されます。尙四月には四國の方面をいよいよお歩きになる筈であります。

△野口先生選の募集齋藤も、又若山先生選の幼年詩もこれまで餘り載せることが出來ないでをりました。



—水島保爾先生—

がこれからは頁のゆるす限り澤山佳作を掲載する予定であります。

△新年號以來「金の星」はますます發行部数を増やさなければ足りな

◇通信

岡本 歸一

讀者の皆様のご協力ですが、社員一同これに力を得てよく努力いたしてをります。本年中には驚くべき發行部数になることと喜んでをります。(一記者)

△岡井信一君、先月號では全く大變な失敗をして下りました。しかし、おかげで氣の弱い私は、食ひました。しかし、おかげで氣の弱い私は、食ひました。しかし、おかげで氣の弱い私は、食ひました。

へこますことは少し可哀相だ。私の故ぢやない。全く一回一回来るので、後を讀んでみなければわからないから。今度はそんな澤ですから、どうぞ御手やばらかに。三年島の故だから何處だかわかりましたか。△その外の方からもたより頂きました。ありがたう。大變皆さんからいたたいたのが楽しみです。

金の星誌友の創作募集

「金の星」は毎月童話、童話、及児童創作の研究雑誌として、四六判四倍大の美しい雑誌「小馬」を發行いたします。就ては下記の規定に従ひ、特に「金の星」誌友の方々の創作研究を募集いたします。どうぞ苦心のお作をどしどし御投稿下さい。

一月號 少年少女の自作童話に就て

一月號で少年少女の方々の自作童話を募集しましたところ、五百二十六篇といふ大多数の応募がありました。なか／＼面白い、面白い作品が多くて、募集の目的を十分に達する事が出来たのは、まことに嬉しい事です。

出版部から

野口雨情先生の『童話十講』がいよいよ出版されました。二月中に發賣の豫定でありましたが、印刷所の都合で少し延びまして、三

「金の星」誌友募集

「金の星」の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典がございますが、第一に童話童話及児童創作の研究雑誌「小馬」を毎月無代で差上げます。そして、誌友に限り「小馬」に投稿の特権があります。尚、この外にもいろいろの御便宜がありますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速にお送り申上げます。

月はじめに出版になりました。出版前から大層な評判だけに飛ぶやうに賣れております。野口先生はその後童話に就いて、いろいろ／＼新しい御研究をなさって、新たな材料が澤山にお集りになったさうでございますから、近い内にこれも一冊にまとめて『續童話十講』として發表することになっております。尚、本年中には此の外に野口先生の童話集が一冊、外に「童話教育」に就いての先生の深い御研究をまとめて一冊と、合せて二冊の本が出版部から出る豫定になっております。また、岡本歸一先生の畫とお話の本も遠く

△今度から「小馬」の自由畫の選を私がする事になりました。誌友諸君のいゝ仕事を澤山送って下さい。待つてあります。しかし忘れずに一枚一枚の裏へ必ず住所を委しく、姓名をくづさず判然と、それから讀を書く事と、もう一つ題を書いて下さる事と、この四つを忘れずに、それから箱の方へあまり字を書かない様にして下さい。いゝですか。

少年少女自作童話佳作

- 規 定……凡て「金の星」の創作募集と同様です。但し原稿に必ず「小馬」と原稿とお記して下さい。
- 童話……野口 雨情選
- 幼年詩……岡本 歸一選
- 自由畫……齋藤佐次郎選
- 童話……齋藤佐次郎選
- 兒童の創作に關して……編輯部選
- 研究、論說、隨筆……三月廿五日締切

ない内に出版部から出るようになっております。お話を讀む全部新しくお書きになるのですから、岡本先生としても非常な御努力でございます。それだけにさぞ美しものが出来ることとございませう。

童話讀本は各方面から非常な御歡迎をうけました。お話し、ひ作者といひ、これほどもつてこの方がないので、こんなに歡迎をうけたのでありませうが、童話讀本といふものがどんなに今の世の中に必要であるかが、

私によつても説明されたやうに思はれます。私とはどうかして、此の仕事に成功して廣く新らし藝術と道徳とを示して行きたいと思つております。第一篇の『赤い猫』は特に八十五錢といふ特別の安價で發賣されることになりました。

「金の星」二月號で矢倉チ子さんの幼年詩が一度に三篇も推薦されたことを皆さんは御承知でございませう。その矢倉チ子さんの幼年詩集を母校和歌山縣由本小學校で記念出版をしたいと出版部へ申込んでおいでになりましたので今や計畫中であります。

金の星新誌友

- 北海道 國枝ヨシ子様 ○長野 兒島榮治様
- 東京 船岡四郎様 ○新潟 渡邊直一様
- 新潟 皆川四代吾様 ○茨城 平戸都治様 ○青森 坪田繁樹様 ○岐阜 柴田美穂様 ○東京 柳重徳様 ○東京 平井徳太郎様 ○長野 矢下清榮様 ○東京 新井静一郎様 ○長野 中村鹿之助様 ○東京 小林千代子様 ○千葉 若林芳雄様 ○新潟 青木賀孝様 ○京都 中村政一様 ○京都 大槻錦華様 ○大阪 岸本茂樹様 ○茨城 誠一様 ○三重 倉田一郎様 ○朝鮮 余峻
- 茨城 岡田 鳩貝文一郎様 ○北海道 川瀬弘
- 徳島 鍛冶勝幸様 ○徳島 佐々木丈二様 ○小野光様 ○長野 市村一郎様 ○北海道 柳澤静子様 ○北海道 西澤茂樹様 ○東京 三浦良幹様 ○福島 丹治春治様 ○盛岡 岩井清
- 東京 花 美世子様 (以下次號)



読者だより

▼拜啓 随分悪い風が流るやうですが、先生方には御健全の御事と存じます。先づ『金の星』が日と共に大きな勢で発展しつゝあるのな心からおよろこびたいします。私は前の『金の星』時代から、月々の御誌でどんなにたのしまされたことであらう。『金の星』は淋しい私にとつて、たしかに喜びの明星です。私のよろこび、幸福、すべて『金の星』から生れて来るのです。中略野口先生を始め諸先生にもよろしく。東京 米山星二郎

▼先日は美しい『金の星』のエハガキをいただいた。何ともお禮の申し様がございませぬ。こんど誌友の研究機関誌『小馬』を創刊されるの事、ほんたうに心の底から感謝いたします。一刻も早く可愛らしい『小馬』の生れるのを待つて居ります。ではさようなら。さようなら。(東京 福島善子)

▼先づ『金の星』誌友にして下さった事と綺麗な『金の星』エハガキをお送り下さった事を御禮申し上げます。包紙を破るのも、もどかしなく、取出して表紙を見るなり實際うっとりして仕舞ひました。どうしてこんなに子供らしく描けるが岡本先生が凄まじくとなりません。さつそく童話童話を夢中で讀んだは勿論の事、讀者だより送すつかり讀み終つてはつと一息つきました。そこでお禮が書きたくなつたのです。もう一度大きな聲で『書藤先生を始め記者様どうも有がたうございませぬ』(東京 新井青二)

細うございませぬ。たつた一つの楽しみは、毎月兄さんが、美しい『金の星』を送つて下さる事でございます。昨日も、今日も郵便屋さんが次號を持つて来るのを待つて居るのでございませぬ。(長野縣湖南校 小林キリノ)

▼先日は美しい『金の星』のエハガキをいただいた。何ともお禮の申し様がございませぬ。こんど誌友の研究機関誌『小馬』を創刊されるの事、ほんたうに心の底から感謝いたします。一刻も早く可愛らしい『小馬』の生れるのを待つて居ります。ではさようなら。さようなら。(東京 福島善子)

▼先づ『金の星』誌友にして下さった事と綺麗な『金の星』エハガキをお送り下さった事を御禮申し上げます。包紙を破るのも、もどかしなく、取出して表紙を見るなり實際うっとりして仕舞ひました。どうしてこんなに子供らしく描けるが岡本先生が凄まじくとなりません。さつそく童話童話を夢中で讀んだは勿論の事、讀者だより送すつかり讀み終つてはつと一息つきました。そこでお禮が書きたくなつたのです。もう一度大きな聲で『書藤先生を始め記者様どうも有がたうございませぬ』(東京 新井青二)

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……………山本鼎先生選
幼年詩……………若山牧水先生選
綴方……………編輯部選

〔意注〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年または住所と年齢とともにおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるだけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるだけ原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は三月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は五月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地の星社。

◆一般讀者の創作◆

童話……………齋藤佐次郎先生選
童話……………野口雨情先生選

〔意注〕 童話は二十字詰三百行以内、童謡は十五行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして、「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹册 參拾錢 送料壹錢
三ヶ月分三册（送料共）九拾錢
半年分六册（送料共）壹圓八拾錢
壹年分十二册（送料共）參圓六十錢
但し四月號九月號は特別號で卅五錢
年號は四十錢ですから、御註文の際は
この分だけ必ず加へてお拂込み下さい
振替口座東京五九五六番

〔送〕 御註文は必ず前金で御拂込み下さい
〔送〕 送金は振替が一番便利で御座います
の▽切手代用は（金銭切手）一割増しです
〔注〕 第何巻第何號よりと書いてください
▽住所姓名は必ず書き書いてください
廣告料は御覽會次第お答へ致します

大正十二年三月六日印刷納本（毎月一日發行）
大正十二年四月一日發行（行）一日發行
編輯兼發行人 齋藤佐次郎
東京市外田端三百五十一番地
印刷所 大橋光吉
東京市小石川大塚町百八番地
印刷所 株式博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
發行所 金の星社
振替口座東京五九五六番
電話小石川五三八七番

野口雨情先生新著

◆定價壹圓八拾錢

◆四六制箱入美本
◆送料十四錢

童謡十講

◆お待ち兼ねの野口雨情先生の「童謡十講」が出来ました。本書はわが國童謡界の最高權威、野口雨情先生が多年の研究を傾けつくした名著であります。
◆現代の童謡から説き起して、童謡の歴史的變遷、正風童謡、童謡教育、郷土童謡等に及び、童謡創作上の注意、藝術的童謡の見分け方等に至るまで、一々實例を擧げて、丁寧懇切に論じてあります。

◆一たび本書を手に入れば、何人でも童謡の全體に就てあまねく知る事が出来、直にその眞髓を體得することが出来ます。
◆童謡研究者の座右には是非なくてはならない寶典であります。

童謡の寶典

東京野口公園前 金星出版部
電話 東京六六八番
電話 東京六六八番
電話 東京六六八番

沖野岩三郎先生作 ◇ 岡本歸一先生装畫

長篇 物語 父戀し

初版再版忽ち賣切れ、遂に三版が發賣されました。少年少女名作物語りの第一篇として賣出されたる『父戀し』は全く飛ぶやうな賣れ行きです。

定價 壹圓
 ◇送料十錢◇
 ◇四六判箱入美本◇

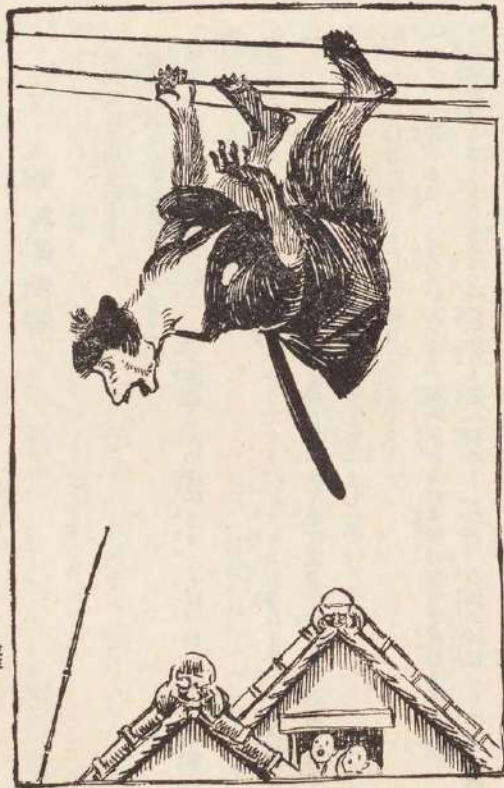
金の星童謡曲譜集

◆本居 長世先生作曲 各冊六曲入り

野口 雨情先生作 定價金六十錢
 岡本 歸一先生装幀 送料四錢

第一輯 人買ひ船 再版
 第二輯 一つお星さん 再版

『金の星』 第二巻 第四號 大正十二年三月六日印刷 同年四月一日發行



東京 下谷 野公 前
 振替 東京 六谷 一七〇番
 電話 六八二番
 金の星出版部

「木の實は上出来ですネ。」

「地面が見えない程落ちてゐますネ。」

鈍栗山から出て来た法性院と、與兵衛爺さんの所のチョンとは、かう言つて丁寧に挨拶をいたしました。

「法性院様、今日は少しく疋数が多いやうですネ。」とチョンが尋ねますと、法性院は「この間犬の鳴聲を聞いたので、今日は嫌だといつて出て来ない者も五六疋あつたやうですが、一體何疋来て居るのか知らず」と答へました。

「第一回には廿一疋でしたが、今日は何疋です。」

「さア、何疋だか教へて見ないんです。第一回よりは多勢だらうと思ひますが。」

法性院は、さう言ひながら一疋二疋と數へ初めましたが、小猿共は枝から地面へ跳び降りたり、表から枝へ跳び渡つたりして、何度數へても、廿五疋であつたり廿

八疋であつたり卅疋であつたり、また十五疋に減つてしまつたりするので、さすがの法性院も腹が立つたと見え、顔を眞赤にして、

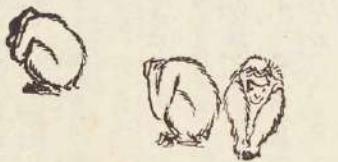
「こら！ 靜にして一つ所に居ろ！」と唝鳴りましたが、吐れば吐る程小猿共は騒ぎ出しました。それを見たチョンは、

「法性院さん、僕は學校で教師が人間の子供を教へてゐるのを見ました。それは子供をずらりと一列に並べて置いて、向つて左の端から番號を呼ばせるんですよ。」と申しました。

「番號を呼ばせる？ そいつは面白い。ではチョン君、君に頼むから、一つやつてみて呉れないですか。」

法性院は頭を掻きながら申しました。

「宜しい、では、僕が數へてみます。」と言つたチョンは得意氣に、猿共を皆な丘の廣場へ連れて行つて、其所へ一列に並べました。そして番號を呼ばせようと思ひましたが片一方の方「五……と言ふと、一番お終ひに居るのが、六……と言つたり真中に居る



のが七……と云つたりしま
すから、

三六

「そんなに減茶々に言つてはいけない。順々に言ふのだよ。」と叱つて、又た最初から番號を言はせました。が、何でも早く次の數を言つたものが偉いと思つたものか五疋も六疋も一度に争つて番號を言つてしまひますから、チヨンはほとく困つてゐましたが、一策を考へ出したと見え、

「皆な圓形になれ！」と嗷鳴りました。しかし多勢の猿は、圓形になれと聞いた時、それは各々が圓くなるのだと思つたので、何十の猿は皆な首を兩手の間へ突込んで



括り猿のやうにまん圓くなつて、きやッ／＼言つて喜びました。中には毬のやうに落葉の上をころ／＼轉がるのもありました。

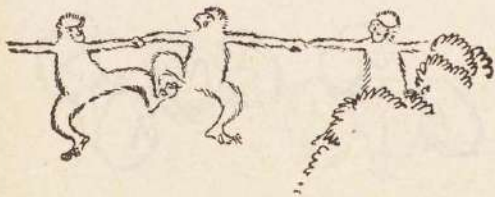
「圓形になれといふのは、皆なが手を繋ぎ合つて、輪になるのだ！」

チヨンは兩手の指で圓い輪を作つて見せました。多勢の猿は、やつと圓形の意味が解つて、皆な兩の手を繋ぎ合つて輪になりました。で、チヨンは圓形の真中に立つて、丁度自分の前にゐた小猿の方を指さして、

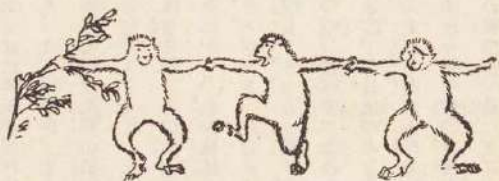
「君が一番だ。君から順々に番號を言ふのだ。前の猿が言つてしまつてから其の次の猿が言ふのだぞ。必ず順々だぞ！」と申しました。

そこで椎の木の前の所にゐた小猿が、一と大きな

三七



三六
聲で言ひますと、次々に二一 三一 と うまく秩序が
立つて番號が唱へられました。しかし三十、五十、六十
……八十、九十、百まで言つても、お終ひになりません。
「まて〜變だぞ?」と言つて、チヨンは考へてみました。
その時、隣りの栗の樹の枝から法性院が、
「チヨンさん、圓形になつて手を繋いでゐるから、ぐる
ぐる〜何度も廻つて來るんだよ。一疋が二度も三
度も番號を言つてるぢやないか。そんな事をしてゐる日
には、何百年経つても果しはありませんよ。」と、申しま
した。
「では、どうしませう?」
チヨンも善い智慧が出ないので頭を傾けてゐました。
すると法性院は枝の上から、



三七
「雲林院の孫! お前は其所の榊の枝を右の手で確かり
握つてゐろ! それから清蓮院の息子は、あしこの躑躅
の株を左の手で掴んで居ろ!」と申しました。
「あア、さうですネ、それは善い工夫です。」と言つて、チ
ヨンは早速、雲林院の孫を右の端へ、清蓮院の息子を左
の端へ、多勢を其間へ立たせて手を繋がせました。少し
場所が廣過ぎたので、榊の枝を握つてゐる猿と、躑躅の
株を掴んでゐる猿とは、腕が抜けさうだと言つて、泣き
出しました。けれども、かうして猿の紐を造つて置いて
そして番號を呼ばせますと、うまく順序がついて番號が
呼ばれました。皆な数は三十四疋でありました。
「三十四疋です。今日は子供が多いから、少く見えたの
です。」

「ア、さうですか、どうも有難うございました。法性院は頭を下げて叩頭をし乍ら、此の三十四疋に、此間の猿廻しの話を少し聞かせてやつて下さいませんか。」と申しました。

「では皆さん、あの向ふの柿の樹へ参りませう。あそこへ行つて、柿を一つづつ食べて、それから、私が猿廻しのお話を致しますから……」

「チョンが、さう言ひますと、卅四疋の猿は大喜びで柿の木の方へ走つて行きました。法性院もチョンも一緒に走りました。柿の木には、まだ澤山の柿があつたので、それを一つづつ食べて、それからチョンの話を熱心に聞きました。」

「皆さん、今日は、あなた方の質問を受けてみますと、遅くなりますから、私、すんすんお話を進めて参ります。どうぞ静かに終りまでお聞き下さいまし。……皆、皆さんはかうして何の不自由なく山の中で、楽しく暮してゐるなさは、何よりもお目出たい事です。私などは、幼い時に人間の家へ伴れて行かれたのですから、もう今は

雪の中や雨の中に二日もゐると、風邪を引いて死んでしまふ程弱くなつてしまひました。つまり弱い人間の中に居ますから、弱くなつたのです。所が私よりも、もつとつと可哀さうなのは、猿廻しの所に養はれてゐる猿君達です。此間も此所でお話を致したのですが、私のゐる家へ猿廻しが来たので、私はその猿廻しに飼はれてゐる猿君から、海の話や町の話詳しく聞きました。」と言つた時、一疋の小猿が、

「海ッて、どんなものですか。」と不意に大きな聲で訊きました。すると法性院は、
「黙つてゐろ！海といふのは、この前を流れてゐる谷の十倍もある、水の流れてゐる所だ！」と叱りつけました。するとまた一疋の小猿が、

「町ッて何ですか。」と尋ねました。

「馬鹿だなア、町といふのは、あの向ふの草薺の屋根のやうな家が五十も百もある所だ。日本には大阪だの東京だのといふ大きな町があつて、其所には家が百も二百もあるんだぞ。人間だつて千人も千二百人も居るんだぞ！」法性院は一番年寄の猿だから、賢さうに、さう言つて叱りました。すると三十四疋の猿は皆な小聲で、

「海ツて大きなもんだなア。あの谷の十倍もあるんだつて……町つて賑かな所だなア。人が千人も居るんださうな。まるで村のお祭りみたいぢやないか……」などと囁きあひました。

毛の間を蚤が一疋這つたので、急いでそれを咬み殺したチヨンは、更めて話を續けました。「その猿は四國といふ海の向ふから舟に乗つて大阪の町へ渡つて來たのだが、もう一疋の猿は大阪から直ぐ東京へ伴れて行かれて、淺草の花屋敷といふ所で、お芝居をする事になつたのださうです。芝居といふのは猿が人間の着物を着て、人間の眞似をする事です……其時のお芝居は、忠臣蔵といふお芝居で、山崎街道で定九郎といふ悪者が、與一兵衛といふ爺さんを刀で殺す芝居ださうです。」

チヨンが、さう云つた時、一疋の小猿は、わアーツと泣き出しました。大ぶん大きな雌猿も、ぶる／＼と身體を慄はせながら、

「人間が人間を殺すのですか。まア呆れた事だ。まア呆れた事だ、まア。」と云ひました。「人間は人間を刀といふもので斬殺すんですよ。まア／＼我慢して聞いて下さい。御

互ひのやうな獸には同じ仲間同志で殺し合ひをしたなら、それは「友食ひ」と云つて獸の精神に背いたものとせられるんでせう。所が人間といふ奴は本當に恐ろしい事をする者で、仲間同志で盛んに殺し合ひをするんださうな。殺し合ひをするばかりか、年がら年中お芝居といふのをやつて、人殺しのまねをするんだつて……。所がネ、その四國から伴れて來られた猿は、悪者の定九郎といふ人間の眞似をしろつて人間に言はれたんださうな。四國猿は矢張り我々と同じ猿だから、何ほ何だつて、人が人を殺すといふやうな、そんな恐ろしい馬鹿けた眞似は出來ないと言つて、人間が被せてくれた鬘といふものを、五遍も六遍も取つて投げたんださうなが、たうとう無理やりに頭の上へ鬘といふものを括りつけられて、それから羽二重の黒紋付といふものを着せられて、博多の帯といふものを腰へ巻きつけられて、其の帯と着物との間へ、長い刀をさゝれてしまつたのです。それから四國猿は、可哀さうに定九郎といふ泥棒になつて、人を殺す眞似をさせられたのです。けれども何と言つたつて其奴も吾々と同じ猿です。苟も大日本山國に産れた猿です！如何に眞似事とは言へ、人を殺すといふや



うなそんな殘刻薄な事は出来ない、……と思つたので、お芝居が始まると同時に、
その猿は多勢の見物人の頭の上を跳び越えて、表の町へ駆け出して行つたのです。表
の町には多勢の人間が、芝居だとか活動寫真だとか、玉乗りだとかを観に来た人が、
うよく／＼してゐたんださうな。其所へ四國猿先生、ちよん猫といふ聲を被て、黒羽二
重の五ツ紋付を着て、腰に刀をさして跳び出して行つたんでせう。多勢の人間共は、
吃驚したのしな
いのツて、皆な
大周章に周章で、
公園の中へ逃げ
込んだのださう
な。」

「さうか、そい
つは面白かつた



らうー」

と一疋の若い猿は齒齧を剥き出しながら言ひました。

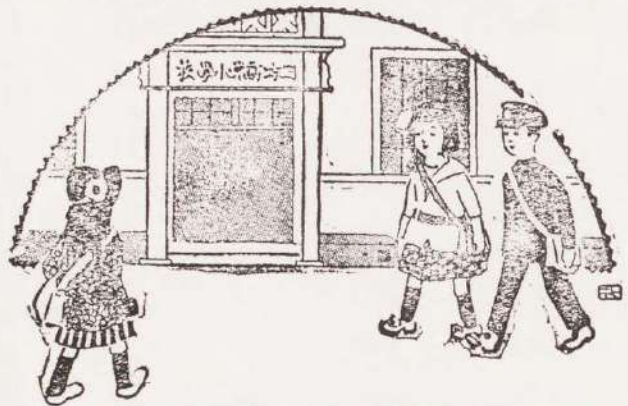
「それから町中は大騒ぎ……四國猿先生が走つて行くと、人間は皆な逃げてしまふんださうな。だから先生大威張りで、とつとつと、とつとつと駆けて来ると、後から猿廻しが走つて来て、(こら、待て定九郎!)と喚鳴つたさうな。今此所で捉まつては大變だと思つたので、すんくすんく、町を走つてると、向ふの小さい小屋の中から巡査が出て来たんださうな。」

「巡査ッて何ですか。」と法性院は、チョンの頭の上から訊きました。

「巡査ッてのは、人間の中で、いつでも腰へ刀をぶらさけてゐる偉い人ださうな。その巡査が、小屋の中で書物を読んでると、俄かに表通りが騒がしいので、泥棒でも出たのか知ら?と思つて、外へ飛び出して見ると、泥棒も泥棒も大泥棒、二百年前に山崎街道といふ所へ現はれた小野九太夫の倅定九郎といふ大泥棒でせう。それを見た巡査は、さア大變だと思つて、いきなり腰の刀をすりと引抜いて、(こら待て定九

郎! かく申す拙者は警視廳巡査早野勘平なるぞ、親の敵だ、そこ動かぬ)と言つたのださうです。すると四國猿先生の定九郎も腰の刀をすりと引抜いたのです。そして早野勘平と定九郎とは、町の真中で大戦争を始めたのです。お金を出して活動寫眞やお芝居を観に行かうとした連中は、(こいつは面白い、定九郎しつかりしろ、勘平負けるな……)そりや後から猿廻しが来たぞ、捉まるな。向ふから野良犬が来たぞ咬まれんな)と言つて、人間共はワアワア騒ぎ出したのです。東京の町中は俄かに大騒ぎになつて、皆な淺草の方へ大風のやうに押寄せて来たのです。所が定九郎先生は、勘平さん達とつまらない戦争をしてゐては、四國へ歸る事が出来なと思つたので、不圖振向いて見ますと、電柱といふ枝のない木が町に生えて居たのださうな。それを見た定九郎先生、いきなり其の電柱に飛びついて、するくつと上まで登つて行くと、勘平さんも猿廻しも、其所までは上つて行けないので、下の方で皆な大きな口をあんぐりと開けて、定九郎先生の方を眺めてゐたんださうな。」

「面白い、それからどうした?」と法性院は肩を揺ぶりながら訊きました。



學校が始ります

學校の御支度は三越の品
 値が安く、丈夫な御用品
 三越にさへ御出で下さいませ
 ば、各種の丈夫な品の
 安い、學校の御支度品
 が立どころに調ひます



靴、袴は三階に、子供
 洋服、靴、帽子、鉛筆、筆、雜
 記帳、繪具等は四階にあります
 ◆◆四月四日から三越獨特の
 五月人形陳列會

東京市 三越呉服店 駿河町

◆日五廿日十は月四日六廿月三は日休定◆

「電柱を上まで登つて見ると、一町程向ふにも同じやうな枝のない電柱が生えてゐてその木と木との間には、細い金の紐が張渡してあるんださうな。こいつは面白いと思つて、定九郎先生は、その金の紐を傳つて次の電柱へ渡つて行くと、その次にも其の向ふにも、電柱の木が生えてゐて、どこまで行つても金の紐が張渡してあるので、定九郎先生は、大喜びですん／＼すん／＼その金の紐を渡つて走つたのださうな。それから、たうとう日の暮れる頃まで紐の上を渡つてゐると、いつの間にか家も人も何にもない、山の中へ來たのだツて……」

「さうですか、それはよかつたネ。」と三十四疋の猿共は安心したやうに一度に聲を揃へて申しました。

「それから其の定九郎先生がどうなるか、お話し致したいのですが、家の奥兵衛爺さんが歸つたやうですから、今日はこれで失禮致します。」と云つてテヨンは周章で柿の木を跳び降りました。

家の所では奥兵衛爺さんが、ぢつと、柿の木の方を眺めて居ました。

雀がちゅんちゅん鳴いてゆく、
春の朝はほんとに好い心持だ。
姉ちゃんもぼくも、
いいにほひの

ライオン

ねりはみがきで



歯をみがくのだ。
ぼくも姉ちゃんも、
ライオンねりはみがきが
大好きだ。



「金の星」第五卷第四號

大正十一年六月十二日
大正十二年三月六日
大正十二年四月一日發行
第一冊

（本號に限り 定價金四十錢 送料一錢）